

渡した。そこに扉がある。その向うに青々とした野菜畑がある。物干棹に抵く赤いものを干した小さな家屋がある。その前に路がある。

かれは厠を出て、手を洗ひながら、あたりに誰もいないのを見定めてから、五六歩向うへ出て行つて見た。あの扉さへ破れば、逃げるのに、さう困難でないのを見て、かれはいくらか安心した。『なアに、戦地でやつたことに比べれば、この位のことは何でもありやしない。』など、思つた。

かれは戻つて来て、以前腰をかけてゐた榻に矢張腰をかけた。

『放火は重いんだんべ。』

氣が附くと、かう誰かが言つてゐる。

『重いとも……』

『無期か、十年か？』

『死刑かも知れねえぞ。何でも重いつて言ふこと、俺ア聞いてた。』

『でも、死刑ぢやあんめい。』

『何うだかわかんねえぞ。』

田舎に生活してゐるかういふ人達は、法律のことなどには明るくないので、『死刑か？ 無期か？』と言ふことに就いて、いろ／＼言ひ争つたりした。かれは聞くともなくそれを聞いてゐた。

かれの腰を下した横のガラス戸からは、狭い中庭を隔てて、警察の母屋の間が見え、梧桐の深く茂つた緑色が見え、その上に深く澄んだ青空と明るい日の光線とが見えた。

巡査が二人ほど入つて来た。

兎に角、二階と三階とに寝た客に來いといふことであつた。で、三階の客が一人、二階の客が四人、揃つて巡査と主人との跡について行つた。かれも無論その一人であつた。かれ等は今度は長いテーブルの置いてある矢張腰掛の据ゑてある細長い狭い一間へと通された。

署長も部長もゐた。

三階の客が一番先に調べられた。かれは姓名を訊かれ記されてから、いろ／＼と當夜のことを訊ねられた。警官達は別に彼等を罪人扱ひにしなかつた。署長は莞爾と髯を捻りながら、しかもじろ／＼と鋭く人間の心の内部まで看破しなければ置かないといふ眼で、ちつと話をしてゐる人の一言一行を見た。『い、え飛んでもない。慌て、飛び下りて、こんな膝をすりむいたくらゐなんですから。』かう言つて、眞面目な顔をして、三階の客は足をまくつて見せた。

次ぎにかれの番が来た。

かれはわざと冷靜を保つた。宿帳に書いた虚偽の姓名を言つて、そして、自分が氣が附いた時には火は既に二階に廻つてゐたと話した。



『現役かね?』

『は……』かれの顔は緊張した。手を両側に當て不動の姿勢で立つた。

署長はぢつと長い間見詰めて、『いつから来て泊つてゐる——』

『一昨日です?』

『現役兵が何うして、さう長く外に出てゐられるのか。』

『請願休暇を貰つて來ましたから。』

『幾日間——』

『一週間……』

『すぐ電報できけばわかるんだが、本當だな?』かれは黙つて點頭いた。

『お前だな、稻荷前で、無錢飲食をしたのは——』

『無錢飲食をしたわけではありません。生憎財布を忘れて行つたものですから……』

『さうか、よし、隊は一中队だな。電報できゝ合せばすぐわかるから……』

かう言つて次ぎの客の番になつた。他の三人も矢張同じやうにして調べられた。別に難かしい事を聞かなかつた。やがて署長が出て行つたので、『これで好いんですか。』などと言つて、皆な揃つて出て行かうとした。で、かれもあとについて出て行かうとすると、部長は、『君だけは残つてゐて呉れ、もう少し

調べる必要があるから、』と言つてかれを遮つた。

かれの顔は眞青になつた。

二十九

午後一時過、かれは絶えず傍についてゐる巡査に言つた。

『便所に行きたいのですがね。』

『さうか。』

かう言つて、巡査はかれの後について中庭から厠の方へ行つた。例の若い巡査であつた。

かれは其後種々に調べられた。脱營兵であるといふことももう知られた。一昨日長い路を歩いて町に入つて來たといふことも、稻荷前で油揚屋の婆さんを捉へて無錢飲食をしたことも、何も彼も知られた。かれは訊問の度毎、呼吸も塞がるやうな苦痛と懊惱と戦慄とを感じた。今はもう一途あるのみである。逃遁の一途あるのみである。

大便所の中に暫く入つてゐてやがて出て來たかれは、そのまゝ黙つて、そこにある手水鉢で靜かに手を洗つてゐるが、元の方へ行くと見せかけて、いきなりスタスタと別の方へ行つた。何をするかと思ふと、敏捷なかれの手は、さつき見て置いた扉を明けて、そのまゝ追かけて來た若い巡査を突き飛ばして、



野菜の島の方へと一散に走つた。

向うに通じてゐると思つた路は、其處に行つて見ると、柴垣で遮られてゐるので、かれは其處でちよつとまごまごした。その間に巡査は剣を鳴らしてあとから追ひ附いて来る。後から組み附く振りほどく。かぢり附く。擲る。それは唯だ瞬間であつた。二人は聲も立てずにこけつまるびつしたが、かれの爲めに好運なことは、かれの體の凭りかゝつた垣の杭が、古く朽ちてゐて、ぐらぐらと向うへ倒れかけたことであつた。それにかれば一氣に巡査に押されてゐた。かれと巡査とは、やがて一緒に重り合つて杭と共に向うに倒れた。

それは町の裏通りであつた。

一度は下に組み敷かれたかれも、力が強いので、忽ち巡査をはね返し、擲り、蹴り、振り切り、振り放つて、一散にその裏通りを向うへと走つた。

『逃けた！ 逃けた！』

あとから追ひかけた巡査は、始めてかう大きな聲を立てた。

『逃けた！ 逃けた！ 犯人が遁けた……』

かういふ呼聲が靜かな一時すぎの裏通りに長く續いた。

通りには人が二三人通つてゐた。誰も皆な振り返つて見た。ある家では、其處の細君が子供を負ひな

がらびつくりした顔をして見てゐた。ある家では、聲をきゝつけて、何事かと驚いて主人が出て來た。人々は服を泥だらけに制帽も何處かに失つた一人の巡査が、『逃けた！ 逃けた！』と呼びながら走つて行くのを見た。

『何だ、何だ！』

彼方からも此方からも其の大聲を聞いて人々が出て來た。向うに遠く半町ほど隔てゝ、一人の男がこれも矢張帽子もかぶらずに跣足で走つて行くのが見えた。

『昨夜の放火の犯人だ！』

かう巡査は矢張走りながら呼吸も絶え絶えに言つた。

『放火の犯人！』

人々は目を睜つた。

その時分には、警察でももう大騒ぎになつてゐた。『逃けた！』といふことと、『いよく犯人はあいつだ！』といふことと、『それ遁すな、』といふこととが一緒になつて人々の頭に上つた。犯人の遁けて行つた跡から、巡査も行けば部長も行き署長も行つた。其處に大勢集つてゐた昨夜の客達も出て行つた。

しかし戦地で鍛へられ演習で馴らされたかれの足は非常に早かつた。遁ける者と追ふ者との間の距離は次第に遠く遠くなつた。かれはあるところまで行つて振返つて見たが、それからは少し足を緩めて、



苦しきうに呼吸をつきながら歩いた。そこはもう島で、あたりには人家がなく、右には稻荷社の暗い杉森がこんもりと指さゝれた。

追ふ者と遁ける者との間に横はつてゐる距離は何うする事も出来なかつた。向うから誰か廻れば好いがなと思つても、さういふ間はなかつた。かれは川に架けた橋を渡つて、麥島の黄く熟した中についてゐる路を横ぎつて、それから停車場の向うに見えてゐるレールの路の方へと走つた。

町ではその噂が忽ち到るところにひろがった。電話は警察署から彼方此方へとかけられた。停車場へかゝつた時には、事務を執つてゐた驛員が電話口に出たが、それとときと、『大變だ、大變だ。昨夜の火を放けた犯人が此方へ遁けて来たさうだ。』かう言つて驛長に報告すると共に、そのまゝ走つて場外へ出て行つた。丁度その時、要太郎は島から汽車のレールを越えて、小松の生えた赤土の小さな丘陵の起伏した方へ行く路にその姿を見せてゐた。

『あれだらう？』

『さうだ、あいつだ。』

『のんきさうに歩いてやがる！』

其處に集つて出て来た驛長や助役や驛員達はこんなことを言ひながらそれを見てゐた。踏切の少し先のレールのところをかれは越えて行つたのであつた。

『一體何者だ！』

『脱營兵だよ。』

『脱營兵！』

助役はかう言つて、『相馬屋に泊つてゐたのか？』

『さうですとさ！』

『それぢや、物でも盗らうと思つて火をつけたんだな。』

『さうでせう。』

こんなことを言つてゐる中に、かれの姿は向うの村に通ずる路に出て、それから島の中をグングンと丘の中の方へ進んで歩いて行くのが見えた。初夏の午後の日は美しくあたりを照した。

追ひかけて来た人達は、それと接觸を保つてゐるが、此方から見ても、何うすることも出来ないやうに思はれた。かれ等もレールを越して此方へとやつて來てゐた。巡査達の白いズボンと、日に光る劍とが鮮かに見えた。大勢集つてついて來てゐる人達も見えた。

少し経つた頃には、追ふ者追はれる者の現場よりは、却つて町の噂の方が大袈裟になつてゐた。そこからそこへと傳へられたその噂は、段々募つて、『遁しちやならん、それこそ町の恥辱だ。一體、警察の奴等がまごまごしてゐるからわりいんだ。遁すツていふことがあるもんか、』などと言つた。到るところ



その噂ばかりで、事件のあるのを好む彌次馬は、其處からも此處からも出て行つた。かれの遁けて行つた裏通りは、人で一杯になつた。

「巡査とかれと取組んでこけつまろびつした破れ垣のあたりにも、人々が大勢来て集つて見てゐた。」

『此處から遁けたんか。』

『さうだ。』

『こゝを破つて遁けたんだな。……は、ア、成るほど警察の裏だ。』

こんな事を言つて見てゐた。其の現場を見た細君は、『何事が始まつたかと思ひましたよ。ばたくつて言ふ音が通りですから、何事だと思つて出て見ると、大きな男が遁けて行くぢやありませんか。そしてあとからお巡りさんが追つかけて行くぢやありませんか。吃驚したにも何にも……』など、話した。青年も走つて行けば、子供達も走つて行つた。其日の稼業をそつちのけに急いで出て行く人などもあつた。

『兎に角遁すな。遁しちや町の名折だ。』かう誰も彼も言つた。

裏道から川にかけた橋を渡つて、麥島の中を通つて、レイルを越えて、犯人と接觸を保つてゐる追手の群のゐるところまでは、群集が陸續として絶間なく續いた。ある野菜畑は荒され、ある麥畑は蹂躪され、レイルの前の小川の畔の草原はしとゞになびき伏した。

丁度要太郎が丘の上にグン／＼登つて行く時分、避難所の奥で働いてゐたお雪は、始めてその噂を聞

いて、はつとして顔色を變へた。かの女の顔は見る／＼眞青になつた。『まア……』とも言はなかつた。しかしかの女は黙つてゐた。深くその秘密を胸に包んでおくびにも現はさなかつた。

稻荷前の油揚の婆さまは、

『え、あの兵隊の奴が……』

と呆れて、

『そんぢや、金なんか一文だつてなかつたんだな、野郎。野郎、初めから喰ひ倒すつもりだつたんだな、太い野郎だ。』

『とれねえぞ、もう……』

隣りの婆さまがわざと冷かすやうに言ふと、

『ほんまだ。馬鹿な目に逢つちやつたな。』倒された錢の額を數へて見て、『四十二錢、馬鹿見た。ほんに馬鹿見た。太い野郎だ。どうも、變な野郎だとは俺も思つただア、……圖太い奴だ。……あ？ 兵隊屋敷を突ツ走つて出て來やがつたんか。えらい目を見た。……でも、なア、相馬屋のこと思へや、大難が小難だ。』

『それはさうともな……』

『でもな、あとで、何うかして取んねえぢやなんねえ、野郎だつて、親類位あんべい。だから、今朝



早く警察へ言つて置いた。』考へて、『昨夜遅くなつても、取りに行けば好かつた。』  
『ほんによ。』

その頃には、追跡隊は既に大勢になつて、丘陵の中に逃げて入つて行つたかれのあとを追ひかけて行つてゐた。其處は小さな赤く禿けた丘が處々にいくつとなく起伏してゐるやうなところで、その丘をめぐる、畠道や村道が混り合つたり纏れ合つたりしてついでゐた。一つの路はM村に、もう一つの路はH村に、それと交叉して、大きな縣道が山の中のR町へと向つてつけられてあつた。

追跡隊は犯人の遠く遁け去るのを防ぐために、一方はM村の路を、一方はR町への街道を塞いだ。

R町への街道の方へ行つた隊の中には部長がゐた。『この二つの路さへ塞いで了へば、やつこさん、何うにも出来やしませんよ。何方へも出られやしませんから。これで押つめて行けや、袋の鼠も同然だ。』など、言つて笑つた。

犯人と接觸を保つてゐる方の群集は、要太郎の姿が或は丘の裾の方へ、或は丘から丘へ續く路へ、萱や薄の青く生えてゐるところへと段々動いて行つてゐるのをとめて見失はないやうにと心がけた。要太郎は今ももう走らなかつた。かれは靜かに歩いた。時には大勢集つてゐる群集の方を眺めた。其間には、汽車が白い烟を眼下の野山に漲らして、T停車場へと入つて行くのがかれの眼に映つた。

『それ、何處かに見えなくなつたぞ。』

『何處かへ行つたぞ。』

時には、群集はこんなことを言つて騒いだ。しかし、暫くすると、かれの姿は、あんなところと思はれるやうな路も何もない丘の上のところにはあらはれた。

かれは跳足で遁けて來たので、既に處々で岩角などに觸れて、血が二三ヶ所から滴り落ちてゐた。かれはをり／＼立留つて考へた。何うかして逃げて行く道を、ほつと呼吸のつけるところまで行く道を……しかし後からの追跡を片時も念頭に置かずにはゐられないかれに取つては、その群集からかれの姿をかくすといふことは容易でなかつた。

そればかりでなかつた。かれはをり／＼翻つて、一昨々日から自分に絡みついて來た運命が、たうとう自分をかういふ窮地に陥れたといふことを考へた時には、かれは何も彼も冷笑したいやうな氣分になつた。かと思ふと、生に對する執着が、強い力でかれに蘇つて來た。遁けられるだけは遁けて見ようと思つて、かれはまた路を丘の陰の方へと取つた。

をり／＼お雪のことが思ひ出された。もう何も彼も知れたらう。それと聞いて、かの女は吃驚してゐるだらう。呆れてゐるだらう。かう思ふと、かれは何も彼も見事に破壊されて了つた自分の生活を發見せずには居られなかつた。もう、お了ひだ！』かうかれは思つて頭を振つた。急に、何うにもかうにも堪らなくなつて來たといふやうに、顔に手を當て、泣き出した。



『誰がわるいでもない。俺がわるいんだ！ 仕方がない。』  
 歎息しながらかれは獨語ちた。

かうもすれば好かつた、あゝもすれば好かつた。かう種々と後悔の念も湧くやうに起つて來たが、今更そんなことは少しも役に立たなかつた。

かういふ間にも、追跡は愈々迫つて來たので、かれは慌て、かけ出した。

丘から丘への道をかれは縦横に縫ふやうにして歩いた。かれは小松の中に身を隠して見たり、岩穴見たいなところに入つて行つて見たり、M村の方へ行く路の方へ下りて行つて見たりした。しかし、暫くして、そのM村の方へ行く路にも、R町の方へ行く路にも、追跡隊が既にぐるりと取巻いてゐるのを發見した時にはかれは絶望した。かれは既に周圍に網を張られた勞れた且つ飢ゑた獸に似てゐた。

『なアに、その時は突破してやれ！』

かういふ烈しい心の状態にもをり／＼かれはなつた。

かれはしかし飽くまで遁れることを考へた。M村、H村、R町——すべてその方面は駄目らしいが、この續いてゐる丘から丘を越えて行つたなら、何うにか遁ける方法があるかも知れなかつた。それに、長く潜伏してゐれば、夜になる。夜になれば——闇夜になれば、いかやうにも、この網の目をぬけ出して行くことが出来る……さうだ。それが好い。さながら天の佑でも得たやうに、かれは喜んで、また丘から丘へと越して行つた。

丘と丘との間には、蘆や萩や藻や蒲などの岸に茂つた小さな池がさながらかくされてあるかのやうなところ／＼に湛へてゐた。剖葦が頻りに鳴いた。

一面を取巻いた山の翠微は、次第に午後の濃淡の多い影を帯びるやうになつた。丘から先には低い丘が重り、其上に壁の深く刻まれた山が連り、更にその上に高い／＼屋梁のやうな山嶺の連りが聳えた。雲が其處から渦を巻いて湧き上つた。

何事もないやうに、人々の大勢騒いでゐるのも知らないやうに、野の道には飴屋の笛が聞え、農夫の唄が聞え、麥刈の男女の群が見えた。山近い村からは、塵埃を焼く烟が白く静けく靡き上つた。

かれが一刻も早く夜になるのを望むのと正反對に、追跡隊は、是非とも暗くならない中に犯人を捕縛しなければならぬと思つた。R町の路の方から押寄せて來た群集は、中でも殊にその念に驅られた。

『ぐづ／＼してゐちや駄目だぞ。』

『一人ばかりの犯人を半日かゝつて捕へられないツていふことがあるか。』

かう人々はいきまいた。町での騒ぎは、愈々大きく、火の手が盛んになつて、是が非でも今日の中に逮捕してはなければならぬと誰もかれも言つた。T町の重立つた人達は、皆な出て來た。町長も助



役も自轉車を飛ばしてやつて來た。電報でM市の兵營に照會したら、三日前から脱營してゐる兵士があるから大方それだらうと言つて來たといふ新しい噂なども傳へられた。

接觸を保つてゐる方でも、次第に近く押し寄せて來てゐた。

しかし、五時少し過ぎた頃になつて、犯人の行方が不明になつたのが人々を不安にした。何處に行つたか、その姿が急に見えなくなつた。今まで見えてゐた姿が、丘を越すなり路に出るなりしなければならぬその姿が……。

で、追跡隊の人達は、かれの歩いた丘から丘へと行つた。彼方此方と残るくまなく捜し廻つた。R町の路の方の人達も此方へとやつて來て捜した。

『何うしたらう？ 不思議なことがあるもんだな。』

『本當だ。』

『つい、さつきまで見えてゐたんだがな。何處にも行くわけはないがな。』

『確かに隠れてゐるんだ。ゐるに違ひない。』かう署長はせき心になつて言つた。

人達はそれからそれへと捜し廻つた。一番最後にその姿の見えてゐたあたりへは、警官達が代るくへ行つた。

白いズボンが其處にも此處にも見えた。追跡隊の中には、紫の色をしたT町の町旗などが翻つて見ら

れた。

それは丁度さつきかかれが歩いてゐた丘の路から少し下つたやうなところであつた。下には路に臨んで小さな池があつて、その半面は赤く夕日に彩られてゐた。

小松の中を一つくさがし廻つて歸つて來た部長は、

『何うもゐない。』

『不思議だな。』

『本當に不思議だ。』署長も手を拱いて、『それも、深い森があるとか何とかなら、その中にまぎれ込むツて言ふこともあるけれど、別に隠れるにも隠れるやうなところがないんだからな。』

『本當だ。』

『下に下りたんぢやないだらうな？』かう傍にゐた町の有志が言つた。

『いつの間にか、非常線を破つて、遁け出したんぢやないかな。』

『そんなことはない。それは確かでない。』かう部長も斷言した。

丘の附近には、かなり大勢の群集が押寄せて來てゐた。皆なわい／＼言つて騒いだ。

『もう少しさがして見るんだ、仕方がない。』かう署長は命令した。



夕日の薄赤くさし添つた小さな池、それに添つた路、二三本生えた小松、そこを追跡隊の人々は度々通つた。蛙が靜かに鳴いてゐた。

蘆や荻や藺の新緑が岸を縁取つて、黒くなびいてゐる藻の上に白く點々として花が咲いた。靜かなしんとした池の面には、少しの皺も小波も立たずに、夕暮の深い碧の空が捺したやうにはつきり映つて見られた。白い雲の影も靜かに落ちてゐた。

池を縁どつた小松の向うに、淺くはあるが一ところ雜木の林があるので、其處はちよつと影が濃やかに何となく暗く陰氣に感じられた。初夏の頃によく見る山木瓜の赤い花などがポツポツ咲いてゐた。

三度目にその岸を通つた時、部長の眼にちよつとある物が映つた。それは不思議な光景であつた。それは人の頭だ。水に浸つて首だけ出してゐる人の頭だ。眞白な、死人のやうな、それでゐる鬚の生えた、五分刈頭の……。部長は突然叫んだ。『居た、居た、居た！』人々は飛んで來た。水中での格闘が暫し續いた。

T町を騒がした脱營兵の放火事件、それは随分長い間地方の人達の記憶に残つてゐた。M市の新聞は二號活字で、大々的にその面白い記事を連載した。要太郎の故郷でも、一時はその話で持切つた。

翌年の十一月の初めであつた。M市の新聞はかれが愈々何日を以て銃殺されるといふ記事を掲げた。何等か後の罪人のみせしめといふ意味もあるらしく、東の練兵場の射場で、何日何時に執行するといふことまで報道されてあつた。M市はまた新しい Sensation に燃えた。誰もかれも好奇の眼を睜つた。何處でもその噂で持切つた。

しかし、東の練兵場で、公衆の前に執行されるといふ報道は、新聞記者の過つた報道であつたか、それともかうした Sensational なシーンが人心にある悪影響を與へる事を恐れて途中で其議を翻したのか、それは何方だかわからないが、兎に角、其時刻に、それを見に、東の練兵場に出かけて行つた大勢の人達は、皆な失望して歸つて來た。練兵場はいつもの通りで、何も變つたことはなかつた。

其曉であつた。黎明のオレンジ色の空が美しく朗かな朝を豫想させる頃、銃を持つた一分隊計りの兵隊の姿は、指揮者の命令の下に一列に或る間隔を置いて嚴かに並んで見られた。夜はまだ全く明け離れなかつた。山近い曉の空氣は鋭く人々の肌に染みた。かれ等はかれ等の前に既に適當の距離を隔てて置かれ



てあるある黒い標的を見た。

『折敷け！』

ばたばたと兵士達の蹲つて、銃を構へ装填する氣勢が微かに曉の空氣の中に見えた。暫くしんとした。

『狙へ！』

つゞいて第二の聲がぬゝつた。又しんとした。

曉の明星がきら／＼した。

『撃て！』

凄じい一齊射撃が起つた

## 再び草の野に



## 再び草の野に

### その一

一

麥の畠や水田や村落やまたは、その間を縫つてゐる塵埃の白く颯る路などで蔽はれてゐなかつた以前は、野はもつと荒涼としたものでつた。草藪が草藪に續き、林が林に續き、水は唯低きにつれて自由に流れ、鳥は靜かに春の花の埋れた中に鳴き交はし、獸は野分のあとの亂れた草を踏み分けて走つた。偶々その廣い野の中を此方から向うに横ぎつた長い路があつたにしても、それは深い萱や薄で蔽はれて、通つて行く旅客も稀に、午後の日影は徒らにさびしく樹間から線を成してさし込んで來るばかりであつた。春になると、雲雀は高い聲でその純な戀を名告るやうにして空に嘯り揚つた。

恐らく今のやうに、野から路へ、路から土手へ、土手から廣く溶々と流れた川へと下つて、周圍を遠



く環のやうに繞つた山々の白い雪を眺めて、

『雪よ、雪よ、山の雪よ。』

と叫ぶものなどもなかつたであらう。山は唯冬が来たために白く輝き、野は唯春が来たために麗らかに霞んだであらう。草藪や林は西風の吹くためにざわつき、雪解の水の押し流して来るために、あたりは洪水に浸されたであらう。そしてそれを拒ぐものもなしに、水はただ思ふまゝに氾濫したであらう。従つてその水脈は幾筋にもわかれて、昔の工の渡頭のあるあたりも、時に由つてはいろいろに變つて行つたさまがそれと點頭かれて考へられた。今でも好奇の旅客は、その昔の渡頭の址を其處か此處かとたづね佗びて、或は村落と村落との間に、或は小さな残つた流のデルタに、或は古い社の残つてゐる一帯の低地に、てんでにその新しい發見を誇つた。昔の野の址をたづねやうとするには、今は古い寺、祠、墓、さうしたもの他には、最早何も残つてゐなかつた。

村落や町の中をりく／＼残つてゐる古い寺、またはその古い寺の中に残つてゐる墓や記録、それは二百年前まで溯つて行つてゐるが、しかもそれは猶ほはつきりと昔の野のあとを想像させるには物足らなかつた。それよりも、蘆荻の一莖が、または漕へ残された錆びた沼の水が、そこに冬の來るたびにやつて來る渡り鳥が、この野を行くものに昔の野のさまをあざやかに眼の前に描いて見せた。

## 二

林から野に出ようとするとところに、ある時、渡り鳥を獲るための網が張られた。

かれ等はその近くにある村落からやつて來た。一人は竿を擔ひ、一人は網を抱へながらやつて來た。それは初冬のやゝ寒い夕暮で、そこに網を張つて置いて、朝早くその獲物を獲ようとしてゐるのであつた。西風がうすら寒く野の杜を鳴らして、ガサゴサする丘のほとりの薄や萱に夕日が薄く微かに残つてゐた。

『何うだ、來さうだな。』

『きつと來る……この風に空の具合では屹度來る。』

こんなことを言ひながら、くつきりと晴れて暮色に染つた空をかれ等は仰ぎ見るやうにした。西風の立つた具合といひ、夕暮の寒い空氣といひ、薄や萱のガサゴサするさまといひ、一つとしてかれ等を満足させないものはなかつた。かれ等は明朝の獲物の數を頭に浮べた。

かれ等は先づ網と竿とをそこに投げ出して、その傍に蹲踞んで、腰から煙草入を出して、石をすつて、ホクチに火をつけて、そしてスバสบバと旨さうに煙草を二服二服吸つた。

『今年は來ようがいくら遅れた。』



『でも、昨夜なんか随分来たぜ……。家の周囲の樺に來たにも來たにも……。黙つて寢て聞いてゐられねえ位に來た。』

『今が丁度好いんだ。今夜は屹度來るに違ひねえ。』

かう言ひながら、かれ等は立つて、先づ竿を立てた。

それは三間位にわたる長さの竿で、それを兩方に立て、そして今度は持つて來た網をひろげた。それは細い黒い糸でつくられな大きな網だ。

一時間位かれ等は其處にゐたであらうか。すっかりその準備の出來上つた頃には、日はもう残りなく暮れて、オレンジ色の夕照も次第に薄く、遠くに光つて見えてゐた細い川の流ももう見えなくなつてゐた。

かれ等はまた話した。

『寒くなつたな。』

『本當だ。……これから、雪になるのはもうちきだ。』

『寒に入つたら、また日振でもやるかな。』

『あれも好いが、寒くつてな。』

『そんなことを言つてゐちや、お大名だ。今年も獲物がありませんぞ。』

『てめいは行くか？』

『行く。』

で、やがてかれ等は靜かに満足して家の方へと向つた。かれ等は今夜は眠られぬであらう。渡り鳥の無數にやつて來る羽の音、ざわざわと騒ぐ氣勢、葉と共に枝から枝へ集り落ちる音、それを聞いただけでも、自分達の網に鳥の集るさまが想像されて、睫を合せることが出來ないであらう。日はいつかとつぶり暮れて了つた。路傍の庚申の石も、藁鳩も、丘の畔の薄も何も彼も全く夜の暗黒の中に包まれて了つた。晝でさへそれとはつきり見えない細い黒い糸の網は、かうして、夜を、靜かな夜を、その丘のほとりに張られて残された。さうした危い陥穽のあるとは夢にも知らずに遠くからやつて來る渡鳥は――。

三

『世話はするだで、何うかゝるて下され。誰が死んでも、佛のために、お經の一つも讀んで貰ふ方丈さんがるねえでな、此村には――』

かう言つて引留められたのは、六十二三の老いた僧で、一生を旅から旅へと鈴を鳴らし、珠數を手まさぐつてやつて來たやうな人であつた。五六日前、かれは川を渡つてそこに旅にやつれた姿を見せた。

それを村――村と言つてもまだ十二三軒しかない聚落の一軒の主人が、丁度その母親の初七日の供養に當るといふので、それを無理に頼んで、草鞋をぬがせて、そして家に上げて讀經をして貰つた。とこ



ろがそれをき、つたへて、そこからも彼處からもかれを頼みに來た。最初に野と戦ひ、西風と戦ひ、洪水と戦つたやうな新しい開墾地では、醫師も必要だが、それ以上に死を弔つて貰ふ僧が必要であつた。一月以上も留められてゐた後、かれは其處に永住するやうにと幾重にも村の人達から頼まれた。

僧は川の畔りに遠くない小さな掘立小屋のやうな寺に置かれた。

其處には村の人達がいろいろなものを持つて來た。米を負つて來るものもあれば、味噌を持つて來るものもある。薪を拾つて來るものもある。本尊がなくてはと言つて、村の頭立つたものは、何處からか彌勒佛の小さい金佛を持つて來て、それを屋の中央に壇をつくつて据ゑた。

そこからは、朝に、夕に、絶えない讀經の聲がきこえて來た。

それは大抵法華經の普門品の一節であつた。

村の人達はその讀經の聲に促されたやうにして、またそれに力づけられたやうにして、辛い艱難な勞働を續けた。生れたものは働いてそして死んで行かなければならなかつた。月はさびしくかれ等の上を照し、星はきらきらと天上の榮えを語つた。

村は大きくなつて次第に富み榮えた。立派な寺の本堂もその旅僧の數代の後には出來た。山門に達する路には、大きな古い杉の並木が繁り、鋪道が出來、墓場には村の人達とともに、その旅の僧を始めとして、歴代の僧の丸い墓が立てられた。名もない草花は咲いて散り、小鳥は好い聲を立て、囀り交はした。

旅僧の來た以前からあつたものか、それともその後の川の洪水のために出來たものか、それは記録がないので、何方だかわからなかつたが、その寺から少し離れて、蘆荻の深く繁つた錆びた小さな沼がをりをり夕日に輝いて見えた。今はもうあたりはすっかり開けた。路も縦横に村から村、町から町へと通じた。乗合馬車がラッパを鳴らして通つて行つた。自轉車なども滑かにその街道を軋らせて行つた。

『何でも、その沼の出來たのは、そんなに古いことではないといふことです。さア、寺とどつちが先だか？ 多分寺の方があとだらうと思ふが、百五十年はまだ經つてゐますまい。』

かう村の人達は言ふけれども、その沼はもつともつと昔の、原始時代からでもあつたかのやうに、錆色にどんよりと湛へて、藻も底深く氣味わるく繁り、いつもさびしい空が何かの眼でもあるやうに憂鬱に映つて眺められた。そこでは鯉だの鰻だのが獲れた。

しかし夏は色々な水草が繁つて、水あほひや澤瀉や河骨などの花も咲き、赤い白い蓮の花も咲いた。そして冬になると、渡り鳥は今でもやつて來て、もう網で獲ることなどは出來なくなつてはゐるたけれど、それでも鴨、雁、鳴などが盛に下りるので、都から來る遊獵者の銃の音ををり／＼靜かなあたりに響きわたつてきかれた。

且町から大きなT川をわたつて、國を異にしたT町へと通ずる塵埃の多い白い街道は、この錆びた沼の右の岸を通つて、それから大きな治水工事の施してある堤防の上へとかゝつて行くのであるが、この



道路と沼との間に、一ところかなり広い地域を、水田にもせず、畠にもせず、唯、草藪にして残してあるところがあつて、そこには春はけんげや藪が一面に見事に咲き、雲雀が好い聲を立て、空に揚つた。

T川の大きな流を見にやつて来た人達は、大抵其處に来て、すぐのその前に堤防の長く連つてゐるのを目にして、その草藪の中に細く通じた路のあるのを選んで、そこを突切つて、一散に高い土手へと上つて行くのを例にした。土手の上からは、今だにあたりが荒涼とした野であつた時分を思はせるやうなさびしい大きなT川が溶々として流れてゐた。

帆の影さへそこには滅多には上つて来なかつた。

しかし何といふ廣々としたさびしさであらう。また何と言ふ荒涼とした眺めを持つてゐる川であらう。ところどころに砂洲をつくつて水は靜かに流れてゐるが、村落の所在を標示した森が散點されてあるばかりで、岸には何等川を彩る色彩もなかつた。

悠々として流れてとどまらず——そこに來ては誰でもさうした感に撲たれずにあるものは恐らくはあゝるまい。

急に上流で、物の轟くやうな音響が川に響きわたつてきこえた。

『ヤ、舟橋だ。舟橋があるんだ。』

かう誰も彼も思はず聲を擧げて言つた。その舟橋の上を、さつきの街道が、錆びた沼に添つた街道が、

車やら荷馬車やら乗合馬車やらを載せて、そしてT町へと通つて行つてゐるのであつた。

靜かに土手を下ると、そこに桑畑がある。また草藪がある。年々の出水に捨て去られたデルタがある。そしてその間に通じた折れ曲つた草路が、やがてかれ等をRの渡頭へと伴れて行つた。

## 四

その錆びた沼の岸にある舊い農家の一間を借りて、ある年、都會から一人の若い文學者がハイカラな美しい細君を伴れて來て暮した。

その文學者の蒼白い、瘦せた姿をしてゐるのに比して、その細君は色白く肥つて、髪を女優鬢に結つたりして田舎の人達を驚かした。いろ／＼な噂は時の間にあたりに傳へられた。二人が出来合ひの自由戀愛者であるといふこと、女は一二度は舞臺で役者の眞似をした人であること、男はまださう大してすぐれた作家ではないが、一二世に公にした作品が多少文壇の視聽を歎たしめたといふこと、夜は遅くまで起きてゐる代りに朝は十時頃でなければ起きないといふこと、始終夫婦喧嘩が絶えないといふこと、始めの中はそれを本當にして心配して仲裁してやつたが、段々それは喧嘩の後のいちやつきの色を濃厚にするためだとわかつて、今では誰も喧嘩をしても相手にしないといふこと、あゝいふ夫婦もめづらしいといふこと、朝など行つて見ると、一枚の蒲團に一枚の寢巻をかけて寝てゐて、そのだらしのなさ



言つたら此方で却つて氣の毒になる位であるといふこと、さうしたことがそれからそれへ語り傳へられた。それに、何うかすると、二人で一緒に、これも矢張東京からつれて来た大きな犬をつれて、手を引き合ふやうにしてそこ、と散歩してゐるさまが近所の人々の眼を歎たしめた。『何うだんべ、また、つるんで歩いてゐる。』田草を探りに出た上さん達がかう言つて手を留めて見てゐるものもあれば、『犬べい見せつけられて、妬けて、しやうがなかんべ。だから、あの犬は始終はッはッ言つて赤い舌を出して匂ひをかいてゐるぢやねえか。』などと面白さうに笑つて話す男などもあつた。それにまたその大きな犬は、かれ等にとつて、かうした他郷の、田舎の迫害から来るあらゆるものに對する有力な防衛の道具のやうに見えた。その犬はよく吠えた。學校歸りの子供達は、その犬に逢ふと、震へて足がすくんで、摺れ違つて通ることが出来なかつた。田舎にはさうした烈しい犬は何處にも見出されなかつた。

文學者に取つては、しかし、この幽棲は、その生活上またその思想上、決定的のものであつた。何うかしていままでの生活から浮び上がらなければならぬ。お互ひに新しい心の革命をしなければならぬ。更に優れた新しい努力を創作の上に試みなければならぬ。かう思つてかれは其處にやつて来た。一時、あらゆる烈しい都會の刺戟から離れて、新規時直しをやるつもりでやつて来た。次に、また以前から女に絡みつき纏りついてゐた他の男性の Love Affair から女を切り離して、完全に自分のものにするには、何うしても一時かうした生活をしなければならぬと思つてやつて来た。従つてその夫婦喧嘩は

いつもさうした昔の幽靈から起つた。

ある夜はひどく喧嘩して、女が家から飛び出したのを追つて、三里もある停車場近くまで行つて、伴れて戻つて来たこともあれば、もう遁けたものと思つて、失望落膽して、思ひ崩折れてゐるところに、ひよつくり思ひ返して女が歸つて来たことなどもあつた。その時は一夜中感謝のエクスタシーに陥つたやうにして男は女を可愛がつた。女はもうその文學者から離れることが出来ないうやうな情愛に伴れられて行つてゐた。

かれ等のゐる一間からは、その錆びた沼の一部がそれとのぞかれるやうに、または蘆や萩や蘭に半ば埋却されて了つてゐるやうに見えた。さびしい空が雲と一緒にさびしくそこに映つてゐる時もあるれば、夕日がわる赤く血のやうに沼を染めてゐる時もある。春の末頃から来てその年の冬に及んだかれ等の生活には、さびしいわびしい梅雨が鬱陶しく降り、一步も外出することの出来ないやうな泥濘がかれ等の心を埋め、やがてそれが濟むと、暑い暑い平野の夏の夕暮などは蚊帳のなかでなければ食事も取ることの出来ない蚊群の襲撃がかれ等を脅かした。かれ等は何遍そこを一刻も早く切り上げて都會に歸りたいと思つたか知れなかつた。否、もし他にかれ等を慰める沼のラスチックな眺めと、T川の涼しい夜風と、美しいお伽噺の中の姫を思はせるやうな水あほひや河骨や旨い廉い鰻や川鰈や、さうしたものがなかつたならば、とてもさう長くはそこに落附いてゐることは出来なかつたに相違なかつた。



かれには彼等の戀愛生活をかうした沼の畔りに置いて見るのがロマンチックな感じを起させた。錆び果てたとも言へれば爛れ盡したとも言へる二人の戀愛状態は、いかにこの錆びた沼と憂鬱な田舎とに伴つてゐたであらうか。そしてその穢く汚れた中に、あの美しい水あほひの花を咲かせたさまに似てゐたであらうか。女はいつもその紫の花を折つて來ては、男のせつせと筆を走らせてゐる傍に生けて置いた。

『この花を口ると、勇氣が起る。』

かうかれは女に言つた。

水鶏の聲も割葦の聲もかれを力附けた。あの盛んな割葦の齧舌と、その熱烈な戀こゝろと、水鶏のあの靜かな雄を呼ぶ鳴聲とは俱にかれ等に一種繪に似た戀の『詩』を夢みさせた。

かれはまたよく散歩に出かけた。かれは夕日に榮えた沼のほとりから、森の中に見えるその旅の僧の開基した寺の山門へと向つて歩を運んだ。そして山門のところに行くと、いつもかれは振返つて、沼と蘆荻とその向うにある自分の家とを見た。

かれはしかし旅の僧の傳説などは知らなかつた。誰もかれにその話をしきかせるものもなかつた。またこの附近が昔一面の荒野であつたこともかれは考へなかつた。かれは唯歩いて寺の中に行つた。

大きな銀杏の樹や、美しく赤く咲いてゐる百日紅がかれを其處に引寄せた。寺は寂としてゐた。何時行つて見ても、讀經の聲もきこえて來なかつた。

『チャック、チャック。』

かう呼ぶと、その犬は急いで飛んで主人の傍にやつて來た。

寺から土手に上つて行くその草地を、ある夜かれは女と犬とを伴れて歩いた。かれ等は夕暮のT川を見に行つて、餘り長く河岸で逍遙つて、そして歸りは遅く暗くなつて了つたのであつた。その草路に土手から下りようとするところで、かれは急に女に對する強い愛を感じた。いきなりかれは女に寄添つて手を握つた。女の手も心も熱かつた。彼等は家をも臥床をも何も彼も持つてゐる仲ではあるけれども、また家の中ではいかやうなことをしようとも差支ない仲であつたけれども、しかも今は家も臥床も持たない戀人同士のやうにして、唇を合はせたり、女の髪の毛の匂ひを嗅いだりしなければならなかつた。女は少しの間それを拒絶したけれども、しかも青草の匂ひと暗夜とがかれ等の周圍にあつた。かれ等は暫し其處に留つた。

暫くして、

『チャック、チャック。』

かう呼ぶ主人の聲がした。それまで戀の番人をしてゐた犬は、闇の中から二人に飛びつくやうにした。二人は靜かに街道から沼の畔りの方へと出て來た。灯がところ／＼にチラチラ點綴されて見えた。

『沼のかをりといふものがあるね。一種不思議なロマンチックなものだね。』



こんなことをかれは言つた。

しかし彼等の沼の畔りに於ける生活は決して楽な生活ではなかつた。約束した社から金が来ないために、または原稿が賣れなかつたがために、一月を全く財布に金なしに暮して了はなければならぬやうな時があつた。かれ等に室を貸してゐる農夫は、流石に都會でのやうに直接にはその間代を請求しなかつたけれども、しかもそれよりも一層わるい侮蔑と壓迫とをかれ等に與へた。時には鼻洩もひつかけないやうな態度さへ見せた。段々彼等は田舎の人達の汚なく腹黒く卑しい心の生活を知るやうになつた。

『都會に於ける孤獨は、孤獨そのまゝでゐることが出来るけれど、田舎での孤獨は、ぢつとして孤獨でゐることも出来ない。』

かうした言葉をかれはその感想の中に書きつけた。

やがて秋が來た。洪水の憂ひの頻々として傳はる凄じい風雨が來た。空は暗く低く錆びた沼を蔽つた。雨の一時歇んだ時に、土手の方に行つて見たかれは、T川が凄じい濁流を漲らして、平生のあの静けさは、さびしさは何處に行つたかと思はれるばかりに原始の状態に戻らうとして怒號奔漲してゐるのを見た。いつもの桑畑やデルタはすっかり水に浸つて、土手のすぐ下の草まで濁流に押し流されさうにしてゐた。しかしその凄じい洪水を豫想させた風雨も大したこともなくて過ぎた。つづいて晴れやかな、月のあかるい、垣根に轡虫や馬追のすだく、木槿のところ／＼に紅く白い秋が來た。天末にさびしい色ある雲の

靡きわたる時が來た。葉末の枯れた蓮の葉、菱の葉、蘆荻の葉、その上にさびしい秋の風が吹き渡つた。

かれが此處に來てから書き始めた長い小説は、一度は百枚ほど書いて破つて棄て、一度は何うしても纏らないために、一月ほども手を束ねてぶらぶらしてゐたが、此頃になつて漸く興が乗つて、段々思ひ通りに書けるやうになつた。今はかれは戀愛にのみ没頭してゐられなくなつた。また田園の迫害を相手にしてはゐられなくなつた。かれは兎に角それを書き終へて、そして一刻も早くこの憂鬱な生活から免れたいと思ひながら終日長く沼に面して坐つて筆を執つた。若い細君もその傍に黙つて坐つて、そして矢張一刻も早くその稿の出來上つて都會に歸つて行く日の近づいて來るのを待つた。夫が散歩に出かけて行つたあとでは、若い細君はよく其處で出來た原稿の紙數を數へた。

しかしこの頃の田舎の静かなシインは、かれ等に何とも言はれない快よさと楽しさとを與へた。かれは勞れては、よく沼に舟を漕いで行つたり、土手の下の草路のあたりを歩いたり、寺の奥の歴代の僧の墓の前にその姿をあらはしたりした。淡竹の藪を洩れてきこえて來る青編を織る機の音を靜かな心持で聞いた。『詩』がいつもかれの頭を流れた。

初冬の寒く晴れた日、これから四周を繞る山の雪が美しくならうとする日、その沼の畔りの家の前には三臺の車がさびしく置かれてあるのが小さく街道のほとりから見えた。西風はもう立ち始めた。沼の蘆荻はガサコソと鳴つた。渡り鳥の羽音は絶えず林から沼に向つて下りて行つた。沼には晴れた空が皸



を疊んださ、波の上にさびしく映つてゐるのが眺められた。

一臺の車には、かれ等の身のまはりのものが積まれた。古びて色褪せた大きな信玄袋、荒縄でからけられた柳行李の縁は破れて、中から外國の小説本が一二冊はみ出してゐた。汚れた寢道具は大きな淺黄色の風呂敷に包まれて、その上に積まれた。

期待して來たやうに、新しい心の革命もすることが出來ず、女の心も完全につかむことも出來ず、思つたほど感興の充實した小説も作ることも出來ずに、矢張渡り鳥の南から北へ歸つて行くやうに、時が來て、かれ等も再び都會へと出て行くのであつた。たまつた間代は、歸つてから送つてよこすことにしてこらえて貰つた。酒屋、米屋の勘定も待つて貰つた。侮蔑と罵倒とをあとに残してかれ等はそこから別れて行つた。

普通ならば、此處に世話して呉れた文學好きの青年位は、三里先きの停車場まで見送つて呉れても好いのであるが、それすら今は姿すらもそこに見せなかつた。

かれ等は唯、家の人達に挨拶して、そして車に乗つた。

『左様なら。』

『左様なら。』

それは家の人達に別れを告げる言葉ではなくて、沼や、草路や、蘆荻や、土手や、T川に別れて行く言葉

のやうな氣がした。一番先に若い細君の色の白い顔、次ぎにかれの髪の毛の長いやつれた姿、それにつづいて荷物を載せた車が三臺並んで靜かに街道の上に動いて行つた。犬はそのあとから路草を食ひながら走つたり留つたりして行つた。

晴れた碧い空には純白な雲が靜かに流れた。

かれ等の立つて行つた翌日は、冷めたい初冬の雨が降つて、土手の下の草路からは沼の蘆荻の白い花が半ば水に埋れ伏したやうに見えた。誰も通つて行くものもなかつた。

## その二

### 一

その草路と土手との間に、一筋の折れ曲つた小さな流が囁くやうに流れて、秋はそこに野菊やらみそ萩やら水引草やらがその影を醸したが、その流れの上の丘の一部を開いて、此頃、下等な煉瓦を焼く大



きな竈が二つまで出来た。

職工が五六人集つて、せつせとその竈の火を燃した。

低い二本の烟突からは、時には漲るやうに、また時には薄く靡くやうに眞直にまた横折れて黄い黒い烟が上つた。

小さな流には、板橋がかけられて、そこをかれ等の寝たり起きたりする低い掘立小屋から、職工達は土を畚に入れたり何かして渡つて来た。材料の土を運ぶトコロはまだ一條も出来てゐないので、かれ等は遠くからそれを運んで来なければならなかつた。

その掘立小屋の中には、夜は小さなランプがほつつりと一つついて、その下に燻つてゐる圍爐裏の火のをりく燃えあがるのが赤く闇を劃つて見えた。そこではあらくれた男が、三人も四人も集つて、廉い地酒に酔つて管を巻いたり、いろく儲け話をしたり、でなければ近所の女との色話をしたりして、後にはそれにも倦み勞れて、そして板のやうな薄い蒲團にくるまつて寝た。朝は霜が雪のやうに白かつた。

『えらく寒くなつたぢやねえか。』

こんなことを言つて、かれ等は井戸に行つて顔を洗つて、また圍爐裏の傍に戻つて来て、ぐつぐつ煮えてゐる大きな鍋の蓋を取つて見た。

『肴でも買つて来うや……。かうのべつに大根べい食つてゐちや、働けねえでな。』

『本當だ。』

『町まで行つて来うや。』一番若いのかう聲をかけて、『町まで行けや、もう豚位あんべいや。』

『行つて来べいよ。』

『酒と、食ふ物位ふんだんになくつちや、働けねえや。……勝は何うした？ 昨夜も歸つて来ねえか。』

若い奴はのんきだな。着物もなくなつて震へてゐる癖に、あまにかけちや、食ふものも食はねえでも好いだからな。』

こんなことを言つて、政といふかれ等の群では一番幅の利く四十先の大きな男は、圍爐裏の前に大胡坐をかいて坐つた。

『今日は旦那来べいな。来て勘定して呉んねえぢや困る。』

『今日は何にしても来べいよ。』

他の一人が合せた。

『竈の方は定が行つたんか。』

『行つた。』

『何うも旨く行かねえな。……材料がわりいでな。』

此の界限では、これ以前にも、廉い下等な瓦を焼いたり、陶器を焼いたりするところが其處此處にあ



つた。材料は何方かと言へば好い方でない上に、竈も焼き方も完全でないので、とても思つたやうなもの出来なかつたけれども、それでも廉くつて輕便なので、地方的に需要が多く、K町の瓦と言へば、かなり世間にきこえてゐるのであつた。勿論、此處にこの煉瓦の竈を起したのは此村のものではなかつたが、川向うのS村では昔からきこえた金持で、今でこそ家運が衰退したと言はれてゐるけれども、それでもS村のKと言へば、誰でも知らないものはない位の舊い家であつた。何でも噂では、先年妾狂ひや何かをして、散々家産を蕩盡して、その揚句に先代が死んで行つてから、その息子のKは、家道の回復に腐心して、何うかしてもう一度、元の財産家になりたいと言ふので、それで、いろ／＼な事業に手を出し始めたといふことであつた。

こゝに竈を起すことについての動機は、いろ／＼あつたけれど、その中で一番大きな動機は、東京の淺草を出發點にして、下野の機業地に達する汽車が、必ず此處を通過して行くに相違ないといふことをKが何處かで嗅ぎつけたためであつた。K町附近に生ひ立つただけにKは瓦を焼くことに熟してゐた。またその製造の利益の多いのにも熟してゐた。かれはこゝに停車場が出来れば、いかやうにも廣く且つ輕便にその製造品を運ぶことが出来ると思つた。否、そればかりではなかつた。さうした事業が汽車の出来たために、大きな成功をして巨萬の富を重ねたものゝあるのなどもかれは知つてゐた。それに、瓦よりも煉瓦の方が、たとへ品質は完全でないにしても、これからの社會には需要の多いことを知つてゐる

るかれは、いろ／＼研究の結果、自分にはさう大して深い經驗がないにも拘らず、此處に小さな竈をひらいて見る氣になつたのであつた。

それに、材料にする土もいくらかはその附近にあるし、燃料もあたりに豊富であつた。かれはいつも巨萬の富を夢みてゐた。

かれはをり／＼其處に姿を見せた。肥つた四十近い立派な男で、金ぐさりをへこ帯に巻き附けたり、バナマの新しい帽子をかぶつたりして、よく竈のあたりにその姿を見せて、製品の結果を驗べたり、職工を相手にして販賣の方法を話したりした。

製品の結果は、さう好くはなかつたけれども、もう少し研究もし、方法を講じたならば、これで何うやらかうやらおつついて行きさうに見えた。

掘立小屋の中に入つて行つては、

『今に、立派な家を立て、入れてやるよ。汽車さへ早く來れや、此處等一面に大きな工場にして見せるがな。』

かう言つて職工を相手に、そのまづい地酒をその圍爐裏のところ飲んだ。

そして來る度に、細かく崩して來た銀貨や白銅のチャラチャラ入つてゐる財布から五日分の賃銀を出して、そしてそれを職工に渡した。



その日もかれは午後からやつて来て、竈の中を覗いたり、そこに積まれてある製造品を見たり、また丘の上にその姿をくつきりと見せて、荒野の中に烟を漲らして活動してゐる自分の事業のことを考へたり、夕日にかゝやく沼の方を眺めたりしてゐるが、やがて夕暮近くなつてから、いつもの賃銀を職人達にわたして、そして待たせて置いた車で東京の方へと行つた。

ある日は、煉瓦を見に来た鬚の生えた洋服の男とKと立つて話してゐるのを職人達は見た。

『何うも、もつと色が出さうなもんだがな。……これぢや、何うもしやうがない。質も餘り緻密ではない。』

こんなことをその見に来た男は言つた。

近所でもこの事業についての種々な噂がきかれた。ある人は、『とても駄目なこんだ。御本人が元々さうした知識がないんだから、』と言つて、てんで相手にしなかつた。ある人はそれをK停車場附近で焼かれる煉瓦に比べて批評した。『もう少し資本を入れなければ駄目だ。技師の一人や二人は置くやうな設備をしなけれや……。それや、汽車が出来れば、満更捨てた事業でもないよ。發展の見込がないぢやないが、しかし、それにやもう少し何うかしなけれや……。』と言つた。

しかし、値が安いので、地方的にはそれ相應に需要があるらしく、時には荷馬車が轍を深くその草路に印しながら、そこに積んである煉瓦を運んで行つてゐるのが街道を行く人々の眼に留つた。

竈から巻き上る烟は、常に西風に横折れて靡いた。

沼の畔りの家をその文學者が去つてから、一二年は既に経過してゐた。

## 二

勝は午過ぎになつても歸つて來なかつた。

『あきれた阿呆鳥だな。』

『文なしで歸れねえだんべいや。』

『可愛がられてゐるやがるんだよ。あいつ、持てるつて言ふから。』

こんなことを言つて、噂をしてゐるが待つても待つてもやつて來ず、四時すぎになつてもその姿を見せないで、

『何うしやがつたな。』

『仕事が辛いで、突ツ走つて了つたかな。』

『そんなことはあんめいと思ふんだがな。突ツ走るにしても、文なしぢや、何うにもなんめいやな。』

『今に、のそつり歸つて來るよ。あまり遅くなつて了つたで、かへりそびれて了つたんだんべい。』

しかしかれ等は捜して見るといふ氣にもならなかつた。やがて夜が來た。暗い寒い夜が來た。晝間か



ら吹き出した西風が一層つよくなつて、吹きさらしの野は、家から顔すらも出すことが出来なかつた。風は低い堀立小屋の板屋根に吼え、竈の煙突に咽び、更に遠く寺の櫓の古樹に潮のやうな音を漲らせた。政は小便に外に出た。

寺の灯がほつとり闇に一つ見えるばかりで、あとは風ばかりが荒れた。

『お、寒……寒……小便も碌にしてゐられやしねえ。』

かう言つて政は入つて來た。好い加減にかれは酔つてゐた。

『何うしやがつたんべな、本當に……。心配させる奴だな。』

かう政は思ひ出したやうに言つた。

勝は政が引張つて伴れて來たのであつた。野州あたりの生れで、のつそりとしてゐて、家には親も兄弟もあるが、何うしても家に歸るのはいやだと言つて、此前、政の爲事をしてゐた工場に來てゐた。それを不憫に思つて、政はいろくゝに眼をかけてやつた。自分の着物などもやつた。此方に來るについても、政は自分で劬つて使つてやるつもりでつれて來た。

翌日になつても、勝は矢張その姿を見せなかつた。

『突ッ走りやがつたな、いよいよ……。』

かうは言ひながらも、心配になるので、いつも町に酒や食料を買ひに行く男に次手に勝のよく行くだる

まやに寄つて様子をきいて來るやうに頼んだ。

男はやがて歸つて來た。

『ゐねえよ、親方。』

『でも、あそこに行つたにや行つたんべ。』

『來たには來たつて言つてゐたつけ……。來るにや來たが、一昨日の九時頃に歸つて行つたつて言ふんだ。』

『あまはゐたけえ。』

『ゐた。』

『何うしやがつたんだんべいな。厄介な奴だな。』

かう言つたか、すぐ言葉をついで、

『あまは何とか言つてゐなかつたか。』

『何うしたんだべ……。歸んねいけ……。つて言つて、おつたまけた顔をしてゐたつけ、何か思ひ當るやうなことはねえけつて言つたら、ちつともねえな、そんな突ッ走るやうな素振も何もなかつた。いつもの通り、酒を飲んで、寝て、勘定がねえつて言つて、そして出て行つたきりだつたよ。』

『不思議なこともあるもんだな。』



『突ッ走つたんだんべい——』

『さうときり考へられねえ。まさか、野郎、川へでも突ッぺいつたもんでもあんめえ。そんな風は少しもありやしねえものな。』

『ありやしねえとも……』

『困つた奴だな。放つても置けめい。』

かう言つて、政はつゞいて町の警察の方へ出かけて行つた。しかし何うにもならなかつた。いろ／＼なことを訊かれたり、前の夜に行つてゐたといふだるま屋を調べたりしたけれども、遂にその踪跡はわからなかつた。『矢張、突ッ走つたんだんべい……。仕事がいやになつたんべ。』といふことになつて、そのまゝに月日は経つて行つた。

ところが、半月ほど経つたある寒い日に、沼に注ぐ小川の畔で、網を携へて日振りをしに行つた一人の男は、自分の腿まで入つて行つてゐる泥深い、蘆荻の縦横に折れ伏した中に、ふと人の頭見たいなものゝ浮んでゐるのを見て、ギョツとして二足三足後退りをした。果してそれは溺死人であつた。黒い泥に塗れた髪を伏せて、手を伸して、仰向加減になつて浮いてゐるのであるが、皮膚も何も彼もいやに糜爛して、黄いとも白いともまたは鼠色ともつかないやうな色をしてゐた。冬の事で、まだ悪臭を放つまでにはなつてゐなかつたけれども、長い月日をかうして此處に横はつてゐたのであるといふことはすぐ

わかつた。かれは網の手になつてゐる竿で、ちよつと顔を仰向けさせて見たが、『キャア！』と自から叫んで、そして路に上つて了つた。

丁度そこに通りかゝつた男は、その氣勢のただならぬのを見て、急に手を留めて自轉車から下りたが、

『何だ？ 何だ？』

『土左衛門でさ……。びつくらしたにも何にも……。俺が、網で魚撈はうと思つて、かうやつて入つて行くと、そこにその土左衛門がゐるぢやないか。びつくらしたにも何にも……。』

『何處に？』

『そら、そこに……。』

自轉車の男は近寄つて行つたが、指されたところに果して溺死者の横はつてゐるのを見た。

『フム……。まだ若い男だな。』

『随分日が経つてゐるぜ……。昨日や今日ぢやねえ。この陽氣だで、まだくさくはならねえが、色つてねえ……。』

『本當だな。』

また近寄つて見て、

『何處の者だらう……。此處のもんぢやねえのかな。此處等のもんなら、ゐなくなつたとか何とか言



つてさがしうなもんだがな……。それにしても、此處は路なのに、よく知れずに今日までかうしてあつたもんだな。』

『蘆が繁つて、その中になつてゐるで、ちよつくら路からは分んねえ。』

これは他ではなかつた。勝であつた。煉瓦を焼く竈の群で不思議にしてゐた勝であつた。ほんやりした、無口な、それでゐる女にちやほやされた、また此方からも女なしにはゐられないやうな勝の二十一歳の最期であつた。勝は何うしてこゝにかうした最期を遂げたか。つくづくはかない世をはかなんでかうした決心をしたのか。それとも又戀ごゝろの自由にならない女を恨んでかうした終りを告げたか。それとも亦酔つて好い心持で歩いて来て、闇に路を踏外してこの泥沼の中に陥つたのか。或はまた女を張り合ふ男が他にあつて、それに不意に襲はれて、殺されて此處に投げ込まれたのか。それは誰も本當のことを知るものはなかつた。警察から巡査と醫者が来て調べたけれども、日數が経つてゐるので、自殺か他殺かをすらはつきりきめることが出来なかつた。『狐にでもつままれたんだべ。阿呆が——』それと聞いて飛んで来た政はこんなことを言つた。

旅の僧の開基した寺の和尚がその屍に向つて讀經した。

## 三

驚くべき光景がそこにあつた。

何も彼も皆な躍動した。生氣を帯びて来た。人は多くそこに集つて行つた。それは丁度文化の大きな波が、また都會の忙しく息つく空氣が、あらゆる原始的の状態を破壊せずには置かないといふメカニカルフォオスが、更にまたその當時國を賭しての戦争の勝利に夢中になつてゐる國民の國運の振興に對する思潮が、一時にこの狭いさびしい昔の野の一角にまで押寄せて来たやうに見えた。出来る出来るといふ聲は數年前から耳にしなから容易にやつて來なかつた汽車が、K驛の交叉點を突破してから、坦々として高抵のない潤い平野を一直線に容易に進んで、W驛、K驛の二つの停車場を置き、更にH驛の停車場が大きな寺の森を後にして準備された。田舎の人達は皆な目を睜つてその怪物のやうな汽罐車の單獨に動いて來るのを見た。鋭い、尖つた刺さうな汽笛の林の陰に聞えるのを耳にした。また重り合つた雑木山の間から、黒い黄い烟が狼火のやうに颯つて、地を撼すやうな轟音と共に、長い列車の早く動いてあらはれて來るのを眼にした。先へ、先へと土地を收用して、畠も、田も、道路も、時には村の人家の敷地をもそのまゝ、眞直に一條のレイルにするために、あらゆる人間の力は用ひられて、はつびをつけた鐵道工夫の振り上げる鶴嘴の光りが、一種不思議な懸聲と共にあたりにかゝやき且つ満ちわたつた。誰も彼もそ



はそはした。利に敏く、智慧に富んだものは、今までの平和な蝸牛の中に縮まつたやうな生活に満足せず、或は運漕店を、或は倉庫を、或は小さな料理屋を、或は乗降客の休憩店をその前に經營するために出て行つた。子供達は喜んで駈けて走つた。犬もそれにつれてワンワン吠えながら走つた。

『まア、漸く汽車もやつて來ました。何うも今の世では、停車場のない町つて言ふものはさびしいものでしてな。發達させるにしても、馬車や車では、何うしても十分なことは出來ませんからな。それに、停車場を持つてゐなくつては、何うしても幅がきかなくていけませんや……。これで、電氣か瓦斯でも引ければ、町はぐつと引立つて來ますがな。これからは大に諸君にも奮發して貰はなければなりません。今までのやうな因循な考は棄て、新しい進取の氣象を十分に何事にも發揮するやうにしなければいけませんな。』

こんなことをH町の町長は大勢人の集つてゐるところで言つた。

小學校の校長は校長で、児童を集めて、次ぎのやうな演説をした。

『皆さん、私達の町も、汽車と停車場とを持つやうになりました。皆さんも嬉しいでせうが、私も嬉しい。これと言ふのも、日本の天皇の御稜威に由つてあの強い暴慢なロシアに勝ち、今は世界での一等國の群の中に數へられるやうになつたその餘光だと思ひます。従つて皆さんも今までのやうではいけません。昔の汽車も停車場もないH町の児童であつてはいけません。あのテト、テトといふ馬車の喇叭の音ばかり

をたよりにしたH町の児童であつてはいけません。生れ變つた心持で眞面目に勉強しなければいけません。それに、行儀も正しくしなければいけません。いつまでも田舎者であつては、汽車に對しても恥しい次第であります。』

次ぎに、鐵道の會社の内情に通じた人達は話した。

『で、川は何うするんだな……。この勢ひで、鐵橋をかけて了へば、豪氣なもんだが、それは出來まい。』

『それは無理だ……。會社は今でも随分困つてゐる。毎年、缺損々々で、K驛までさへ延びるか何うかといふことは一時大きな疑問だつたが、N氏が力を入れるやうになつてから、やつとあそこまで出て來た。あそこまで出た以上、何うしても此方に出て來なくちやならなくなつたので、T川まではレールを引くだけで、別に費用もかゝらないからグングン出來て來たが、さア、T川の鐵橋で一煩悶さ。』

『でも、すぐ出來るやうな話も聞いたが――』  
『何うして出來るもんか、あの川の鐵橋をかけるだけで二三十萬圓はかゝるといふ話だ。』  
『さうかな。』

『この鐵道としては、何うしても野州から上州の機業地に連絡させ、更に運好くば、足尾まで延ばして、あの鑛山の銅を一手で運ぶやうにしなければ十分な成績を擧げる事は出來ないのだから、何うかしてT



川の鐵橋をかけなくちやならないにはならないんだが、それがまた一難關さ。』

『ぢや、まア、此處が終端驛のやうになるんだね。』

『なアに、川の岸まで延ばすさ。そしてそこに一時終端驛を置くのさ……。そしてそこで何年か經つたさ……。皆く行けば一年か二年で橋も出來るといふものだが、今の景氣は戰勝の餘波だから、當てにはなりはしない。言はば附け景氣だ。何億といふ金を使つて土地は取れても償金はまア取れさうな見込はなから、一二年すると、きつとこの反動が來るにきまつてゐる。すると、橋もさう手輕くは出來まいよ。少し無理しても今ならやれるかも知れないが、何しろ困つてゐるんだからな、會社は……。T川の橋では、あそこの重役も、頭痛鉢巻でゐるよ。』

『さうかな……。』

かう言つてその一人は點頭いて見せた。

しかしそれは内情で、兎に角汽車が來たといふことが、川を渡れるか渡れないかそれは知らないが、兎に角汽車が來たといふことが、町乃至この附近の人達を賑やかな氣分にした。朝起きるとから夜寢るまで、汽車の話で持切つた。H町の停車場の開業式の日には、知事代理や、縣會議員や、土地選出の代議士や、郡長や、町長やまたは附近の村長、小學校長などがフロックコウト乃至羽織袴でやつて來て、大きな國旗を十文字にその前に交叉させて、停車場をすつかり開放した上に、それで足りないで、前の廣

場にテントを五つも六つも張つて、そしてそこで式の濟んだ後の立食の饗應があつた。藝者は町だけでは足りないので、K S 町、G 町、E 町、川を越したT 町までも手を延してかり催して來た。他の町の藝者は皆汽車で運ばれて來たのに、車で川を越して來たT 町の藝者は、『好いわねえ、汽車が出來て。早くわたしの方にも川を渡つて來るやうにして下さいよ。さうすると、東京にもちよいちよい行けるやうになるのね。』かう會社の重役の一人に言ふと、重役は、『汽車が出來たツてさうちよいちよい東京に情人に逢ひに行かれては、旦那がやり切れんぢやないか。汽車なんか成るだけ遅く出來る方が好いんだよ。』などと言つて笑つた。

此處での立食が濟んでから、町の料理屋での更に賑やかな宴會が夜半までつづいた。町の祭禮でもあるかやうに、何處の家でも、『祝鐵道開通』といふ新調の提灯を軒毎に掲げて、在から出て來た群集で到るところ賑ひ合つた。そして時間毎に、汽車は轟々としてやつて來て、潮のやうな乗客をそこに下した。

夏で、沼では割葦が鳴いてゐる頃であつた。

#### 四

開業式の日にはH 町ほどの賑ひはなかつたけれど、川の畔りの停車場前の發展は更に更に目覺ましかつ



た。取敢へずぞんざいに釘と金槌で板を打ちつけられたやうな小さな家が、汽車の開通する日までに七軒も八軒も出来た。

レイルはH町の停車場を出て、暫し、その町の裏の白堊や、人家や、垣や、裏の島の見えるやうなところを通つて、それから潤い荒涼とした野に出て、小さな川をわたつて、H町からK町に行く路に踏切の番小屋をつくつて、次第にその錆びた、蘆荻の緑の深い、菱や蓮の亂れた、田舟の一二艘横はつた、よくあの文學者夫婦が犬をつれて散歩した沼の畔りの路に添つて、段々その沼添ひの家の見える方へと進んで行つた。汽車の客車の中からはその家の一間が手に取るやうに明かに見えた。

割葦はキ、キ、キ、といふ聲を立て、終日喧しくその饒舌を續けてゐた。

レイルはその沼添ひの家のやゝ後になつたあたりから、少し斜に沼について曲つて、T街道を横ぎつて、やがて寺の山門を右に見るあたりに来て、それから少し勾配がついて、やがてそのT川の高い土手と煉瓦を焼く竈の烟突とを前にして、そこに新しく出来たかなり大きい一時終端驛の停車場へと入つて行つた。

短かい月日の中に、忽ち渦を卷いたそのあたりの光景は、突然やつて来たものを驚かしたばかりではなかつた。村の人達も皆な眼を睜つて、急に新しい色彩をつけて来たあたりのさまを眺めた。H町は元から町であつたためにさうその發展は眼に立たなかつたけれど、此處はさびしい草藪であつたのと、終

端驛になつたために、一層賑やかさが人々の眼を敬たしめた。

『町になるかもしんねえや。』

こんなことを村の人達は言つた。

其處にも此處にも匏の音と鋸の音と金槌の音とが聞えた。汽車が開通する二三日前まで、まだその驛の名がしつかりきまらないので、KMと呼ぶか、それともSGとつけるか、それともまた川の名をそのまま、取つてT驛と呼ぶか、何方か更にわからなかつたが、二日前の午後、汽車で運んで来た驛の名を書いた立札には、白い地に黒く大きくKMと書かれてあつた。

『矢張、KMに決つた。』

かう新しい制服制帽をつけた助役らしい男が言つた。

『おい、驛長さんにさう言つて来い。』

かう續いて言はれて、年の若い車掌見習が走つて駆けて行つたが、やがて柔和な顔をした、四十に近い金筋の入つた制帽をかぶつた驛長が莞爾しながらやつて来た。暑い夏の日がブラットフォオムを照した。

『矢張KMか。』

かう言つて、助役と顔を見合せて笑つて、『負けましたな。これぢや井を奢らせられる譯ですな。暫し黙



つて、「T驛の方が好いんだがな、雅致があつて……それに、將來、橋が出来れや、向うに、もう一つK驛をつくらなくてはならなくなる譯ですからな。川の向うが、本當のKMなんだから。」  
「橋が出来た驛には、此處からすぐT町へつけるやうな社の方針で、それでかう決つたのかも知れませんが。」

『向うは距離が長い。』

『それはさうですけど。』

『ヤア、KM驛。』

そこにまた井一つに有りついたやうな顔をして、二十八九の車掌のKがやつて来て叫んだ。

驛長は莞爾しながら、早速それを立てるやうに命じて置いて、まだ出来ないで一生懸命に停車場の一部を拵へてゐる大工の傍に行つて、暫しの間立話をした。

それから停車場の中に入つて行つて、自分の卓の前で、をりからかゝつて来た電話の受話器を耳に當てて、はアはアと言つて、それに適當な返事を與へたり何かしてゐたが、またぶらりと外に出て、今度は半ば建築中である自分の社宅の方へ行つて見た。

かれは今一間出来た六疊に、寢道具や手廻りのものだけを運んで来て、そして十日ほど前からそこに起臥してゐるのであつた。食事はこれも矢張その前に小料理屋を始めかけてゐるT町のM屋のちよつと垢

抜けのした酌婦がいつも三度々々運んで来た。

何うかすると、驛長はそれを捉へて、戯談などを言つた。

辨當を置いて歸らうとするのを、わざと呼び戻して、『お玉さん、お玉さん、時には、お給仕位してつたツて好いぢやないか。』

『だつて……。』

『だつて、給仕をする人は別にあるツていふんですか。もつと好い男の……。』

『なら、して行くわ。私でよければ……。お酒でも一本持つて來ませうか。』

『眞平、眞平。』

かう言つて驛長は笑つて手を振つて見せた。

自宅の中では、人足が頻りに井戸を掘つてゐた。

やがて其處に姿をあらはした驛長は、

『好い水が出さうかな。』

『出ますよ。』

かう親方らしい肥つた男が莞爾しながら言つた。

『水がわるいのは一番困るからな。』



『大丈夫ですよ。此處等は一體に水がさうわるくありません。停車場の井戸だって、さうわるくないでせう？』

『あの位の水なら結構だが、此處はあそこより少し低いからな。M屋の水はひどいって言ふぢやないか。』

『あそこは別です……。外にまだ一つ二つ掘つたが、皆な好い水が出ます。』

『何うか好い水が出て呉れ、ば好いがな。』傍に寄つて覗いて見て、『もう今日の夕方には掘り上げるかね。』

『まア あら方ですな。』

一人の男は體中を赤土だらけにして、井戸の中から綱に引上げられて出て來た。

驛長は宅が出來上つたなら、早速此處に五六本松でも栽ゑて、花壇でもつくつて樂しまうと思ひながら、また、そこを出て、何處でも此處でもトンカントンカンやつてゐるのを眺めながら、始めて來て見た時には、草藪と田と土手しかなかつた處に、さうしたさびしい何もなかつたところに、小さな繁華が其處からも此處からも時の間に押し寄せて來て、或は料理屋を、或は休憩店を、新聞配達店を、運賃店を開業してゐるさまを面白いとも思ひ、頼もしいとも思ひ、また言はば、その上に自分が大將のやうにしてすぐれた位置を保つてゐると思ふと、今までのた小やかましい混雜した、いやな不愉快な空氣ばかり漂つ

てゐるやうな海岸近い町の停車場にゐるよりは何れほど好いか知れないと思つた。そんな田舎なんかしやうがないと思つた初一念を翻して、此處にやつて來たことを寧ろ幸福であつたと思つた。

つゞいてまたそのすぐ近くに沼があることがかれを樂しました。そこには鰻も、鯉も、鮒もすべてさうした川魚が澤山にゐる。とても忙しくつてさうした暇は得られまいけれども、子供の時分から好きで好きで飯を食ふより好きであつた釣魚の樂しみをしやうと思へばいくらでも出來るといふ考が、かれの單調な生活味をいくらか複雑にして呉れるやうな氣がした。かれはをりく、剖葦の鳴く沼の方に心をそそられるやうにして振返つた。

そこに向うから、煉瓦の竈の持主がにこにこしながら近づいて來た。

『開業式の日は大いに祝ひませうな……。』

持主はかう元氣よく聲をかけた。

『やア……。』

『兎に角、此處に停車場が出來たのは萬歲でした。私はもつと向うかしらと思つてゐた。向うでも好いと思つてゐたんでした。ところがお誂へ通りでしたからな。運動でもしたかのやうに、ちやんと私の工場の傍まで持つて來て呉れたんですからな。』

『製造品の方は何うです？』



『それですよ……。』ちよつと顔を曇らせて、『矢張、材料がいかんのもあるやうですな。もつと好い奴を運んで来なければ、十分にはとても行きません……。しかしもう汽車が出来れば、それもわけはなですから……。これからも何分御盡力を願ひます。』

『やア。』

かう言つて別れた。

『明後日が開業式だ。かうぐづくしてはをられない……。さうだ、あれもして置かなければならぬ。その他にもまだ用が澤山ある。こんなにして遊んではゐられない。』かう獨りで言つて、そして驛長は停車場の中へと入つて行つた。

## 五

汽車が開通してから、一時物めづらしいのと、交通の焼點がこの一角に集つたためとで、朝の六時半の一番の上りから夜の九時四十分の下りまで、何の列車も皆な一杯に詰つて、乗客は改札口からぞろぞろと潮のやうに構外へ出て、その新たにひらけた通りをT川の高い土手の方へと歩いて行つた。

新しく出来た通りの二三軒の料理屋の前には、銘仙の着物に赤い襷をかけて、いやに濃く顔に白粉を塗つた女達が、流行佛のある門前町でも見るやうに、『休んでいらつしやいまし、お寄んなさいまし。』

など、聲を懸けた。川向うに二里を隔てたT町から出店を出したM屋といふ料理屋、それと競争の位置に置かれてある矢張同じ町のK屋の分店、すぐ川を越した上流にあるKM村の昔の船宿であつたY屋の分店、その他H町から出て来たTといふ休憩店、さういふ家々がずらりと低い軒をつらねて並んで、或はお中食所、或は川魚料理、或はちよつと一杯などと大きく小さくごたごたと大和障子や招牌や暖簾に書かれて、何の家にも青田に面した見晴しの好い涼しさうな赤毛布を敷いた低い欄干のある座敷が覗かれた。

『えらく賑やかになつたな。此處がこんなにならうとは思はなかつた。』

『丸つきり、田圃で道も此處にはなかつたやうなところでしたがなア。』

こんなことを言ひながら、荷物を持つた田舎の商人らしい二人づれが群集に雜つて話して行くあとから、繭買らしい秤を腰にさした男、近在の百姓の息子らしい若者、遠く野州の機業地にまで行くやうな角帯に金ぐさを巻きつけて機屋さん、大きな荷物を抱へて子供の手を引いた上さん、さうした人達が一しきりぞろろと通つて行つた。中には、ちよつとその家並の一軒に立寄つて、門口で上さんと話してそしてすぐまた出て行くものもあつた。下りた客の多いのに拘らず、寄つて一杯飲んで行かうといふやうな客は少かつた。

土手の下には、車が七八臺、多い時には十二三臺も並んで、汽車が着く度にさうした群集を目蒐けて



競争して乗車を勧めた。T町へ、またはA町へ、その先一二里もあるK町へ、更に遠く野州の機業地の中心であるAS町へ。

かうした車夫達は、この附近の街道にある小さな聚落、または昔の徒歩時代に榮えた宿場、さびしい荒れ果てた川沿ひの小さな町などに、一臺か二臺があつて、たまさかにある客を乗せて、附近二三里、遠くつて四五里のところを走り廻つて、小さな一間しかない荒壁の一家の中に、色の黒い、大きな乳をした、言ふことをきかない子供等を終日嘸鳴り散してゐるやうな上さんと一緒に、一生思つたやうなこともなく、懶惰と、飲酒と、賭博——賭博と言つても精々五十錢か一圓の賭をやつて、そしてその賽の目の運の好かつた時に、旨い肴の一皿も食ひ、あばずれ女の酌の一つもして貰ふといふやうな運命に生れついた人達であつた。それが此處に停車場が出来ると、好い爲事がそこに渦を巻いてでもゐるかのやうにして、期せずして皆な此處に集つて來た。おのづからかれ等の仲間には組合といふやうなものも出來た。またその統領分と言はれるものも出て來た。かれ等は客があると、溜りの中から、麻糸の太い數條を組合せた鬮を持出して、それをてんでに一本づゝ引いて、當つたものは、にこにこして好い運にでもあり附いたやうに勇み立つて、がら／＼と勢好く車を土手の上まで曳いて上つた。そしてそこで待つてゐる客を乗せた。

そこからは、T川の廣い流が遮るものなく打渡されて見えた。

ひまな時とか、または運わるく、引くくじも鬮も當らないので、いつまでもそこに残つてゐるやうな連中は、溜りの日影の涼しい處で、目を忍んで小さな賭博をやつたり、またはのんきさうに向ひ合つて將棋をさしてゐたりした。

それから土手を二三町ほど行つて、だら／＼と下りて行くところにあるRの渡頭——そこには大きなこんもりとした杉の森などがあつて、川に沿つた大きな家は、昔、交通が主として船に頼つた時代に、船宿として榮えた昔を語つてゐるやうに見えたが、また最近まではその渡頭と川がさびしくなつたと共にすつかりさびれて、一日に何度と數へるほどしか渡船も出なかつた位であつたが、一度そこに停車場が出来てからは、俄に渡しを求める人達が多く集つて來て、行つて歸つて來る間には、乗せ切れないほどの客や車や自轉車がいつも岸に待つてゐるやうになつた。『一艘でやつてゐては、しやうがねえや。今二三艘なくちや、とても運び切れねえや。』など、待ちくたびれた人達は言つた。

『船頭さん。お錢が儲かつて困るべい。』

『本當だ……』

『不思議なもんだよな。待てば海路の日和ありだと言ふが、運が向いて來ると、金なんかいくらでも出来るもんだな。あんまりあくせくしねえが好いや。』飛んだ人生觀がさういふ人達の口から出たりした。



水は靜かに碧く岸に偏つて、小さな瀬をつくつて流れた。土手と川との間の桑畑や草藪の中にも、夏の日の暑い草いきれをわけて、近路をして、女の蝙蝠傘や白い麥藁帽子が絶えず此方へとやつて來るのが見えた。

## 六

M屋の酌婦のお玉は、隣りのY屋の上さんとちよいちよい顔を合せるので、ぢき懇意になつて、よく立話などをしてゐるが、何うかすると、ひまの時などには、裏口から入つて行つて、いろ／＼打明け話などをした。

それと言ふのも、Y屋の上さんといふのが、以前A町のN屋で酌婦をしてゐて、川向うのY屋の主人と深い仲になつて、その上さんとも散々喧嘩などをして、後にはA町の小さな家に圍はれて、つい最近まで其處で五日に一度、三日に一度、その旦那のやつて來るのを待つてゐるやうな身分でゐるが、可愛い女の將來を思つてやる旦那の情と、自分にも然るべき獨立の店を持たせて貰ひたいといふ女の希望とで、停車場が此處に出來るといふ噂の立つた時分から、やれこれ言つてその準備をして、逸早く此處に煙草を賣つたり、手輕な中食を食はせたりする店を出して貰つた。行く行くは、矢張M屋のやうに、綺麗な酌婦を一人二人置いて、飲屋にする計畫ではあるけれども、先づ當分は、上さんと小女と奴僕と三

人で小體に稼業をやつて見ることになつてゐた。旦那といふのは、肥つた五十先の人で、ちよつと見ると、何うして此處の上さんがあれほど眞劍になつて惚れてゐるかと思はれるやうな男振であつたが、そこにはいろ／＼な譯があるらしく、またはY屋の細君との意地張もあるらしく、男のやさしい深切に絆されたところもあるらしく、今でも二三日來ないと、『何うしたんだらう、旦那は？ 今日顔を見せない。』など、言つて心配した。

上さんは三十二三で、ちよつと色が白く、顔立が好く、愛嬌があつて、ちやんと身じまひでもすると、これでも酌婦であつたことがあるのかと思はれるほど、それほど人の眼に立つた。

ある夜、終列車が來て了つてから、裏口から隣のお玉はやつて來て、立つたまゝで、

『うんざりしちやつた……』

『何うしたのさ……』

『だつて、長尻りで、長尻りで、しやうがないんだもの。夕方から來て、飲んでゐて、まだゐるんだもの。』

『長尻りは本當に困るね。』

『それに、しみつたれよ……。あれで、人を口説く氣でゐるんだから、本當にイヤになつて了ふ。うんと振つてやつた。……』



『何處の人だえ?』

『なアに、Bの村の者ださうだけれどもね。此間も来たんだよ。すかない奴だよ……。それを思ふと、こんな稼業は本當にいやになつて了ふね、お上さん。』

『まだゐるんかえ?』

『もう歸るだらうよ、一人で……。それに、客種がわるいね、此方は……。土百姓ばかりだもの。町に  
るれや、すこしは、それでも好いた客もあるんだけれど……』

『何うも爲方がないね。また好いこともあるよ。』

『だから、此方によこされるのはいやだつて言つただけけれど……。それに今のところは一人だらう。  
何でも彼でも皆な私が爲なければならぬ……。座敷の掃除から、拭掃除から、何から何ま  
で……』

『まアおかけな。』

かう上さんは勧めて置いて、長い烟管を取つて、煙草をつけて一服吸つた。その後の一室にもう蚊帳  
が吊つてあるので、蚊がわんわん集つて來た。

『ひどい蚊だね。』

腰をかけては見たが、お玉はすぐまた立つて、蚊の留つたと思はれるあたりをびしやびしやたゝいた。

蹲踞んで足のところをほりふくかいたりした。

『でも、もうぢき、誰か一人來るんだらう。』

『お常ツていふ人が來るやうになつてゐるんだけど、向うだつて、忙しいからね……』

『兎に角、お前さん一人ぢや大變だ。』

『本當に、何か面白いことでもなくつちややり切れやしない。』

『でも、お客はあるんだらう?』

『あゝ、お客はあるね。馬鹿に出來ないね、こんなところで。板場は随分いそがしいよ。飲客だつて  
今日七組あつた。』

『好いね、お前さんの家なんか……。矢張招牌が好いからね。』

『だつてお上さんのとこだつて、いそがしかつたでせう。』

『忙しいつていふほどでもないけども……』

『でも、見込のあるところはあるところらしいね。今に町家になるかも知れないなんて言つてゐたが  
……。鐵橋が出來る時分になると、それは人が入つて來るね。』

かう言つたが、

『今日は旦那は?』



『これから来るのよ。』

『楽しみね。』

『うそだよ、お前さん。来やしないよ。何うしたんだか、此頃ちつとも来ない。東京へでも行つたかしらんと思つてゐるんだけど、それならそれと言つて行きさうなものだと思つてね。』

『来るよ、今に……』

M屋の方で、呼ぶ聲がした。

『呼んでゐるよ。』耳をすまして、『親方だ……呼んでゐるのは！』

かう言つてあたふたとお玉は歸つて行つた。

まだその飲客はぶうぶう言つて飲んでたけれども、それから三十分位経つた後には、それも何うやら歸して、あと一組あつたのを一時間ほど相手をして、それからあちこちと跡片附をしたり戸締りをしてりしてゐる時分には、もう彼は十二時に近く、親方もとうに奥の寢床に入つて眠つてゐた。

表の戸を閉める前に、ちよつと外に出たかの女の眼には、停車場も、何も彼もしんとしてゐる夜更の光景が映つた。停車場にはそれでもところ／＼に電氣が明るくついてゐたが、月が此頃にもめづらしいほど明るく冴えて空に照つてゐるので、何となくいつもより光が薄くほんやりして見えた。沼の方からは蛙の鳴く聲が湧くやうにきこえて來た。

驛長の社宅に軒燈のついてゐるのを見たかの女は、十日ほど前、驛長の家族がやつて來たことなどを頭に浮べた。思つたより、またあの驛長さんにしては若すぎる位若い綺麗なハイカラな細君であつた。子供は四つ位になるこれも可愛い男の兒があるばかりであつた。(あゝして、何不足なく暮してゐたら、さぞ仕合せだらう。)など、思つたが、つゞいて、(それにしても、何うしたんだらう、今日もやつて來なかつた。)かう思ふと、Y町にゐた時から互ひに深くなつてゐるSのことが強く思ひ出されて來た。今日も度々その男のことを思つた。さつき、飲客に口説かれてゐる時にも思つた。何となく悲しいやうな心細いやうな氣がして來た。

表の戸締りをして、此方に來て、まだ起きてゐる板場の男と二言三言話をして、それからお玉は自分の寢る室に入つて行つた。それは丁度田圃に面した座敷のすぐ隣りになつてゐるやうな狭い三疊ほどの一間であつた。かの女はすぐ蒲團を布いて、そして獨り寢の綿蚊帳を低く吊つて、さて寢間着に着かへたが、閉め切つて蒸し暑いので、いつもするやうに雨戸を一枚明けた。と、夜風が涼しく入つて來て、蛙の鳴聲が裏の田圃を埋めるやうに聞えた。残螢が唯一つふわりふわりと月光の中を縫ふやうに明滅して飛んで來て、すぐその顔の前を掠めるやうにして、また高く空に向つて飛んで行つた。

(まだ、螢がゐるのねえ。)こんなことを一人で心の中で言つて、そして好い心地で蚊帳の中に入つた。忙しいお玉に取つては、この夜更の一時間ばかりが自分の本當の時間であつた。お玉はSのことを頭に



浮べながら、明日来なかつたら、また手紙が出さうなど、思ひながら、湧くやうな蛙の聲に埋められるやうにして眠つて行つた。

## 七

それから二三日経つた午後のことであつた。丁度その時客が途絶えたので、お玉は裏田圃に面した座敷の縁側の丸竹の欄干のところに立つて、何気なしに外を見てゐた。西日がかなりに暑くさし込んで來てゐた。

そこからは、Rの渡頭に向つて歩いて行く土手の上の人達の姿が手に取るやうに見えた。低い緑の草、それにさし添つた暑い日影、一つ二つ通つて行く蝙蝠傘、さうしたものを見るともなく見てゐたお玉の眼には、ふと向うの松原の緑のあたりから隼のやうに早く早く駛らせて來る自転車が映つた。

お玉ははつと思つた。

それはSであつた。この間中から待ちに待つてゐたSであつた。お玉はわれを忘れたやうにして、急いで店へ出て、親方にことわる餘裕も何もなしに、いきなり下駄を突つかけて、そして駈け出した。

軒を並べた家の人々が見てゐるのにも構はず、餘り急いで駈けて行くので、すれ違つたものが呆氣に取られてゐるのにも構はず、または土手の下の溜りの車夫達が、『M屋のだるまさん、何うした？ いや

に夢中で駈けて行くぢやねえか。』などと言つて見てゐるのにも構はず、せいせい呼吸を切りながら、足を留めずに、土手の上へと馳せて登つて行つた。

油ぎつた素足と、ちらほら見える腰巻とが、いやにかの女をだるまらしくだらしく見せた。

土手に上つて、ほつと呼吸をついてゐるところに、自転車が滑らかにやつて來てそして留つた。

Sの慌て、それから下りるのが此方から見えた。

『は、ア、男がやつて來たんだ……。それでな……。それであんに走つて行つたんだ。』

かうそれを見とゞけてゐた車夫の一人は言つた。

此方では自転車を下りたSは、

『何うしたんだ？』

『今、あなたの來るのを家で見てゐたのですよ。』

お玉は猶ほはずむ呼吸をついて、『それにしても、何うしたのさ……。もう二十日にもなるぢやないの？』

『この間知らずに向うへ行つた。』

『だつて、はがきが届いたでせう。』

『行つた翌日届いた。』



『二三日前のは？』

『昨日見た……』

『本當に何うしたのかと思つてゐたんですよ。』

『それにしても、えらいところが出來たね。こゝはあの沼のところぢやないか。話にはきいてゐたが、こんなに開けたのかえ、もう……』

『丸で島流しに逢つたやうなもんだわ。忙しいのよ、それは——』

『君一人？』

『さう——』

『それは大變だ。』

長い話がそれからそれへとつゞくらしく、午後の日影を受けて、男が自轉車に凭れるやうにしてゐる傍に女が後姿を見せて立つてゐるさまが長い間それと浮き出すやうに見えてゐた。その傍をいろ／＼旅客が掠めて通つて行つた。

八

若い二十三四の車掌見習が、用が出來たので、讀んでゐたクロオス表紙の四六版の本をそのまゝにし

てあたふたと出て行つたあとで、二つ三つ年上の二本筋の入つた制服制帽をつけた驛員が、そこに寄つて來て、ちよつとその本をひつくりかへして見た。

『死の勝利、ガブリエレ、ダモンチオ。』

かう本の名が書いてあつた。

（相變らず讀んでゐるな……小説本を）かうその年上の驛員は思つたが『死の勝利、死の勝利？』と不思議さうに口に出して言つて、（死の勝利つて、何んなことを書いたものだらう。矢張死ぬことでも書いてある小説本かしら？）かう思つて、その車掌見習の讀みかけて置いて行つたところを字をひろつて三四行讀みかけて見たが、それはかれ等がいつも小説本と思つてゐる御家騒動のことを書いたり、仇討のことを書いたりするもの、または藝者の寫眞の巻頭に入つてゐる雑誌の小説などは夥しく違つて、矢張男と女のことを書いてあるらしいけれども、ちよつと間をひろつて讀んで見れば、容易に意味が取れないやうなものであつた。そこで電話のベルが鳴つたので、急いで本を舊のやうに置いて、室の隅にある電話のところに行つてその受話器に耳を當てた。

暫くしてから、驛員は再びその車掌見習の卓のところに行つた。

用をすまして來た車掌見習は、矢張その本に顔を向けてゐた。

『小説本だらう？ それ？』



『さうだ。』

『死の勝利つて、何ういふことが書いてあるんだね。』

車掌見習は振返つて笑つて、

『矢張、我々のことが書いてあるんだよ。』

『我々とは？』

『苦しんだり、悶えたり、男が女を戀ひしたり、女が男を戀ひしたりすることだよ。』

『翻譯もんだね。』

『さうだ……』

『面白いか？』

『呼吸もつけないやうに面白いね。』かう言つて、若い車掌見習は、驛員の方を見た。

驛員はまた本を手に取つて見て、『僕なんかにはちつともわからない……』

『……』

何か言はうとしたが、それは言はずに車掌見習は靜かに笑つた。

『死の勝利』に限らず、種々な外國の翻譯小説をその若い車掌見習は澤山に持つてゐた。英語も少しは習つたけれども、原書はまだ完全に讀むことが出來ないので、さうした種類の外國の大家のすぐれた

作の翻譯が出版されると、逸早く東京に注文してやつてそれを取寄せた。かれは僅かな月給をそれに大方注ぎ込んで了ふのを何とも思はなかつた。『道樂つて皆なあるもんだね。驛長さんの植木道樂、釣道樂、Kさんの着物道樂、Hさんの酒、君のは本を買ふのが道樂だね。』こんなことを言つて、ある時その驛員は笑つた。驛長は驛長で、かれの本を持つて、ちよつとの用のひまにも、立ちながらも、歩きながらも、熱心にそれに眼を曝してゐるのを見て、『中々熱心だね。』などと肩を叩いた。別に、そのために職務を怠るやうなことはなく、人一倍敏捷に勤勉に働くので、誰もそれを咎めるものともなかつた。

若い車掌見習は、驛長の社宅の後に出來た三間ほどの家に、他の獨身の二三人と一緒に半ば自炊のやうな生活をしてゐた。生れはかなりに遠い東北地方で、東京で鐵道學校に籍を置いてゐたが、その在學中にも、その學問だけでは何うしても満足することが出來ず、何うかして一廉の小説が書けるやうになりたいと思つてゐた。藝術！ それより他にかれの進んで行く路はないやうにさへ思はれたのであつた。

かれの朝夕起臥する一間も矢張その靜かな裏田圃に面してゐて、夜は蛙の聲が湧くやうにきこえたが、終列車のあとの用をすましてそこに歸つて來るのは、毎夜大抵十時半か十一時位であつた。その他に一週間一度は、停車場の一間で他の驛員と交代に宿直しなければならなかつた。かれはさう遅く歸つて來てからも、決して同居の人達のやうにすぐ眠つて了はなかつた。一方にさうした本の一杯詰つてゐる本



箱を控へた窓際の机に向つて、読みかけた本を讀んだり、紙を展けて何か頻りに書いたりした。をりをり溜息がそこからきこえた。

かれの頭にはツルゲネーフの淡いやさしい情緒と、トルストイの強い自由を欲する思想と、醜惡な人生をまざぐと眼の前に見せるやうなゾラと、狂氣染みた男女の活劇を描いたストリンドベルヒと、甘いしかし刺戟のつよい南國の戀を嗅ぐやうな氣のするダヌンチオとが、丸で別々にかれの頭の一部分を占めてゐるやうに、またそれがこんがらがつて滅茶苦茶に雜り合つてゐるやうに、かれの心の中に絶えず複雑した渦を卷いた。かれはをり／＼若いまだ世馴れない心に、かれがさうした本から得た人生と男女の間柄とを、實際のかれの周圍にある人達の生活と比べて考へて見たりした。しかしかれの周圍にある生活は決して本で見たり味つたりしたやうな色彩の濃いまたは刺戟の強いものではなかつた。其處にはレギンやアンナ夫人もゐなければ、イボリタやジョルジオもゐなかつた。うつくしい戀心に泣く若い美しいロシアの少女のやうなものも何處にも見出すことが出来なかつた。平凡な色彩のない生活と、時間ごとに發着する汽車と、ぞろ／＼下りて行く乗客と、軒を並べてのんきさうに住んでゐる人達と、それより他には何もなかつた。時にはかれはこんなことを考へた。(小説だから、かうしたことが、色の濃い、人を刺戟せずには置かないやうなことばかりが書いてあるのだ。實際は、外國だつて、さう面白いことばかりはないのだ。矢張平凡なんだ。平凡で、平和で、何も事のないのが人生だ。)

かれは時には一時二時までも起きてゐることがある。明日は六時に起きなければならぬと思ひながらも、どうしても、読みかけた本を捨て、寝るのが惜しいやうな氣がしていつまでもいつまでも起きてゐた。さういふ時にはあくがれ心が果てしなく起つて來て、わるく昂奮して、自分がえらい作家にでもなつたやうな氣がした。

ある夜のことであつた。十一時がさつき鳴つた。ふと耳を敬てると、さつき自分と一緒に歸つて來て床に入つて寝たと思つたKが、また起きて靜かに着物を着替へてゐるやうな氣勢がする。且ももう寝て了つたらしいのに……、それも此前に一度か二度矢張これと同じやうに深夜にKが出かけて行つたことがなかつたなら、別に氣にも留めなかつたであらうが、その前のことがあるのでふと耳に留つた。

帶をしめたり、彼方此方と物を闇にさがしたり、靜かにこつそりと歩いたり、果てはしきりの襖を明けて上り端の方へ出て行かうとしたりする氣勢を聞いてゐたかれは、急に立つて行つて、襖を明けて、上り端の方へ行つて見た。

Kは今しも下駄をさがして穿いて上り端の戸をグツと明けかけたところであつた。

『何處かへ行くの?』

かうかれは聲をかけた。

Kはそれには答へずに、手を振つてそれを制した。



傍に行くよ、

『まア、黙つてゐろよ。』かう小声でKは言つて、いきなりかれを一緒に無理やりに戸外に引張り出した。

一三間來てから、

『何處へ行くんだえ？』

『まア、好いから、君も行け……』

『何處へ？』

Kはいやに笑つて、

『わかつてゐるぢやないか。』

『僕にはわからない。』

『こまつた奴だな……。まア、好いから一緒に行つて見ろ。』

かう言つてKは引張つた。

『一體、何處へ行くんだ……。行くところがわかれば、一緒に行つても好いけど……』

『面白いところだよ。君の讀んでゐる小説本の中にあるやうなところへ行くんだよ……。無粹だな……』

…君は……。そんなことはわかりさうなものだがな。もう二十二三にもなつて……。誰だつて面白い真

似をしてゐるぢやないか。驛長だつて、助役だつて、誰だつて、皆な一人づゝ女を抱いてゐるぢやないか。吾々の若さで、毎日毎日働いてさ、時には、さういふ楽しみがなくつちや、生きてゐる效がないといふもんぢやないか。』

かれは引張つたKの手を振放つて、

『いやだ……。いやだ、そんなところには……。』

『君なんかのやうに、本なんかばかり讀んでゐたつてしやうがないぢやないか。實際が何うだかわかりもしないで、本ばかり讀んで威張つてゐたつてしやうがないぢやないか。今夜は伴れて行つてやるから、行つて見ろよ。』

またKの寄つて來るのを、

『いやだ……。いやだ。』

かう言つて遠く後退りした。

『何うしてもいやか？』

『いやだ……。』

『そんなら、人の邪魔をするなよ。』

『邪魔なんかしない。』



『そんなら、もう歸つて寢て了へ！』

かう言つて、Kはすたすたと土手の方へ行つた。

遅い月が丁度上つたばかりで、まだその光は此處等には到つてゐなかつたけれども、土手から此方の煉瓦の竈のあるあたりにかけては、爽やかな濃い物の影がそれとはつきり見えてゐた。

かれは暫し立つて見てゐた。

Kは一二度振返つて見ただけで、そのまゝ土手の方へと行つて、曲つて、やがてその姿は見えなくなつた。

かれは不思議な氣がした。驛長だつて、助役だつて、誰だつて、一人づゝ女を抱いてゐるぢやないかと言つた言葉が妙にかれの頭に絡みついて残つて響いた。讀んでゐる小説の中の人生が、つい此間思つたやうに平凡ではなしに、矢張それが事實であるかのやうにかれの頭に思ひ起された。

それにしても、Kは何處へ行つたのであらう。土手を上つて行つたらしいけれど、この深夜に、Rの渡しがあるわけではなし、また他に女のゐるやうな町や村が其方にあるではなし、かれが見てゐたために入るにも入れずに、わざとごまかしに一時其方に行つたとしか何うしても思はれなかつた。Kはどこか別の裏道から、こつそりそこにあるある家に入つて行つたに相違なかつた。そしてそこには女と酒の歡樂があるのであつた。いづれ、酌婦にはちがひないが、誰だらう。あの綺麗なお玉かしら？ いやさう

ぢやない。あの肥つた、お金か。まさか……。ふとY屋の先きにある矢張り小さな料理屋に二人ゐる女が思ひ出されて來た。さう言へば、あの色の白い方かも知れない。いつか、先生、停車場の外であの女と立話をしてゐたことがあつた。こんなことを思ふと、愈々不思議なロマンチックな想像が簇がるやうに胸に上つて來て、いつそ一緒に行つて見れや好かつた……。など、思つた。

月は次第にその光の領分を擴げて、物の影が段々はつきりと見え出して來ると同時に、誰か向うに人でもゐて持ち上げでもしたかのやうに、または芝居の舞臺の背景からせり上げられて來るやうに、半ば缺けた光芒のない、いやにわる赤い月が、ほつかり直線を描いた土手の上にはらはれて來た。

『好きな……』

かう思はず口に出して言つたかれは、いつかさうしに性慾の境の想像から心が離れて行つてゐるのを見た。かれは土手に上つて行く氣になつた。

かれは靜かに歩いて行つた。猶ほKのゐる家をあれかこれかと心に描きながら……。しかしその軒を並べた家は、また何處でも内では起きてゐる様子であるけれども、笑聲や話聲はをりくきこえて來たけれども、またある家は表の戸がすつかり明けてあつて、その上さんが帳場に坐つて何か錢勘定でもしてゐるやうな光景がそれとはつきりと見えたけれども、Kのゐるやうな氣勢は、何處の家からも聞えて來なかつた。かれは靜かに土手の上のほつた。急に、月の激澗として金屬のやうにかゝやいた大き



な川がその前にあらはれた。かれは黒いその瘦せた姿を地上に落して、ちつと立つてその美しいしかし寂しい夜更の川を眺めた。

次第に上つて行くにつれて、月の光は益々廣くなつて行つた。しんとした土手下の人家も、停車場の黒い建物も、寺のこんもりとした森も、何も彼も明るい月光を帯びるやうになつた。後には蘆荻の一面に生えたその錆びた沼にまでその餘光は及んで行つた。蛙の聲は湧くやうにきこえた。

## 九

此頃、ちよいちよい、この近所にその姿を見せる二人づれの女の姿が、あたりの人達の噂に上つた。

二人とも二十一二の女であるが、一人は瘦せた美しいハイカラさんで、いつも生れて半年位しか経たない男の兒を負つたり抱いたりして來た。一人はともすると、その侍女ではないかと思はれるやうな、容色はさうわるくはないが、何方と言へば、色の黒い、物の言ひ方なども、いくらか男まさりといふやうな質であつたが、それは侍女でも何でもないとふことが段々二人の口のきゝ方などでわかつて來た。二人とも此處等では見ることも出來ないやうな、髪の毛を真中からわけた、女優まけともつかずさうかと言つて束髪ともつかないやうな髪を結つてゐた。

そのお揃ひの不思議な髪が、一番先に人々の眼を惹いた。

『支那の女だんべ。』

などと誰かが言つた。さうかと思ふと、

『女優か何かで、H町に今、芝居を打ちに來てゐる連中ぢやないかな。』  
などとも噂した。

その二人が此の近所に姿を現はしたのは、つい一週間ほど前からであるが、それが何處にゐるのであるか、何處からやつて來るのであるか、この停車場附近の人家にゐるものでないことだけは確かであるが、その素性は容易にあたりの人々にはわからなかつた。ハイカラの方が男の兒——確かにその女の生んだに相違ない男の兒を抱いてゐるのも、人々の好奇心をそゝる種となつた。

かれ等は沼の方からやつて來て、T街道を歩いて、それから、この停車場附近を通つて、並んで歩いて土手から川の方へ行つたり、またふらふら通りを歩いて饅頭を買つたり、ふかし芋を買つたりして行つた。色の黒い方が雜貨店に寄つて、半紙を買つて行つたりした。

『この停車場で下りたに相違ないと思ふが、いつ來たんだか知らないか。』

『知らない。』

『ぢや、此處で下りたぢやないのかな——。H町の停車場で汽車を下りたのかな。』  
汽車の方の人達は、寄るとたかるとこんなことを言つた。



車掌見習もそれを見れば、お玉もそれを見た。土手の溜りの車夫達も二人の話しながら土手に上つて行くのを見送つた。

ところが、それが寺——その向うにある寺に来てゐるものだといふことのわかつた時には、停車場が出来たために、町から派出されてゐる若い巡査の下に、ある命令が署長から下されてゐて、その若い二人の女づれに對して十分注意を拂へといふことであつた。

丁度、その時分、ある恐ろしい計畫を懐抱してゐる群があつて、政府でも、それに對しては十分の注意を拂ふことを各府縣下の警官に命令してゐる時であつた。新しい思想、社會主義、さうしたものは危険分子とした政府から嚴重な監視を受けてゐた。

H町の署長は言つた。

『あの寺の和尚は、そんなことはない筈だがな。勿論、こゝらにゐる田舎坊主ではない。學問も出来る。思想もある。英語なんか達者なものだ……。しかし、あの和尚が、さうした危険思想を懐抱してゐるとはちつとも思はないけれども……。兎に角、重大な問題だから、手落になつては此方の責任になるから、十分調べて置かなければならない。これは此處ばかりぢやない、他にも寺は世離れてゐるから、ちよつと世間に眼に立たないから、かれ等の連中は寺で同志を糾合したり何かしてゐる事實が他にも澤山にあるといふことだ……。それに、さういへば、成ほど、あの寺には小説家のTがよく来る。あの和尚と昔か

らの友達か何かになつてゐる。そしてそのTといふ男が、あれで中々危険思想を抱いてゐる男だ……。書くものにも、さうした傾向が十分にある。まだ、刑事をつけるほどにはなつてゐないが、政府でも注意をしてゐる。従つて或はさうしたことがないともわからない。向うに言つて置いてやつたが、君もそれとなしに、寺を訪問して、和尚に逢つて見て呉れ給へ。』

『承知しました。』

かう刑事のOは言つた。

『その女はあの寺でその子を生んだんぢやないね。』

『それはさうぢやありません。つい、此間來たらしいから。』

『素性は大抵わかつてゐるのかね。』

『何うも女學生らしいところもあるが、よくわかりません……。矢張、危険な思想を抱いた女かも知れません。兎に角あゝして、亭主もない子供を生んだり何かしてゐるんですから。』

『まア、一つ注意して呉れ給へ。』

其後Oは寺に和尚をそれとなく訪問して一時間程ゐた。Oは決してそれらしい素振をも面に見せず、寺に寄寓してゐる二人の女に就ても何の質問もしなかつた。かれは唯、和尚の口から、新しい危険思想についての批評乃至意見をそれと察しられないやうに聞くことをつとめた。



一日二日経つてから、Oは署長に言つた。

『何うもわかりませんが、いくら臭いところがあるにはありますな。和尚は政府の壓迫するほどそれほど新しい思想は危険でないなどと言つてゐました。しかし、あの女達がそれに何う連關してゐるかは、ちよつとわかりません。』

『二人の何方かが和尚と臭いつて言ふやうなことはないかね。』

『よくはわからんが、まア、そんなことはないやうですな。』

停車場の派出所の若い巡査の報告でも、矢張、さうしたことはないらしいといふことであつた。その二人の女達は、山門を入つたところにある本堂の右の一間を借りて、それから庫裡の方へ行く廊下に七輪や赤い陶器の釜などを持つて来て、そしてそこで自炊をしてゐると言ふことであつた。『變り者は變り者らしいが、何か文學でもやつてゐる女ぢやないかと思ひます。』若いだけに、多少肯綮に中つた觀察をその巡査は署長に上申した。

『その文學が怖いんだ……』

かう署長は言つた。

和尚は和尚で、その後三度までも、別に用もないのにOがやつて来て、長話をして行つたのを不思議にしてゐるが、寺のある世話人から注意されて、その餘りに馬鹿々々しいのに呆れたといふ風で、歸つて

來てから、女達に、

『大變ですぜ、あなた方は社會主義者の群だと思はれてゐるんですぜ。』

『まア……』

『さういふ恰好をして出て歩くからですよ。田舎ぢや、ちよつと眼に立ちますからね。』

『女優に間違へられたり、社會主義者にされたり、随分、御丁寧ね。』

かう色の黒い方が言ふと、

『まだ、あるわ。……支那人？』ぶつとふき出すやうにして、ハイカラの方が言つた。

『随分、しかし、政府も神經過敏になつてゐるんだね。』

『本當ね……。それにしても、私のやうな女が、社會主義の中にもゐるんでせうか。』

『それはゐるさ。女性を共產主義的にやつてゐる言ふぢやないか。』

『そんなことは出来るもんでせうか。』

『出来るか何うだか、それはあなた方に訊いて見る方が近路だ。』

『まア。』

と目を睜るやうにしてハイカラな方の一人が言つた。

ハイカラな方は、この半年ほど前に、その戀人である男のためにこの子を産んだ。否、その子の出來



たために、かれ等の間の戀は破壊された。一つは世間のために、また一つは男とかの女との心の争闘の爲めに……。ことにかの女は名譽ある地方の資産家の娘であつたために、一層さうした不面目に對する打撃が大きかつた。かの女は父母からも一時勘當された形になつた。かの女は戀と藝術とに悩みながら、子供の處置をして、新しい生涯に入らうとしてゐた。處が、女の兒一人しかない和尙は、呉れるなら、貰つて育てたい。と言ふので、それで寺の細君にその子の怱むまでゐて、そして置いて行かうとしてゐるのであつた。色の黒い方も、矢張同じ師匠のもとにかの女と相弟子で藝術を研究してゐるのであつたが、『それでは、私も一緒に行きませう。そして田舎で靜かに創作の筆に親しみませう。』と言つてそしてやつて來た。

従つてハイカラの方の一人に取つては、この田舎の寺住ひは、さびしい悲しいものであつた。いろいろなことがかの女の心を時には沈ませ、時には昂らせた。此頃では、一時きつぱりと思ひ切る氣であつた男に對する情熱が盛んに燃え出して來て、新しい生涯を築くために寧ろやつて了はうと思つて決心して來た子供さへ手放すことが出來ないやうな氣がし出した。戀の復活をさへすれば、何もこの子供は田舎の寺の子になどしなくつても好いのだ。三人一緒に睦しく暮して行くことが出來るのだ……。こんな風にも考へらるれば、またそれとは反對に、名譽が、世間が、父母の悲哀が、藝術が、さうした情熱に驅られて行くかの女を遮つたりした。一緒に來た相弟子の女が、藝術の他には、何の苦しみも憂ひもな

いやうにして、せつせとすぐれた作をしてゐるのも妬ましく思はれた。時には一刻もその身を離れずに、何處に行くにも、起きるにも寝るにもその身の傍を離れない一塊肉が邪魔になつたり、重荷になつたり、または愛着の羈絆になつたりした。かの女は二三年前の青春の花のやうな時代を胸に浮べては、ひそかに袖を涙に濡した。

かの女を愛慾から藝術に引戻さうとして心配してゐる師の恩愛もさることながら、また再び男に走るやうなことがあつては、師に合はす顔もないと思ひながらも、さびしさと孤獨と愛慾との情熱に絡み附かれては、かの女は落附いてぢつとしてゐられないやうな氣がした。次第に野のさびしさがかの女の心を堪へ難くした。

かの女はある日、一緒にゐる女に知られないやうにして、男に宛てた手紙をその中に封じて、男の友達である或る雑誌記者の許に消息を書いた。そしてその午後に、矢張、一人で散歩するやうな風をして、停車場の方へやつて來て、それを構内のポストに入れた。

ふと其處に、その傍に、例の若い車掌見習が、何か翻譯物らしいものを手にして、熱心にそれを讀み耽つてゐるのが眼についた。と、それに、その翻譯書に引附けられたといふやうにして、不意に、

『ちよつと拜見な、何アに、それ？』

かう言つて、かの女は身をその傍に寄せた。



本の上から眼を上げた車掌見習は、評判になつてゐるハイカラな女が子供を負つたまゝ莞爾して其處に立つてゐるのを眼にしたが、そのまゝ本を翻して、黙つてそれを見せた。

『死の勝利ね。よくこんなものを讀んでゐてね。』

『……………』

『面白い？』

『え……………』

『感心ね。……………田舎で、こんなものを讀んでゐるものはないでせう。』

『え、ありませんな、田舎では……………』

『文學者になる積り？』

『え……………』

『それぢや、こんな田舎になんかちや駄目よ。東京に出なくつちや——。藝術つて、それは難かしいもんよ。讀んだり書いたりしてゐるばかりでは十分でないわ。東京に行つて、文壇の空氣にも觸れて見なければ——』

『田舎ぢや、本當に駄目です。』

急に、意氣投合したといふ風で、『その中、東京に出る積りです。』

『出たら、いらつしやい。……………文學をやるつて言へば、矢張、私達と同じですもの。』

『ぢや、あなたも文學をおやりになつてゐるんですか。』

『え、さうよ。』

『もう、一人の方も……………』

『さう、あの人も……………』

『それは嬉しいな……………。まだ長く此方にゐるんですか。』

『何うなるかわからないけども、少しはゐるわ。』

かう言つてかの女は自分の小さな名刺を車掌見習に渡した。

十

それから一月ばかり経つた。

秋はもう野に來た。夜は蟲の聲が垣に満ちた。かの女の出した手紙の返事は矢張その雜誌記者の名で來たが、中には男の手紙も封じこめられてあつた。寺の和尚も、一緒にゐる一人の方の女も、少しもそれを知らない中に、かれ等の以前の戀愛關係は十分に復活した。

かの女は一緒にゐる女に、藝術も貴いが、實生活を犠牲にしてまでも藝術をやる必要はないなどとい



ふ話をした。

『だって……』

不思議さうな顔をして、色の黒い方はハイカラの方の女の顔を見た。

『それはあなたなんかには、さう思はれるかも知れないけども、實生活と藝術とを離して了ふ必要はないと思ふわ。尼さんや坊主のやうな生活をしなければや藝術が出来ないと言ふのは、まだ本當ぢやないと思ふわ。』

『さうかしら？』

『だって、さうぢやありませんか。本當に實生活に浸つて見なければ、本當のことは書けないぢやありませんか。』

『そこを言つてゐるんぢやないんでせう。さういふ意味ぢやないでせう。實際に捉へられてはいけなと言ふのは——』

『さうかしら？』

かう言つたが、『でも、此頃、何うしても、さう思はれて来て爲方がない。新しい考へが起つて来てしやうがないのよ、此頃……』

『變ね……』

かう色の黒い方は言つて、新しく起つて來てゐる友の心の状態をさがすやうにして、凝とその顔を見た。

ある日の午後三時過ぎであつた。和尚は法類の寺に葬儀があつて留守、もう一人の女は且町まで行つて來ると言つてさつき出かけた。かの女は子供に添乳をしてゐるが、ふと、裏の森の方から人の入つて來る氣勢がしたと思ふと、窓のところに来て、ポトポトと障子を指で叩くやうな音がした。

かの女は耳を敏てたが、ふと思ひ當つたことがあるやうに、すつと立つて、そして障子を明けた。そこに袴をはいたかの女の男が立つてゐた。

『まア。』

かう言つたが、小聲で、『森の中で待つてゐて下さい……。今、すぐ子供を負つて行くから……』

障子を閉めて、急いで子供を負つて、そして本堂の傍に置いてある下駄を突つかけて、裏の森へと行つた。男は森の中の草藪の中の丁度本堂のうしろに立つてゐる壁のところ立つてゐた。

『いつ來たの？』

『今の汽車で……』

『よくすぐわかつてね。』

『若い車掌見たいな青年が、知つてゐて、すぐ教へて呉れた。』



『この間、手紙に書いてやつた文學好きの車掌よ。』

『お政さんは？』

『留守。』

『和尚は？』

『矢張留守……』

『それは好い鹽梅だったね。』

『だって、この間の手紙のやうに、断らずに行くわけには行かないわ。』

ふと女の背中の兒に氣が附いたやうに、男は、

『大きくなつたね。』

『起きてゐる？』

『大きな眼を明いてゐる。』

『そら、お父さんだよ。』

揺つて見せるやうにした。子供はえん、えんと躍り上つた。

『嬉しいだらう、お父さんに逢へて……。お寺の子になんかなるのは厭だッね——。わかると見えるわね。』

『それよりも、急がなくつちやいけない……。何うかと思つて來たのだ……。上りが四時に出るのがあ  
る。』時計を出して見て、『あと三十分しきやありやしない。急いで、行く方が好い。荷物なんか持つて行か  
なくつても好いから。……。あとで何うにでもなるから。』

『でも、餘りヒドくはない？ 世話になり放しで……。和尚さん、好い人なんだから。』

『だって、ぐづく考へたり何かしてゐる中には、またいろく邪魔が入つて來たり何かして厄介だ  
から。』

『それもさうね……。』

かの女はちよつと考へたが、『子供をやることになつてゐるんだから、話すと却つて面倒だ……。わる  
いけれども、また詫びのしやうもある。』なら、ちよつと待つて頂戴、お政さんだけに手紙を残して行く  
から……。心配するといから。』

『早くしないと、間に合はんよ。』

かの女は急いで此方へ來た。誰も見てゐるものはなかつた。あたりはしんとしてゐる。庫裡は離れて  
ゐるので、寺の上さんはゐるのであるけれども、それと氣が附いたやうな様子もない。かの女は急いで  
ペンで手紙を走り書きに書いて、それを一人の女の方の机の上に置いて、もう一度子供を下して、好い  
方の着物に着替へて、また負つて、二三必要なものを風呂敷に包んで、大急ぎで此方へ來て見ると、男



は時計を見い見い焦つて待つた。た。

『何分あれや行ける？』

『十分あれや大丈夫でせう。』

大急ぎで、かれ等は森の中の草藪の中をわけて、別にしきりといふしきりもない境内を田圃の方へ出て来た。午後四時すぎの日影は明るく靜かに野を照した。沼に漁に出てゐる舟も一二隻そのキラキラする日影の中に黒く見えた。

『近路を行きませう。』

かうかの女は言つて、田圃から停車場の方へ真直に突切つた。

途中に停車場の構内に入らうとする處にある半間ほどの赤土の絶壁のやうになつてゐるところは、男のあとについて、女も一生懸命に飛び下りた。

少し来て、ほつと一人は呼吸をついた。しかし急いだ足は緩めずに……。

『大丈夫でせう。』

『まだ十分ある。』

『なら、大丈夫……』

で、二人はレイルを横切つて、通りへ出て行つた。

女の胸には再び戀に蘇つた喜悅が溢れるやうに漲つてゐた。此頃では毎日毎夜思はぬ時とてもない男と今夜は一緒に語ることが出来る……。かう思ふと、體もわななくやうな氣がそよろにした。かの女の懷にも金はまだかなりにある……。男もいくらかは用意して來てゐるに相違ない……。

『今日は東京に歸らないで、何處かに泊りませうか。』

『何うでも好い。』

『私もいくらか持つてゐますから……』

『でも、泊るやうなところはあるかえ。』

『何處だつて好いちやないの？ 田舎の何んな宿屋だつて好いわ。』

こんな話をいきせきしながら、停車場へ來ると、もう出札口は明いてゐて、乗客は切符を切つて貰つて、ぞろぞろプラットホームへと出て行つてゐた。汽車は既に準備を整へて、新しい列車がさし込んで來る日影を受けながら、既にそこに長く横たへられてあつた。

途中の五驛までの切符を買つて、二人が構内に入つて來ると、其處に例の車掌見習が向うから歩いて來るのにばつたり出會つた。

車掌見習は不思議な顔をした。殊に、さつき寺の所在を教へてやつた男と一緒にかの女がゐるのを不思議さうにした。矢張小説の中のあるシーンがその前に展開されてあるやうな氣がした。



『お歸りですか。』

かう聲をかけた。

『え、ちよつと……』

『また、いらつしやるんですか。』

『何うなりますか……』かう言つたが、男から名刺を一枚出させて、『東京に來たら、此處にいらつしやいね。本當に田舎になんか埋れてゐては駄目ですよ。』

『難有う。』

かう言つて軽く辭儀をした。

『もう一人の方はゐらつしやるんでせう？ まだ……』

『え、あの人……』

で、別れて、二人は列車の中に入つた。暫くして時間は來た。相圖の汽笛と共に汽車は靜かに構内を出て行つた。若い車掌見習の見送る眼をあとにして……

『歸つて來たら、びつくりするでせうね。お政さんも……、和尚さんも……』

『なァに、あとで、手紙で、わけを書いてやれば好い。』

つくづく倦きた田舎にも、今更にいくらか心が惹かれるといふやうにして、かの女は段々速力を増し

て行く汽車の窓から顔を出して寺の方を見た。

汽車はかうした二人と、田舎の人達と、荒くれた唇と、蓬なす髪と、色の褪せた學校の先生らしい春廣服とを載せて、夕日にかゞやく沼の畔りを縫ふやうにして駛つて行つた。

十一

Kと酌婦との關係は、もう此頃では誰も知らないものはなかつた。

お互ひにのほりつめた結果のふしだらがそこからも此處からもあらはれて來た。Kは苟くも借りられるところからは、すべて借り盡した。驛長さへも、『困るね、君には。』と言ひながらも、尠なからぬ金を借りられた。

若い車掌見習がその時想像したやうに、その相手は、矢張、そのY屋の二三軒先の小料理屋の色の白い、小づくりな、お袖といふ酌婦であつた。今では女の方でもかなり深くKを思つてゐた。

さうした稼業の家の習ひとして、Kと女の噂のばつとあたり立つやうになつてから、Kは餘り歓迎されなくなつた。そこのお上さんにしても、亭主にしても、Kに絞るべき金がなくなつたばかりではなく、賣物であるその女にさうした浮名の立つたことを恐れた。客がそれを知つてやつて來なくなることを恐れた。



『それは来て下さるのは好いけれども、お客は、貴方一人ぢやないんだから、それも、貴方が借金をついで下さるとか、何うかして下されば好いけれども、それも出来ないし……。それは何も不人情で、間を堰くとか何とか言ふ譯ぢやないんですけども、そこにはいろ／＼なことがありますからね……。だから貴方だつて、本當に、お袖の爲めにならうと思ふんなら、少し足を遠退いて、毎日の勤めの方をしつかりとして、そして話の出来るやうにして下さらなくつては……。何も逢はせないッて言ふんぢやないから。』こんなことを角が立ぬやうに上さんはKに言つた。

一時は毎夜のやうに出かけて行つたKも、此頃は社宅に歸つて、汚れた夜着にくるまつて寝て了ふやうな夜が多かつた。この夏、汽車が開通した時分の快活な、元氣な、よく駄洒落などを言ふやうな氣分はいつかなくなつて、わるく緊張したやうな、常にわくわくと震へてゐるやうな、または何うかするとほんやりと仕事も手につかないやうな人になつて了つた。始めはKはよくその女ののろけを同僚達にきかせた。M屋のお玉なども、

『Kさん、ちよつと此方を見て御覽？ 口に何かついてゐてよ。昨夜のぢやない？』

などと顔さへ見ると、冷かしたものであるけれども、此頃では、まご／＼すると、何んな目に逢ふか知れないといふやうに誰も彼もKをひやかすものすらなくなつて了つた。

ある日は、Kは驛長の家に呼ばれて行つた。

驛長は懇々として意見した。それは皆理を盡し、情を盡した言葉である。一つとして難有く思はれないことはない。しかしさうした戀の渦に浸つたものでなければ、到底かれの苦しい、自分でも恐ろしい陥穽とは知つて居ながら何うすることも出来ない煩悶を知ることが出来なかつた。さうした深切な意見よりも、一夜女に逢ふ金を貸して貰ふ方が何れだけ難有いか知れないやうなものであつた。

殊に、その驛長の言葉の中で、いざとなれば轉任もさせかねないやうな口吻と、酌婦風情に男が迷つてゐてはしやうがないと言つたその『酌婦風情』の四字とが強くKの頭に響いた。

（金さへあれば……。金さへあれば、その侮辱の中からかの女を救つてやる事が出来るのに……）

かう思ふと、堪らなくなるやうな戀心が却つてかれを襲つた。

ことにかれの働いてゐるところから、その女のゐる家がはつきり見えるのがかれには辛かつた。田舎の百姓の息子か、でなければ汚ない商人などを相手に女が戯談口をきいてゐるのを見る時には、かれはさつさとその見えない方へと來た。

それでもKに取つてまだ心丈夫なことは、お袖がかれを振り捨てないことであつた。何うかすると、お袖は停車場の柵のところに来て、そしてかれと話した。

夕暮の六時の下りの來る時分は、殊にKは辛い辛い心の壓迫を受けた。前の軒を並べた家に灯がつく。

軒燈がつく。酌婦達は皆な白粉をつけて、晝間働いてゐる姿とは丸で違つたやうに美しくなつて、暮



れかゝる薄暮の空氣の中にその色の白い顔をくつきりと見せて、海酸漿などをギウギウ鳴らして店にゐたり、また表に立つてゐたり、そのあるものは、早くもやつて來た若い男と相對して、何かこそく立話をしてゐたりなどした。その賑やかな薄暮の空氣を衝いて、汽車はいつも轟々とした響をあたりに漲らせて、停車場へと入つて來た。

それから終列車が來て、一日の用事が終るまでは、Kは殊にほんやりして働かうにも働く氣にはなれないやうに見えた。

若い車掌見習には、三四月の内に、かうも變つて行つたその生活態度が不思議に見えた。以前のやうな元氣もなしに、停車場から十時すぎに歸つて來て、碌々同宿のものとも話しもせず、呼吸つきか何ぞのやうに黙つて茶を立膝して飲んで、それでもそもそと自分の室の汚れた夜着の中に入つて行くのが氣の毒に思はれた。

ある時は、餘りに堪へられないといふやうにして、使つてゐる老婆に、

『婆さん、酒を二三合取つて來て呉れないか。』

『また、酒けえ？』

老婆はかうは言ひながらも、澁々ながら立つて酒を取つて來た。

ちびりくやつてゐたが、

『A君。』

かう若い車掌見習を呼んだ。

『何だえ？』

『一杯飲まないか。』

『澤山だ。』

かう隣の室から車掌見習は言つた。

『そんなことを言はずに、一盃來て飲んで話し相手になつて呉れ。さびしくつてしやうがねえや。』  
爲方がないので、若い車掌見習は讀みかけた本を捨て、そして此方へとやつて來た。

Kは黙つて盃をかれにさした。

『何うしたんだ。イヤに元氣がなくなつたぢやないか。』

『A君、君なんかにはわかるまいが、本に書いてあることとは丸で違ふよ。君、實際辛い。』

『何が？』

『男と女のことさ。』

『でも、辛いばかりぢやあるまい。面白いにも面白いんだらう。』

『辛いばかりだ……。それも、眞劍にならなければや好いんだけど……。何うしたつて、眞劍になつ



て了ふからね。女が、自分の愛した女が、賣物買物で他の男と寝たり、戯れたりしてゐるのは、とても見てゐられない。』

『だつて、だるまだもの……』(そんなことはしやうがない)といふ口吻で笑ひながら傍から老婆が言つた。

『だるまさ、それはだるまさ……。だけど、人間は同じ人間ぢやないか。』

かう言つたKの言葉には、強い反抗の氣分が雜つてゐた。

『だるまなんか、人情なんてあるもんかね、お前さん。お前さんなんか、騙されてゐるから、そんなことを言ふんだよ。金がないのが縁の切れ目つて言ふぢやねえか。』

『婆さんなんかにはわからねえ……。若い者の心はわからねえ。』かなり酔つてゐるKはかう手を振つて、『A君、君なんかにも言つて置くが、戀なんかするもんぢやないぜ。辛い、辛い……。』

『そんなことは言はずに、それほど思ひ合つたら、一緒になるやうにしたら好いぢやないか。』

かう若い車掌見習が言ふと、

『それが出来れば、こんな苦勞はしやしないよ。それは先の言ふのも尤だ……。將來のためには、今、お互ひに逢はずにゐて、兩方で一生懸命に稼いで一緒になるやうにする方が好いには極つてゐるけれど、女が他の客と戯れたり寝たりするを傍で見て、平氣で寝てゐられるかい、A君。』またぐつと酒を

呷つて『それに、先の言ふことだつて、半分は手だから。わるい虫がついた位に思つてゐるところがあるんだから。何うかして離さう離さうとしてゐるんだから……。でなければ、將來一緒にしやうといふ深切が本當にあるなら、こんな風に仲を堰かなくつたつて好いんだもの……。A君、かうしてゐる中にも、かうして酒を飲んでゐる中にも、女の心は僕から離されて行つてゐるんだ。』

『だつて、お互ひに本當に思つてゐるんなら、何んかことがあつたつて好いぢやないか、時が経つたつて構はないぢやないか。時のために打壊されるやうな戀は、本當ぢやないぢやないか。』

『それは君なんかの空想だよ。そんなことは言つてはゐられないよ。かう言つてゐる中にも、女の心は僕から離れて行つてゐるんだ……。あゝ、あゝ。』かう言つて、後にぐつたりと身を倒して、後頭部に手を組合せたまゝ、黙つて天井を眺めた。その目は大きく開いてゐた。若い車掌にはしかし何うすることも出来なかつた。Kのためにやさしい慰藉の一つも言つてやりたかつたけれど、さうした實際に觸れて見たことのないかれには、何を言ふことも出来なかつた。自分の室に戻つて來てからも、さうした實際生活が本で見た色彩の濃い戀愛と雜り合つて頭に上つて來た。子をおぶつて男と一緒に寺から逃げて行つたハイカラの女のことも思ひ出されて來れば、Y屋のお上さんの處にをりくゝやつて來る肥つた旦那のことなども思ひ起されて來た。わからないわからない實際の生活であつた。やがて一時間ほどしてから、婆さんに起されて、自分の寢床に入つて行くKの氣勢などがした。



月の冴えた夜であつた。

終列車が来てからもう一時間ほど過ぎた。若い車掌見習が用事をすまして構外に出て来ようとする時、何かけたましく人の叫ぶ聲がきこえた。何かと思つて其方に行つて見ると、M屋の前には、近所の人達が大勢立つてゐるのが黒くかたまつて見えた。

『何だ、何だ……』

『何うした、何うした……』

かういふ聲と共に、家の中では、中年の女の泣き饞舌に饞舌る聲と、主人の尖つた聲とがきこえた。群集の中から覗くと、灯のついた中に、昨日あたりやつて来た上さんが、色の青白い昂奮した顔をあたりを見せて、頻りに泣き饞舌つてゐる傍に、主人がこれも矢張昂奮した顔をして立つてゐて、Y屋の主人は頻りにそれを仲裁してゐるさまが浮き出した繪のやうになつて見えた。

『このあま、太いあまだ……。亭主の寝首もかきかねえ奴だ。』

『お常を出せ、お常を……』

上さんは負けずに呶鳴つた。矢張白い顔をしたお玉がそれを後から抱いてゐなければ、そのまゝ亭主

に喰つて蒐らうとする氣勢を見せた。眼は怒つた獸のやうに赤くなつてゐた。

上さんの手から振りもぎつたらしい出齒庖丁を板場の男はY屋の主人の手から受取つて奥に持つて行つた。

『お常を出さねえか。お常を……。あの太いあまを殺さなければ、殺さなければ——』かう呶鳴つて上さんはじたばたした。ともすると、お玉と板場の男と二人で支へてゐるのを組解かれさうに見えた。

亭主が傍に寄つて行かうとするのを、Y屋の主人は頻りに留めて此方に伴れて来た。

外ではいろ／＼噂を人々がした。

『まア、さうかね、あのお常さんが……』

かう驚いたやうに、小聲である女が言ふと、

『前から出来てゐたんだとさ……。それを薄々知つてゐて、此方によこさなかつたのを、やいやい言つて、旦那が此方に呼んだとさ……。何でも知らないと思つて、ふざけてゐたところに、あの上さん、出齒か何かを持つて飛込んで行つたんだとさ。』

『へえ、さうかね？』

『お常さんが、さうかね。旦那と出来てゐたんかね。』

『それで、お常さんは何うした？』



『裏からでも遁けたんだんべ。』  
ガヤガヤ種々な聲がきこえた。

しかし暫く経つと、上さんもなだめて奥に伴れて行かれたらしく、『本當にしゃうがありやしねえ。人様の前も面目ねえ……。滅多に女つ子と口もきけねえんだから……。』主人はこんなことを言つて、とめに入つて来た人達に禮などを言つた。  
やがて人々は散じた。

月は靜かに照した。物の影がすべて黒くはつきりとあざやかに見えた。若い車掌見習は餘り月が好いので、土手の上まで行つて、川などを眺めて暫くして戻つて來ると、あたりはもうしんとして、今し方さうした悲喜劇があつたとは思はれぬばかりに、Y屋の灯のさびしく靜かについてゐるのが覗かれた。主人も板場の男ももう其處にゐなかつた。お玉が唯一人ほつねんと白い顔を其處に見せてゐた。  
月はいよいよ冴え渡つた。

## 十三

土手の上をT川に沿つて歩くと、ところどころに、小さな路がそこから下にうねうねと下りて行つてゐて、或は櫛の樹で圍まれた茅葺屋根の後に、或は唐箕をカラガラ廻して收穫に忙しがつてゐる農家の廣

庭の前に、或はゴタゴタと固まつた村落に、或は水の綺麗に澄んだ里川の土橋の畔に出て行つたりしたが、水田に面した向うには、近頃出來た村の小學校の廣い運動場を前にした大きな建物が見えて、啾々の聲や、唱歌の譜につれて鳴るオルガンや、放課時間を運動場に出て騒ぐ兒童の聲やらが賑やかにあたり響いてきこえた。

其處からは、午後四時過ぎになると、若い背廣服の教員や、カシミヤの袴をつけた女教員達が、風呂敷包を抱へて一人二人と話しながら出て來た。かれ等は大抵は二里か一里半を隔てた町または村からやつて來て、一日を兒童の相手に暮して、そして楽しい夕飯の團欒を頭に描きながら、野の道を靜かに辿つて歸つて行くのであつた。縣の師範學校の寄宿舎から出たかれ等は、かうした小さな運命に半は甘んじてゐたが、中には絶えずもうすこし生効のある生活へ出たいと思つてゐるものもなかつた。しかしかれ等の其志は、大抵は落葉のごとく埋め果てられるやうなのが多かつた。かれ等は一緒に毎日顔を見合せてゐる女教員とゆとりなく戀に落ちたり何かして、皆なそれ／＼小さな家庭を持つて、段々年功加俸の年限の來るのを待つやうになつたり、または校長になるだけの希望に満足したりした。時はかうした生活にも幸福に平和に過ぎて行つた。

その土手の小學校には、Sといふ若い教員がゐた。他の人達の師範出であるのに引きかへて、中學校の寄宿舎からちかによつて來ただけに、教員の群の中では勢力はなかつたけれども、志望も高く、學問に



も熱中し、趣味にも富んでゐたので、児童達にはS先生、S先生と言つて慕はれた。かれは父母の家が遠いので、始めはそこ此處との中間にあるH町の寺の一間を借りて自炊生活をしてゐたが、それも面倒になつて、去年あたりから學校の一間を借りて、そこに起臥するやうになつてゐた。かれはよく散歩に出かけた。

その姿は沼のほとりにも、寺の中にも、または野のさびしい道にも、樺の紅葉した垣のところにも、あひるの水かきの黄く動いてゐる澄んだ秋の水の土橋の畔にも、または川の一ところ見わたされる土手近くの松原の中にも見えた。かれは瘦せた、何方かと言へば蒼白い顔をあたりに見せて、寫生をするための板と繪具皿とを携へて彼方此方と歩いた。時には里川の畔に小半日その畫板を据ゑて、熱心に橋をスケッチしてゐる傍に、子供達が二人も三人も集つて來て『ヤア、先生、繪を描いてゐらア。』などと言つたりした。

この若いSの眼にも、停車場が出来たために、俄かに發展した土手の草路のあたりのさまがめづらしく映つた。その日記にもをり／＼そのことが書かれた。

(——日、晴。

今日、停車場に行つて見る。あたりの開けたのに眼を驚かす。酌婦の白粉をつけてゐる家なども出来た。その他、料理屋、休憩店、汽車の人達の住む家など……。

これが今まで草の野であつたと思ふと、不思議な氣がせずにはゐられない。こゝもこの爲めに開けて、町になつて行くだらうといふ評判も滿更うそではないやうな氣がした。

M屋で、午飯を食ふ。さいの煮附、旨かりし。お玉といふ女中、美しとはあらねど、色白にして愛嬌あり。)

(——日、日曜日、——晴。

また停車場に行く。煉瓦の竈の工場に知つてゐるものがあるので、寄つて見る。汽車が出来て、運搬の方は好くなつたけれど、製造品は矢張不十分——本當の技師を呼んで來て、もつと資本を下さなければ、とても十分なることは出来ず。それに、近頃こゝの主人、何處かに妾か何か出來て、碌々工場には寄りつかぬといふこと。事業の完成は矢張難かし。意志が固くなくつては駄目といふことを知る……。歸りは、土手の方から歸る。)

かうした記事をかればよくその日記に書いた。否そればかりではなかつた。かれの寫生帳には、まだ汽車の出来ない時分の煉瓦の竈のさびしい工場が描かれたり、その工場の職人達の生活が描かれたり、またはさびしい沼の蘆荻が選ばれたりした。沼の水あほひなどもあつた。半ば出来かけた停車場などもあつた。沼に沿つて汽車が走つて行くところなどもあつた。何うかすると、散歩に此處までやつて來て、歸りに、近頃開いた店で、出来立ての饅頭を買つて行つたりした。



ある日はこの賑はひを見せる爲めに同僚のMを伴れて来た。

二人は土手の上に来て、草を藉いてそしてこの賑やかな小さな渦を卷いた人家や停車場を見た。

『これは何うも驚いた。すつかり賑やかになつて了つた。』

かうMは言つたが、すぐあとをついで、『人間の天然に及ぼす變遷といふものも不思議なもんだね。』

『本當だ……。誰だつて、此處がこんなにならうとは思ひもかけなかつたからね。』

『町つて言ふものは、かうして出来るものだと思ふと面白いね。それにしても、鐵橋は出来るのかねえ。』

『會社に金はないさうだけでも、此處まで持つて来て放うて置いては役に立たないから、いづれ出来るには出来るんだらう。』

『鐵橋が出来ても、此處の繁華は變りやしまいね。』

『停車場があるから大丈夫だらう。』

『さうだね。今に、もつと開けるかも知れない。何しろ、此處はK町、A町へも行く交通の衝に當つてゐるからね。』

こんなことを言つて、あちこち見てゐた二人は、それから土手を下りて、煉瓦の工場に行つて、その大きな竈などを見てゐたが、そこから出て来て、

『あそこへ行つて午飯でも食つて行かうか。』

かうSが言ふと、

『そのお玉さんのゐる家に行つて見ようぢやないか。』

かうMは應じた。

で、二人は晝間は靜かな、飲客などもゐない、ひろくとした水田に面した一間で、お玉を相手に、川魚料理か何かで、酒も飲まずに午飯を食つた。

それは夏の終であつたが、今はもう秋もすぎて、木の葉ははら／＼と風にふかれて飛んだ。ある朝は霜がいち白く軒に置かれた。

Sも此頃は寒い風と、そろ／＼わるくなり出した霜解の路に恐れをなして、滅多にその姿を此處に見せなくなつた。

## 十四

此頃はもうわざ／＼乗つて見るやうな乗客はなくなつたけれども、それでも汽車は着くことに、かなり多い乗客を此處におろした。

西風は寒く寒く林を鳴らし、草藪を動かし、ことに寺の古い森には、潮のやうな響きを寄せた。沼添



ひの蘆荻は花を着けたまゝに枯れたのをその一部だけを安く拂ひ下けて、長い鎌で村の人がさく／＼と音をさせて刈つた。それに冬の日が薄く射した。

獵の時には、汽車は出来ても、または會社ではかなりそれを廣告したけれども、まだすっかり都會の人達に知れ渡らなかつたと見えて、銃を手にした乗客はまだ澤山はやつて來なかつた。『今年は沼は荒されるだんべ。』かう言つてその周圍の人達が心配したほどのことはなかつた。

それでもをり／＼は銃の音が靜かな空氣を破つて、水鳥の飛び立つ音がけたましくあたりいきこえた。時には思ひもかけない獵の獲物を得意さうにして持つて、M屋の裏座敷で休んで行く都會の人達などもあつた。

次第に寒く寒くなつて行つた。空は碧に、西風は日毎に吹いて、土手下の車夫の溜りは日當りで春のやうに暖かであるのに拘らず、それから一步土手に上ると、面を向けられないほどであつた。車夫は客を乗せながら、『何うも、土手の上は、これからはやり切れねえ。向ひ風ぢや、賃錢を倍貰つてもたまらねえ。』などと言つた。

T川の水はさながら錆鐵納戸の布を流したやうに、ところ／＼に細長い、または丸い砂洲をつくつて流れた。帆の影もなければ、舟もなく、ただ遠く河川工事の浚渫船から湧くやうな黒い煙が靡いた。渡しをわたつて行く人達も、舟の向う岸からやつて來る間、風の當らない渡船小屋の中の檣火の周圍に集

つて、其處の爺の出して呉れる番茶を飲んで、一錢二錢を置いた。

ある日の午後、汽車から此處等に餘り見ないやうな、年の頃二十三四の、眼も覺めるやうに美しい、何方かと言へば、背の高い、色の白い、ダイヤの指環を二つも嵌めてゐるやうな女が、小さな手提を持つて下りて、そこまで出張つてゐた車夫にT町まで行くやうに命じた。

鬨に中つた留といふ三十五六の車夫が逸早く車をそこに寄せた。

『T町はどちらです?』

『Kといふところがあるね、町に……』

『え、御座います。』

『そこに、益田つていふ家があるでせう。』

『え……財産家の……』

『そこに行くんだけどね。』

車夫達は顔を見合せた。かれ等の頭には、かねて聞いてゐたその益田といふ財産家の東京に圍つて置く妾が浮んで來た。これだな……と留は思つた。最近に、T町でその本妻が死んで、大きな葬式があつたことが思ひ出された。

留は車を挽き出したが、かうした美しい女を載せたといふこと、または金さへあればかうした女でも



自由にすることが出来るといふこと、そんなことを考へると、種々なことが思ひ出されて、汚ない醜い女と一生を送る自分の身の上などが考へられて来た。寒い風に向つて車を挽いて行く惨めさが、一層深く眼に見えるやうな氣がした。

『寒い風ね。』

『これからは、もう此方は、名物の西風で、ひどいですよ。』

『こんなに寒い處とは思はなかつた。』

『始めていらしたんですか。』

『え、始めて……』

『田舎は、東京と比べちや、お話にも何にもなりません。』

この女が、よし町か何處かの藝者で、益田の旦那をすっかり擒にして、大金を出さして圍はれてゐるといふこと、それを本妻が嫉妬を焼いて、財産を半分わけにするの何のと言つて大騒ぎであつたこと、さうしたことをかねて耳に挟んで知つてゐるので、それとなくそれを匂はせると、

『田舎なんかいやなんだけれども、是非一度は来て見ておけて、旦那が仰しやるもんですからね。それに汽車が出来て、もうわけはないからつて仰有るもんだから……』

『益田の旦那なんか、しかし好い身分ですな。お金はどつさりあるし……』

こんなことを言ひながら、Rの渡頭に来て、渡頭小屋の前に来て梶棒を留は下した。

『大きな川ね。』

『これがT川と言ふんです。』

暫く立つて眺めてゐるのを、わざと

『奥さん、そこは寒いでせう……。此方にお入んなさい。』

かう言つて、その槽火の傍に誘つた。女は寒いので、そのまゝ小屋の中に入ると、そこに待つてゐた田舎の人達は、いづれも目を睜るやうにして、その美しい姿に視線を集めた。女の眼には、かうした生活もあるかと思はれるやうな荒壁や、煙りの立つ槽火や、あらくれた男や、蓬のやうにもしやもしやとした上さんの髪やらが映つた。やがて向う岸から舟は来た。女のすつきりした姿と車と他に一つあつた自転車とは、靜かに寒い碧い川を渡つて行つた。

## 十五

四周をめぐる遠山の雪がキラキラと金属のやうに日にかゞやく時が来た。西風の吹く日は殊にそれが鮮かで、碧い空にさながら捺されたやうに見えた。土手下の停車場を出た人達は、誰でもその山の雪を仰ぎ、寒い風に面を削らるゝやうな思ひをして、Rの渡頭へと急いだ。



教員のSの日記には、『此間、久し振にて停車場に行つて見たり。山の白き、川の青き、さびしきはこの自然なり。土手下の町に朝の煙低く靡き、いつもに似ずひつそりと静まり返れるは、この冬の寒さにひそみ果てたるなるべし。夏は蛙の聲湧くばかりなりし裏の田圃にも、薄き氷張りて、日當りにもまだ蓬、なづ菜の緑の芽ぐむをも見ず。ひたきのチチと飛廻れる聲も淋しや。かくてまた雪は來らん。』と書いてあつたが、實際、その通りで、朝霜は白くさびしく家々の低い庇を壓したやうに見えた。

それでも二番の汽車で其處を下りた人は、M屋のお玉やお常や、此頃一人置き出したY屋のお政や、さうした女達が赤い襪をかけて、湯氣の白く立つバケツの中に雑巾を浸して、あたりの拭掃除に忙しいのを見るであらう。日が暖かにさして、新聞配達店の店に飼つてある九官鳥の片言交りの人真似に近所の子供達の集つてゐるのを見るであらう。あの喧嘩以來、M屋の主人は、T町に歸つて、此頃では滅多にその姿をあたりに見せなかつた。それに引かへてY屋の主人は、概して此方にゐることが多く、女の古を直したドテラを裾長にだらしなく着て、新聞配達店の亭主と頻りに何か話してゐるのをよく見懸けた。Y屋の上さんはいつも髪を綺麗に結つてゐた。

煉瓦を焼く竈の小さな工場は、以前はそこでの唯一の煙突であつたに拘はらず、四邊のひらけたのにつけて、全く隅の方に押し附けられるやうになつて、あるか無いかのやうに眼に立たなくなつて了つたけれども、それでもをり／＼その粗末な廉價な煉瓦を積んだ貨車をトロッコで停車場の構内へと運び入れ

てゐるのが見えた。政はまだそこで働いてゐると見えて、その元氣な姿は偶にはそこから出て來た。

夕暮から雪になつて、今夜は大雪になるだらうなど、思ひながら、M屋のお玉が店の戸を閉めてゐると、突然、その降頻る雪を衝いて、燕のやうに飛んで來た自轉車があつた。

見るとそれはかれであつた。

『まア……』

お玉は喜悅に思はず聲を立てた。

自轉車を其處で下りて、眞白になつた外套をはいた男は、

『今日は來ると思はなかつたらう？』

『だつて、この降りだもの。』

お玉は嬉しさうにいそ／＼して、男を奥の間へと迎へ入れた。M屋でも、好いお客として常にかれを見てゐるので、お玉も誰に氣も置かずに男を款待することが出來た。お玉は火をどつさり持つて來て、『寒かつたでせう？ 待つてゐらつしやい。今、火燵を拵へて上げるから。』かう言つて、縁側の隅から行火などをお玉は出した。

一二枚雨戸がまだ明けてあるので、雪に暮れて行く裏田圃のさびしい寒い眺めが、それと微かに打渡されて見えた。をり／＼雪のさら／＼と雨戸に當る音がした。



『もう、閉めませう。寒いから。』

かう言つて、お玉はその残つた裏の雨戸を引き寄せた。

## 十六

Kが轉任して行つたのは今から三月ほど前であつた。驛長はとても此處に置いてはと思つたので、ある日、かれを社宅に呼んで、懇々と意見して、一二年さうして離れてゐる方が好いだらうと言つた。Kは元驛長のゐる海岸に近い停車場の方へやられることになつた。時雨の降る日、Kとお袖とは、柵のところで立話をして、そしてさびしく別れて行つて了つた。

其後二人の間には手紙位は互ひに取交されてゐたのであらうか。それともまた互ひに無い縁とあきらめて、思ひ切つて東西に別れて行つて了つたのであらうか。それは誰も知つてゐるものはなかつた。Kもまたそれ以來竟にその姿をそこに見せなかつた。若い車掌見習のAの許には、向うに着いた時、端書が一枚來たが、それだけであとは何のたよりもなかつた。

お袖の姿は依然として其處に見えた。矢張夕方には白粉をつけて、銘仙の着物などに着替へて、其處にやつて來る客を迎へた。別に變つたこともなかつた。

處がある日、お袖は上さんに、『寒氣がして、ぞく／＼して爲方がない。風邪でも引いたのかしら？』

など、言つて、平常と違つて、いくらか蒼い土氣色をしたやうな顔をしてゐた。顔の鼻の下のところに小さな粟粒のやうな腫物が出來て、それが痛い、痛いとは言つてゐたが、それが原因であるなどとは夢にも思はなかつた。

無理をして、つとめて客の前にも出るやうにしてゐた。

それが、二日と経たない中に、一面に顔が腫れ上つて來て、奥の一間に汚れた薄い夜着を着てかの女は寝てゐたが、丑町から醫師が呼ばれた時には、その腫物は恐るべき面癩で、もう手おくれになつて、何うすることも出來ないといふことであつた。家の人達は俄かに騒ぎ始めた。電報を遠い國元に打つてやつたりした。

不仕合せなお袖は、その翌日の午後、枕元に誰もゐないやうな、さびしい一間で、若い二十二歳の一生を終つた。

遠い國元からは、『ユカレヌ、ヨロシクタノム』といふ返事が來た。お袖には父母はなかつた。兄があるけれども、それは道樂者で、女と情死のやりそこなひをしたりして、今では故郷にゐるか何うかわからなかつた。その電報は何でも遠縁に當るものが打つてよこしたらしかつた。此方にまだ借金が残つてゐて、減多に出かけて行くと、それをも背負されはしないかといふ懸念もあつたらしかつた。

主人も上さんもぶつ／＼口の中で愚痴をこぼした。一年はそれでも働いて呉れたものの、Kとのいき



さつがあつたり何かして、まだ借金がそのまゝに残つてゐるのに、これから十分働かせなければならぬと思つてゐたのに……。葬式まで此方できてやらなければならぬといふのは——』此方の不連なんだから何うもしやうがねえ。』などと繰返し繰返し主人は言つた。

近所でもそれを聞いた時には、誰も驚かないものはなかつた。

『だつて、昨日、そこに出てゐたぢやないか。』

かうお政は言つた。

『まア、吃驚した。え、まア、お袖さんは死んだつて……。』

お玉もかう眼を睜るやうにした。

『人事ぢやないよ、お前さん……。國からは誰も出て来ないんだとさ……。それに、誰も本當に来てやらうといふお客もないんだとさ。あの肥つた男は何うして？ あの繭買さんは何うして？ さうなると人間は薄情なもんだからね。誰も寄りつきやしないやね。可哀相ね。』

『本當ね……。何うしてまたそんなわるい病氣が出たんだらう？』

『手遅れになつたんだとさ。始めに療治をすれば、治らない病氣ぢやないんだつて……。無理をしたんだつて……。』

『線香でも上げておやりよ。』

傍からお常は言つた。

『お前さんもう行つて……。？』

『さつきちよつと行つて来た。可哀相でぞくぞくしちやつた。』

『何んなにして死んでるて？』

『裸にして置いてあつたよ……。あゝもう厭だ、厭だ。こんな稼業なんかふつふつ厭だ……。』

かうお常は身震ひするやうにして言つた。

『Kさんが聞いたら、悲しいでせうね。』

『さう、さう、Kさんツて言ふ人がゐるアね。知らせてやれば好い……。』

『知らせてやつたつて、何うにもなりやしない。何うせおあしなんかありやしないだから……。それに、死んだ人は本當に思つてゐたのかしら？』

『思つてゐたには思つてゐたらしいよ……。』かうお玉は言つた。

Kのことはその主人の頭にも上つたらしく、驛長の許にその話をしに行つたが、今更呼んだつて爲方がないといふので、主人はすぐ歸つて来た。

主人は成るだけこつそりと、誰にも知らせずに、其夜すぐ埋葬して了はうと決心した。主人は自身寺へ出かけて行つた。そして無縁の者の埋められるところでも何でも好いから、やすいところへ穴を掘つ



て埋めて呉れと頼んだ。

湯棺もつかはせず、線香も碌々上げず、僧に来て經も讀んでも貰はずに、此夏自分で買つてよく着てゐた浴衣を一枚着せて、そのまゝ棺の中にやゝ硬くなつた足の骨をほつ折るやうにして無理に入れて、形ばかりの白布でそれを巻いて、そして日が暮れてから、主人と主人の懇意の男と、他に人足二人を頼んで、そして夜の道の中を寺へと持つて行つた。

それを店の入口で見えてゐたお玉は、いかにも悲しさうにして手を合せて見送つてゐたが、やがて入つて来て、

『今持つて行つたよ。』

『何を……』

『死んだ人をさ……。ああ薄情なもんかね。人間は？』

『だつて、主人の身になつたつて、金ばかりかゝるんだから、無理はないよ。』

かう其處にゐた板場の男は言つた。『それよりも、若いのに、惜しいことをしたと思ふよ。そんなに急に死ぬなら、俺でももう少し可愛がつてやればよかつた。』

『好かない奴！』

お玉は笑ひながら、奥の手の鳴る一間へと行つた。

寺では、和尚は客があつて酒を飲んでゐるらしく、容易に出て来なかつた。寒い風の吹き頻る中に、四人はほつねんとして待つてゐた。本堂の棺臺の上に置かれた棺が白く闇の中に見えて、主人が持つて来て玄關の入口のところに吊して置いた提灯の蠟燭は風にチラチラと揺いだ。

やがて僧衣をつけて出て来た酒氣のある和尚について、上さんが持つて来て棺の兩側と本尊の前とに立てた三四本の蠟燭、そこで形ばかりの短かい讀經がすむと、人足はばた／＼寄つて来て、棺をそのままかついで、墓地の無縁の隅のところに淺く掘つた穴のところへと運んで行つた。主人の持つた提燈の灯に照されながら……。

主人は穴を覗いて見て、

『水があるな。』

『何うも、此處等は卑濕地だで、しやうがない。何處でもかうだ。三尺も掘ると、もう水だからな。これでも随分かい出したんだぜ、なア。』

かうもう一人の穴掘の男は言つた。

『しやうがねえや……』

黒く光つて溝へてゐる水の中に、棺を踏みつけるやうにして、そのまゝ人足は土を埋めた。

『旦那、提灯をもう少し高くして下さい。』



『よし、よし。』

かう言つて主人は穴の中が見えるやうにしてやつた。

やがて新らしい墓は築き上げられた。

『脆いもんだな。』

『本當だな。』

『可哀さうには可哀さうよ。一昨日まで働いてゐたんだから。』

こんな話をしながら、提灯の影に纏れるやうにして、人達は其處から庫裡の方へと歩いて行くのが見えた。やがて再び暗い寒い西風の夜となつて了つた。

其處には塔婆が一本立てられてあるばかりで、墓標すらもなかつた。それでも翌日の午前には、お玉とお常とお政と三人してお詣りに来て、櫛をさしたり線香を手向けたり手を合はせたりして行つたが、その後は誰もそこに詣でに来るものはなかつた。一度若い車掌見習がやつて来た時には、女達の手向けた櫛も枯れて、落葉がカサコソあたりを散つてゐた。若いAは其處から野の方へ出て来ながら思つた。(Kは何うしたらう？ Kはまだ知らずにゐるのだらうか？) 實際Kはその時分は何處に行つてゐるかわからなかつた。暫く経つてから、女の死をAが報じてやつたが、その返事すらもやつて来なかつた。Kはもうその海岸の停車場にも勤めてゐないらしかつた。

雪は何遍となく来ては、その野添ひの新らしい墓を埋めた。一月は二月になり二月は三月になつた。沼に添つた路には新らしい草が萌え、青々とした麥島の隅の早咲の梅が白く咲くのが見えた。雲雀の高く囀る聲が空にきこえた。

## 十七

西風の吹かない日は、野はもうすっかり春であつた。人達は長い冬の寒さから蘇つたやうにして、沼に添つた道を歩いた。ある日は天神の祭禮だと言つて、晴衣を着た人達が子供を伴れたり何かして、ぞろぞろと野の道を通つて行つた。

一時は足駄でなければ歩けなかつたやうな霜解の泥濘もいつか乾いて、街道には次第に白い埃が立つやうになつた。曇つた日にはもう咲き初めた桃の花が赤く見え、チャンカラチャンカラと機を織る音がいかにもどかに鶏犬の聲に雜つてきかれた。

西風の吹荒れる音に雜つて、凄しく煤烟を野に横折らせて日毎に通つて行つた汽車にも春が来たやうに思はれた。乗客ののんきさうな顔が、いつも車窓の中に重つて揺いて行つた。

汽車の中にも段々いろ／＼と設備が整頓して行つてゐた。工場の職工見たやうな汚れた服を着て、不思議な制帽をかぶつて、煎餅、あんぱん、蜜柑、柿、煙草などを車中で賣つてゐた仲賣の制度もやめに



なつて、此頃では、他の汽車のやうに、きまつた驛々で辨當や茶や煙草を賣るやうになつた。石炭の燻ぶる臭ひのいやに人を刺戟する車室の中の置暖爐も改良されて、スチムに自づから室内が暖まるやうになつた。『暖氣が洩れるゆゑ、この窓を明け放しにしてはいけません。』など、一時は黒い板に白い字で書かれて、六十度以上の室内の暖かさに乗客の顔も赤くのほせるやうな時もあったが、今はさうした冬も過ぎた。都から此方の野にやつて来る人達は、到る處に青々とした麥畠と、それに雜つて咲きすぎてる梅の花と、今を盛りに咲いてる桃の花とを見た。百姓が野に出て不思議な腰附をして麥の緑を踏んでる時も過ぎた。

『今年は、汽車が出来たで、T町の花山は人が出べい。』

汽車でも沿道の名勝は盛に廣告してゐるし、都會の人達にも、春を趁つて、一日かへりの行樂に、妻や子供を伴れて出かけるのが流行るので、沿道の藤の花や、桃の林や、つまらない小さな名勝まで、皆な目を睜るやうに群集の集つて来るのを見た。『今年はT町の花山には、屹度人が出る。臨時汽車位出さなければなくなるかも知れないぞ。』こんなことを汽車の人達は言つた。果してまだ躑躅には早いといふ頃から、汽車を下りて行く人は次第に殖えて行つた。

春は次第に闌になつた。桃、櫻、杏、さうしたものは一時に野を彩つた。T川の流れもどんよりと霞んで、をり／＼通つて行く船の櫓の音が緩かに聞えた。夜は蛙の聲が微かに戀を語り始めた。

この頃、教員のSは寫生道樂から、植物採集に移つて、よく沼やら、野やら川やらにめづらしい花をさがして歩いた。この間の日曜には、同僚のNと一緒に停車場からHまでの間を二里ほど歩いて、凡そ目に留る花といふ花を採集した。

『みつまた、すゞめのゑんどう、からすのゑんどう、のみのふすま、すみれ、つほすみれ、さんしきすみれ、いぬからし、たんぼ、こけりんどう、はこべ、ながしくはこべ、ふき、なづな、けんけ。』さうした花の名が一杯にかれの手帳に書きつけられた。

## 十八

思ひがけない、また今までに會て見たことのない賑やかな色彩の濃やかな繁華が一時にそこに渦を巻いた。

汽車の人達の想像以上に、都會の人達はT町の花山へとやつて來た。どの汽車からも、どの汽車からも、派手な蝙蝠傘や、美しく着飾つた衣裳や、中折の帽子や、銀のカンの把手のついたステッキなどが溢れるやうにぞろ／＼と下りた。

汽車の會社が花の初めに、新聞記者を招待して、こゝまでは汽車、それかれは車で、T町へ伴れて行つて、花火を揚げたり何かして歓迎して、その記事を書いて貰つた影響も決して尠くはなかつた。土手



下の溜りではいつも車夫が足りないで困った。

都會の人達は其處で車を雇ふなり、またはのんきな徒歩を選ぶなりして、土手の上から霞に包まれたT川の岸に下りて、桑畑の新しく芽を出した中をぞろ／＼とRの渡頭へと行つた。誰れの顔にも春の一日の行樂の楽しさとのんきさがあつた。あんなに揃つた美しい同士の睦しい若い夫婦もあるかと思はれるのもあれば、可愛い坊ちゃんに洋服を着せて、そして何苦勞なく旦那さんと並んで歩いて行くものもあつた。かと思ふと、てつきり藝者と誰の眼にも見える美しい女に大きな丸髻を結はせて、わるくふざけ散らかしながら土手に上つて行くものなどもあつた。

かれ等の眼には、新しく出来た終端驛らしい町のさまが、そこらにゐる酌婦達が、いかにも田舎々々した料理屋などが映つた。『好いわねえ、田舎は？ 氣がせいせいするわねえ。何うでせう。蛙が鳴いてゐる。』などと心から楽しさうに歩きながら話した。

此處の土手下に車がなくなるとも、Rの渡しをわたると、向うに車も數臺来て居れば、乗合馬車も二臺も三臺も来てゐて、さういふ都會の人達を二里ほどあるT町の花山へと伴れて行つた。途中にはお伽話で誰も知らないものない分福茶釜のある大きな寺などがあつて、其方の方へも、松原の中を傳つたり、田圃に添つた路を辿つたりして、ぞろ／＼と都會の人達は行つた。

汽車がないのですつかり衰へかけてゐたT町は、川向うまで汽車が出来たために、俄かに新たに呼吸

をふき返した。誰も彼も皆な此方へと向つてやつて來た。『川向うまで行きや儲かる仕事がある。』かう言つて靡くやうにして出かけて來た。T町とA町、またにH町とT町、その間を一日一回通つてゐた馬車屋は、馬車の車臺が足りないので、壞れて使へなくなつたのを修繕してそれに馬をつけたり、またわざわざ遠くのO町あたりから一臺二臺此方に来て貰つたりした。

『えらいこつちや……』

誰も彼も目を睜つた。

『汽車つて言ふものは、こんなに好い便利なもんかな。』その癖、鐵橋が出来て、汽車がT町からA町の方まで開通すると、自分達の仕事なくなるのを暗に心配してゐる車夫や馬車の別當などが言つた。驛長も流石に驚いたやうに、『今日は千二三百人、もつと以上の乗降客があつた。随分やつて來たもんだな。矢張、都會の人達には田舎ののんきなところがめづらしいんだな。それに、今日は好い日曜日だつたから。』

『これは、もう少し設備をよくして、廣告を盛にすれば、もつとやつて來ますな……。今年はまだ遅いが、來年は早くから設備をして置くんですな。』

『料理店なんかも、もつとなくつては足りない位だね。』

『本當でさ……。これでは、鐵橋が出来て、汽車が開通しても、此處は屹度賑やかな町にならなすぜ。』



『面白いもんだな。』

かう言つて驛長は笑つた。

さうした大勢の都會の人達は、麗らかな晩春の日影に浴しながら、ぶらりふくと或は松原の中の路、或は麥島の緑の田圃、或は丘から丘の上へ越して行くやうなところ、でなければ街道を眞直に車で、古びた衰へた昔の城下町へと行き、半ば草藪に埋れた城址、眞菰や蘆荻の生えた沼、深く入込んだやうなところから、平生見たこともないやうな小さな田舟に乗つて、矢張小さな權で巧に舟を行る船頭のさまなどに興がりながら、錆びた沼を渡つて、その向うの丘の上にある躑躅の亂れ開いた丘へと行くのであつた。交通の便のなかつたために、全く文化に後れたそのあたりの純樸な珍奇な生活や、風俗や、または田舎の靜かな峠道は、かれ等を樂しませるに十分であつた。

そしてかれ等のあるものは、沼に臨んだ料理屋で川魚料理を肴に酒に酔ひ、ある者は躑躅の咲いた芝草地で鬼事などをし、またある者は、幾人もゐないT町の藝妓を舟に乗せて、沼の中で三味線を弾かせたりなどして、楽しく一日遊んで、そしてもとの川沿ひのKMの停車場まで戻つて來た。かれ等は、誰も彼も争ふやうにして、めづらしい蓴菜の瓶詰を、または昔からその町の名産であつた麥落雁を買つてぶら下けて歸つて來た。

従つて夕暮近い停車場の雑沓は驚かるゝばかりであつた。小さな建物はさうした都會の歸り客で一杯に滿ちた。改札口には群集が押し合ひへし合ひ、派出所の巡查がいくら制しても制し切れないほどに閑の聲を擧げた。そして改札を始めるのを待ちかねるやうにして、人々は大騒ぎをしてブラットホームに出て行つた。若い夫婦づれや子供づれなどはとても乗り込むことは出来なかつた。『これぢやとても駄目だ……。もう一汽車延ませう。九時にもまだ一度あるんですから。』などと言つて、さういふ人達は前のM屋やY屋へ行つた。

さうした驛前の料理屋でも、皆なてんでこ舞ひをしてゐた。お玉や、お常や、お政なども今日は酌婦として白粉を塗つたり何かしてはゐられなかつた。かれ等は皆な襷を外す暇もないやうにして働いた。板場では、澤山入れて置いた鯉が足りないもので、沼の方へ二度も三度も取りにやつてもまだ足りず、今では爲方がないから、客の註文を斷るといふ始末であつた。M屋の裏の田圃に面した室などには、客が一杯に滿された。

やがて最後の九時十分の汽車は此處を出て行つた。

そのあとはやゝ靜かになつた。丁度月のおほろに霞んで出てゐるやうな夜で、暖かい夜風が靜かに顔を撫でるやうに吹いた。丁度大風の吹いたあとか何かのやうで、女中達も、男衆も、または軒に並んでかゝやいてゐる灯も、ほつと呼吸をついたやうに見えた。そここゝに白く紙屑が散らばつてゐた。

蛙の聲は裏田圃から靜かに聞えて來た。



種々な噂が傳つた。この一期だけでも儲けたものは非常に多いといふことであつた。車夫はにこにこ顔で、酔つて、車を曳いて蹠蹠として家へ歸つて行つた。馬車の馭者や別當は、腹掛けの井の中にチャラチャラ金を満たして、町の場末の女のゐるところに集つて行つた。ことに、蓴菜を始めて瓶詰にして賣り出した男は、一升十五錢のものを七八十錢に賣ることが出來て、しかも無數に賣ることが出來て、十日ほどの間に、お釜を起すほどの大儲をやつたといふ評判であつた。

分福茶釜のある寺では、とてもそんなに大勢見に来るものはないと思つて、觀覽料も別にきめずに、普通思召しといふことにして置いたが、餘りにぞろ／＼人がやつて來るので、五錢にし、十錢にし、終には十五錢にし、俄かに觀覽券までも印刷した。その和尚は思ひもかけない寶をその古い釜に發見したといふやうにして、にこ／＼して喜んでゐるといふ話なども停車場まで傳つて來た。

麥落雁を賣る本店でも、維新前にそれをそのつれ合が始めて製造したといふ七十ばかりになる老婆は、『運つて言ふものはわからんもんだ。賣れないものでも、いつ賣れるやうになるかわからない。だから、正直眞當にしてゐることが何よりだ。値打のないものを拵へて置いては、賣れたと言つても、その賣れたといふことが怖いことで、わるけれど、もうお客さまは買はねえから。』などと好い機嫌で息子や嫁などに説法した。

M屋はT町の方に本店があり、躑躅のある沼添ひの丘の上にも支店が出してあるので、その繁昌は一通りではなかつたが、停車場前の収入も大したもので、これでは來年までには、もう一棟建て増しをして、一方旅館としての設備をしなければならぬなどと主人は言つてゐた。主人の腹では、此方の采配をお常に振らせて、行く行くは、隣のY屋のやうな妾宅にしやうと思つてゐるやうな口吻を見せた。

『KMへ。』

『KMの停車場へ。』

かう誰も彼も思つてゐるらしかつた。初めの一年は、行末は町になるだらうと言つても、まだ二の足を踏んでゐるものが多かつたが、今ではそんなことを言つてゐるのは愚だ。またさう思つたやうにならなくとも、今の中儲けて置くのが勝だといふ風にして、人々が段々こゝに集つて來た。其處にも此處にも新しい家が建てられた。土手下についたところには、小さな二間位の長屋が何軒か出來て、彼方此方から集つて來てゐる車夫達は、皆な村から家財道具を運んで移轉して來た。女房子供などを伴れて來た。

朝など土手の上から眺めると、あんな方にまで家屋になつたかと思はれるほどその區域はひろけられて、出來た時には、停車場が隅にあつたのが、今ではそれが人家で取巻かれるやうな形になつて行つて



るた。低い土手下の一廓には、炊烟がいつも賑かに靡き渡つた。

夏の中頃には、M屋の旅館が完成して、その新しい瀟洒な欄干を取廻した二階屋は遠くから見えた。

## 二十

此頃、T町の益田の美しい妻の姿がをりく其處に見えた。時には獨りで来て、土手の上に行つて長い間立つてゐることがあつたり、土手から煉瓦の竈の工場の方へ下りて來ることがあつたり、また時には、益田の肥つた旦那と東京から汽車を下りて、並んだ姿をくつきりと土手の上に見せて、何か頻りに話してゐることなどもあつた。ある時は、肥つた、東京でも聞えた茶屋の女將であるやうな四十六七の女と来て、矢張、土手の上に行つて、あたりを眺めて、そして歸りにM屋に寄つて午飯を食つた。

今では益田のその妻の美しい姿も、人の眼にはめづらしくはなくなつたが、また驛長や助役と話をしたり、M屋の女中達とも懇意になつたりしたが、しかし度々やつて來て土手の上に登つてあたりを眺めたり何かしてゐるといふことが、あたりの人々の好奇心を惹いた。

段々その話は傳つて行つた。

一番先に、村の人達から、その妻が度々そこにやつて來る理由が驛長の耳に入つた。それはその妻が、自分が會てさうした社會にゐたことから思ひ附いて、其處に、そのT川の一目に見わたされる土手の附

近に、一方かの女の妾宅として、また一方營利上ではあるが、損さへしなければ好い、また客種もちやんと渡りのついたものでなければ需めに應じないといふ程度で、靜かに男女の世離れて遊ぶ席亭見たいなものを拵へたいといふのであつた。本妻は死んでも、益田は流石にその女をそのまゝ家には入れることはしなかつた。女もまた女で、さうした面倒の多い舊家に入つて行つて、うるさい世間の情實の渦の中に加はりたくなかつた。で、東京では東京で一軒あのみゝにして置いてもいいから、此の近所に、お前も退屈しないやうな別宅を一軒拵へてやらうと益田は言つた。(それにはKMの停車場あたりが好い。あそこなら、汽車で二時間と少しで東京にも行けるし、T町の本宅とも多少離れてゐて、煩くないし、)といふことになつて、それから引續いて、(それにしては、一人ほつねんとあそこにあるのも退屈だ…)。決して損はしない。やりやうさへよければ、將來大に發展して、貴方の世話にもならず、私一人位は立流にやつて行けるやうになるかもしれない。)と言ふところまで漕ぎ附けて、そして一度はかねて懇意にしてゐる郊外のつれ込宿の女將をも伴れて來て見て貰つた。と、その女將は、すっかり惚れ込んで、『好いどころぢやない。立派にやつて行ける……。將來にも見込がある。かうした靜かな處に、さういふものを拵へれば、箱根、鹽原、伊香保にももうお客が倦きてゐるから、屹度好いに相違ない。損なんかするもんかね、お前さん……。お前さんがやつて見て、いけなければ、その時は私が引受けてやつても好い……。好いところだね。すっかり私や氣に入つちやつた。』かう言つて秩父の長瀨の例などを引



いて、『あそこを御覽な、始めはやり方が下手で、なまなか、田舎の旦那衆を相手にしたから失敗したけれども、田端の人が引受けてやつてから、すっかり好くなつたつて言ふぢやないか。かういふところでは、思ひ切つて、東京の好いお客を相手にするやうにしなけれや駄目だよ。』かう女將は言つた。で、女はすっかり乗氣になつて、益田の旦那を勧めて、川の見える土地を五六百坪買ふための運動を始めた。

ところが土手にはさうしたものをつくるのを許可されなかつた。土手下ならいくらも好いところがあつたが、また安くて適當なところが容易に手に入るが、何うもそれでは面白くなかつた。それで、何うかして、そこから五六町下流の土手のすぐ向う下になつてゐて、しかも地盤が高く、松原などがあつて、洪水の時にもその虞れのない、村有になつてゐるところを一時借りたいといふ話になつて行つた。村でも、何うせ、唯置くのだからと言ふので、割合に高い坪錢で、愈々益田に貸すといふ話のある時分、驛長はそれを何處からか聞いて來た。

『それも好いだらう。つまりは此處の發展の一つになる譯だから……。今に、美しい東京の奴がやつて來る譯だな……。』驛長は面白さうにかう笑つて助役に話した。

『成ほどあそこなら好い……。少し離れてゐたつてさう不便ぢやない……。これはやりやうによつては、本當に旨く行くよ。あの女、旨く考へたな。』

助役も笑ひながら言つた。

そこは土手に上るとすぐ見えた。成ほど好い處であつた。土手と同じ位の高さで、松の一ところ靡いてゐる形が、ちよつと海岸の磯を思はせた。坪數にして七八百坪あるが、これに金さへかければ、いかやうにも立派なつれ込宿が出來た。ある日は女は旦那と他に大工の棟梁らしい男と三人で、嬉しさうな顔をして、その松原の中をあちこちと歩いてゐるのを土手を通る人達は見かけた。『金がある人はえらいことをやるな。』とか、または、『益田の旦那、餘程あの女に參つて御座ると見えるな。それや、益田位の身代なら、あそこに家くらゐ、何んな立派に建てやうが、びくともしまいけども……。』とか何とか評判されながらも、着々それは事實になつて行つて、田舎では駄目だと言ふので、わざわざ東京から大工の棟梁が弟子共を五人も六人もつれて來て、最初に建築小屋見たいなものを建て、それに寢とまりしながら、汽車で運んで來た檜や樺のりうとした木材にせつせと鉋をかけたたり、臺木に穴を明けたりした。教員のSの日記にはこんなことが書かれた。

——日、晴。

我等の好散步地とした川岸の松原にも今は家屋の立てらるゝことゝなりて、今日行きて見し時には、大工達大勢集りて棟上をなし居たり。立派なる家建てらるゝと覺し。賑やかになるは好けれど、われ等のためには餘りに好ましくもあらず。



われ等兒童のためにも、そこは好き運動場なりしに。眺めもよく、風も涼しく、秋は草花など多きところなりしに……。よくそこより川岸に下り立ちて、夏の日など泳ぎたりしを。また、冬はそこより見やる山の雪世の常ならず美しかりしを。心なの村の役場の人達よ。かゝる好きところを僅かなる金貪りて貸し與へんとは――

聞くところによれば、T M町のとかいふ金持の所業のよし。その愛する阿嬌のために築く臺とかや。われ等の如くその月々の生活にすら不十分なるもの多きを。世はさまざまなるかな。眞にさまざまなるかな――

かう言ふ風に見るものもあれば、今に大宮以上の村の公園が出来るなどと喜んでゐるものもあつた。松原の中には、三棟ほどの家屋が出来らしく、夏の末には瀟洒な二階造の方が早くも出来て、それが繪のやうに美しい松原の中から見えた。大工の使ふ鉋や鋸の音は絶えずそこからきこえて来た。

## 二十一

このT川の畔に再び春がやつて来る頃には、その松原の中の家屋はもうすっかり出来上つて、枕流亭といふ廣告札は、停車場を下りると、迷ふことなく、直ちにそこに人々を導いて行くやうに、それからそれへと路の角々に立てられてあつた。それに、そこに行く路を近く且つ容易ならしめるためには、煉

瓦の工場の後の土地が少しばかり買はれて、それからずつと土手に上つて行くやうに路がつくられて、一面に綺麗な砂利が敷かれた。

## 『枕流亭へ！』

かう言ふ客があると、車夫は五六町のところを十五銭賃金を取つて曳いて行つた。

一方に、田舎の酌婦達の淫らな生活があると共に、一方には、次第に都會のさうした生活が入つて来るのを誰も目を睜るやうにして見た。開業式の日は、役者や藝者や新聞記者などが大勢やつて来て、それは騒ぎであつたといふことであつた。

その松原の中の三棟の建物は、美を盡し善を盡したといふまでに到らなかつたけれど、檜だの、梅だの、ヒバだのが處々につかつてあつて、一番大きい二階建の欄干から眺めると、川が唯一目に見わたされて、靜かに岸に偏つて流るゝ水の音が終夜枕の下にきこえた。一棟はそれからやゝ離れて、松の緑の繁みの中に半ば埋められるやうになつてゐるが、それは六疊と四疊半の二間で、庇も根太も低く、しやれた船板などが使つてあつて、いかにも靜かに人知れない歡樂に耽るに都合の好いやうに出来てゐた。四目垣を取廻した中には草花などが繪のやうに栽ゑられて美しく咲いた。

もう一棟は二階建の家屋とはほ續いてゐるやうになつてゐるが、それは平家である割に一番數寄を盡くしてつくられてあつて、そこに、益田はその女のために新しい道具を澤山に持つて来て据ゑた。長火鉢、



簞笥、机、大きな鏡臺、ことに廊下にかゝつてゐる細長い鏡には、その妾の婀娜な姿がいつもよく映つた。二階の方にも、押入には、贅澤に繪羽二重などを使った絹布の寢道具が三組も四組も入つてゐた。

料理番と女中とは、その女將が萬事飲込んで世話をして呉れた。『さうだ。その方が却つて間違ひがなくつて好い。』と此方で賛成したので、二人はまだ公然夫婦にはなつてゐないが、誰も皆その仲を承認してゐるやうな人達がやつて來た。女はお時と呼ばれた。他に色の白いお蔦といふのが雇はれた。

益田の旦那は此頃は新築の家屋が珍らしいので、大抵は此方に来てゐた。T町の財産家連を呼んで御馳走をした時には、町の藝者の他に東京からも十人近くの美しい姿がやつて來た。誰も益田の全盛に目を睨らないものはなかつた。『死んだ上さんがるちや、そんな真似は出來ねんだが、惜しいことをしたなア。あれぢやいくらあつたつて、益田の身代はさゝふさだんべ。矢張、あの元の上さんは豪らかつただなア。』こんなことを慨嘆するやうに評判するものもあつた。

車夫達はまた車夫達で、『豪氣なもんだな。金せいあれや、何でも出來るんだな。あそこへ行くと、丸で極樂に行つたやうな氣がするぜや。』などと云つた。

丁度、これから賑やかにならうといふ春なので、梅を見に、または春の野を見に近所までやつて來た都會の人達は、さうした川に臨んだ旗亭が出來たのを聞いて、好奇にちよいちよい其處にやつて來た。毎日三組や四組の客は汽車から下りて、その川岸の松原の中に行つた。

## 二二二

向う岸の昔の船宿、外輪の小蒸汽が毎日夕方に眠むさうな汽笛を鳴らして溯洄して來る時分に榮えた土手の船宿、その船宿にその頃使つて不用になつて、何にも用途がないので、爲方なしに船の水車に使つてゐるベンキなどのすつかり剥けた古い小さな汽船が一隻あつた。今年の晩春の花の時に、何か一儲けしやうと思つていろいろ考へ廻らしてゐた船宿の主人は、ある時そこに水車になつて動いてゐる汽船を見て礎と膝を打つた。『さうだ、これで一儲け出來る。』かう思つて、かれは早速そこへ下りて行つて見た。もう古く、ひどくなつてはゐるけれど、それでも、これであちこちを打付け、破損したところを直し、近頃流行の石油を使用するエンジンを一つ買つて來て据ゑ付けさへすれば、それで十分停車場の土手の岸から此方の岸まで眞直に溯洄させること位は何でもなかつた。かれは早速大工を呼んでその仕事に取懸らせた。

水車から離して、それを川岸に引張つて來て繋いで、トンカントンカンやつてゐるさまが晴れた日の川の上流にそれとさやかに捺すやうに見えた。

『一錢蒸汽が出來るんだとよ。』

『船宿の旦那、旨いことを考へたな。』



こんな言葉がそここゝで聞かれた。

この思ひ立は見事に圖星に中つた。T町の躑躅を見に来る都會の人達は、去年で評判になつてゐるの  
で、まだ花には早い頃から、ぞろ／＼と早くもやつて来た。停車場から土手へかけては、再び例の色彩  
の濃やかな雑沓が始まつた。

始めて試運轉をした時には、その汽船に紅白の旗だの、酸漿提灯だのを一面に飾つて、それに船宿の  
主人が乗つて、そしてそこから停車場の岸まで二十町ほどあるところを勇ましくやつて来た。兩岸の人  
人はさびしい川が再び昔の賑やかな色彩をつけて来るのをめづらしさうにして見た。

Rの渡頭の人達や、土手下の溜りの車夫や、乗合馬車の持主などは、この距離の短縮に少なからぬ打  
撃を感じて、一時その事業に對する反對運動を試みたが、しかし、さうした便利のものをさし留めるこ  
とは警察でも出来なかつた。いろ／＼すつた揉んだの後、車夫達や乗合馬車の多くは、止むなくその向  
う岸のランチの着くところにその溜りを持つて行くことにした。

河岸には紅白の旗が建てられ、土手から停車場までの間には、一錢蒸汽の開業——花山への近路とい  
ふ圈點つきの大きな赤インキで書かれたピラが處々に張られて、あたりは一層賑やかな春の雜選の色彩  
を添へた。『や、こんなところに、一錢蒸汽が出来た。拔目がねえな。』こんなことを言つて、都會の人達  
は、土手から下りてその旗の立つてゐるところへと行つた。

派手な蝙蝠傘の日に美しく光る春は再び来た。田圃の麥島の中に男女づれの群の衣裳の隠見する春、  
ダイヤや金の指環やステッキや中折帽の纏れ合ふやうな春、分福茶釜の寺の和尚のこゝろする春、お  
玉やお常やお政のてんでこ舞ひをする春、沼の入込んだ蘆荻の間に小さな舟の往來する春、蓴菜の土産  
の瓶を今年も誰も彼も拵へて、其處にも此處にも並べて置くやうな春は来た。

そのランチは隼のやうに此方の岸から向うの岸へと溯洄したが、一隻ではとても汽車毎の乗客を乗せ  
切ることは出来なかつた。で止むを得ず、却つて歩く方が好いと言つて、大廻りにRの渡しの方へ土手  
の上を通つて行く人達も多かつた。野には靜かに蒲公英の黃い花などが咲いた。

## 二十三

『いよく出来るかな、鐵橋が——』

かうした噂がそろ／＼人の口の上つたのは、その晩春の躑躅の賑ひも濟んで、これからあたりは田植  
と麥刈に忙殺されやうとする頃であつたが、その噂は評判されたり打消されたりして、夏になつても、  
捗々しい計畫はまだ打立てられなかつた。兎に角、何んなに經濟にしても二十萬圓はかゝる。會社にし  
ては何うしてもそれをつくらなければならぬのはわかり切つてゐるが、それを一刻も早く完成して、  
野州の機業地に連絡させなければ、人形をつくつて魂を入れないやうなものであるが、しかし容易にそ



の資本が出来ないのでぐづぐづしてゐた。ところが、八月に入つて、いよくその計畫は實行されるといふことになつて、それに使用するための鐵材や木材が次第にその停車場へと運ばれて來た。

『今度はいよく取りかゝるらしい……』

かう到る處にその噂は傳はつた。

九月に入ると、それはいよく事實になつて、停車場附近は次第にその雜選を加へて行つた。川の工事の方の請負らしい男、それに伴れられて來た大勢の工夫、そのはつびにはいづれも野澤組といふ字が書かれて、土手から煉瓦の工場近くにかけて、バラツクのやうな掘立小屋も何軒ともなく建てれば、鐵材の方の請負は、それとは反對に、停車場から沼の方へかけて、清水組事務所といふ大きな招牌をかけた板塀で取廻した家を拵へて、段々其處には技師らしい鬚の生えた肥つた紳士だの、背廣服をつけてちよこちよこことあたりを馳け廻る技手だのが出入した。

トロコは縦横にその構内に引かれて、汽車の貨車が運搬して來た材料は、木材は木材、鐵材は鐵材といふ風に、てんでにその受持の方へと運ばれて行つた。あたりの光景は丸で一變した。曾ては、停車場が野の中にほつんとしてゐた時代、つづいては停車場が人家に圍まれるやうになつた時代、M屋の二階建の新築の旅館が際立つてあたりの人の目についた時代、その時代から比べると、また一層多くの人家が出來、人が他郷から大勢集つて來て、軒の低い間に合せの家々はずつと此方の方まで續いた。驛長の社

宅は今はその等の家屋のずつと奥の奥になつて了つた。

殊に、一層目に立つて賑やかになつたのは、その驛前の料理屋、だるま屋だけでは足りないの、沼の方へも、土手下の方へも、それと同じやうな小さな飲屋が澤山に出來て、卑しい、大きな聲を張上げる、またいやに白くべたぐと白粉を顔中に塗り廻した女が、其處此處の町から狩催されて集つて來て、澤山賃金の入る工夫達を相手にして騒ぎ散らした。お玉やお常やお政などは今は却つてその渦の中に埋められて、其處にゐるかわからないかわからないやうな形になつて了つた。

『これでも酌婦が違ふんですからね。工夫さん達を相手にする酌婦は別にいくらもあるぢやありませんか。』

お玉は何うかすると、こんなことを言つて、いやにしつこい客に向つて、痰阿を切つたりした。

それから(工夫さん達の酌婦)と言ふ言葉が、かれ等の間に多く使はれるやうになつた。『えゝえゝも賑かですけども、賑やかなのも好いけども……かう亂暴になつて來ちや困るわね。私達まで工夫の酌婦と一緒にするんだもの、』などと元からゐた酌婦達は言つた。

トンカントンカンする音は喧しい位に彼方此方にきこえた。時には大きな橋の臺にする鐵材などが來て、それを普通では運び切れずに、人足が二三十人も寄つてたかつて、キリンをかけて、曳々聲を出して、一日か、つて二三十間も運べないやうなこともあれば、停車場から鐵材の工場に持つて來るトロコ



が壊れて、それがさかさに倒れかけて、傍で働いてゐる土工が大怪我をしたことなどもあつた。始めはそれほどでなかつた工事も、その年の冬には、もうかなり盛になつて、それからそれへと續々人が入り込んで来た。

川の方の工事も中々困難であるらしく、土手へ上つて見ると、土手の向う側の下にもブラックが一行に並んで連つて、測量した川のところ／＼に、大きな棒杭を何本となく打込んだり、そこに積み上げる爲めの煉瓦を女の土工がせつせと運んで働いてゐるさまが手に取るやうに見えた。川底は測量した豫定よりも柔かく、棒杭を打込んでも打込んでも十分でないので、請負つたものは非常に困つてゐるといふ噂などもあたりに傳つた。寒い朝は、土手下の河岸にと／＼に焚火が燃されて、霜が重ねられた木材や煉瓦や鋸屑の上に眞白に置いた。

契約が二年かゝるといふことであるが、半年経つても、まだいくらも手がつけられてゐないのを人々は見た。

## 二十四

若い車掌見習のAは、ある朝、ひとりで土手にのほつて見た。それは矢張寒い霜の白い朝であつた。西風はなかつたけれども、山の雪はさら／＼と美しく輝いて、川の鑄鐵納戸の色をなして、小波をたた

へて流れてゐるさまが繪のやうに眺められた。

下では、ところ／＼に焚火がしてあつて、そこに土工や大工が集つてゐるのが黒く小さく見える。橋の臺が二つ完成して、今は三つ目のところに木を組合せたものが構へられてあるが、そこではもう朝の仕事にかゝつてゐるらしく、船で材料を運んでゐるのや、組立つた木に取りついて働いてゐるのがそれと明かに指さされた。

『冬は、川の中の仕事は寒いだらうな。』

こんなことを思つてAが見てゐると、突然、何うした拍子か、組合せた木が折れたらしく、それにぐつついて仕事をしてゐた土工の三四人が、ばらばらと一緒に川につゞいて落ちたのをかれは目にした。

『あ……』と思はず聲を立て、土手を走り下つた。

かればかりではなかつた。その近所に焚火をしてゐた土工や大工の連中も、そのけたまゝしい音に驚かされて、皆そつちへと走つて行つた。

かれが川の岸に行つた時には、もうそこに大勢人は集つてゐたが、川の中に落ちた大工の一人二人は逸早く早い瀬から遁れて、濡れ鼠になつて木に縋つてゐるのなどが見えた。其處にあつた舟の頻りに漕ぎ廻されてゐるのも見えた。

『一人わかんねえだよ……』



『誰だ、誰だ？』

『作だ、作だ、作がわかんねえだよ。』

『それや大變だ。』

かうした動搖が急にあたりに起つた。

『作の鼻、そこらにゐたつけが、何うした？ 何うした？』

『作の鼻？』

と誰かが呼ぶと、向うの方で、そんなことは少しも知らずにあつたらしい束ね髪の筒袖の上さんは急いで走つて來た。

『何うした？ 何うした？』

『作がゐねえとよ。わからねえだよ。』

『えゝ？ 何うしたんだ？』

『今、木が倒れて、川の中へ落つこつたんだが、まだ上らねえだよ。』

『何うすべいな。俺ら……。援けて呉んろよ。俺が衆を……。』

かう泣きさうになつて鼻は唸鳴つた。

落ちた木の附近を、一隻の舟は頻りに捜し廻してゐるらしかつた。他の四人は何うやら救はれたが、

作だけは早い瀬に巻き込まれたか、何うしても附近にその姿は見えなかつた。

『何うすべ、俺は！』

かう言つてオィオィ鼻は泣いた。

二十五

その翌年、矢張大勢T町の躑躅を見に來る都會の人達の中に、停車場などのまだ出來ない以前に、あの沼のほとりにさびしく半年を過した文學者夫婦が雜つてゐた。

かれ等は今はあの時分のやうな不遇な貧しい人達ではなかつた。二三年前に發表したある作物は、文壇に夥しい反響を來して、今ではその文學者は日本でもその名を知られる小説家の一人になつてゐた。依然として二人の間には、未だに子供はなかつたけれども、また細君もいくらか年は取つてゐたけれども、それでもまだその姿は美しく、髪なども見事に、殊に派手なバラソルを持つて二人睦しさに歩いてゐるさまは、十分に人の目を惹いた。細君は金の彫刻をした指環を二つまではめてゐた。

停車場が出來たり、賑かになつたりしたといふことはかねてきいて知つてゐたが、しかもかれ等の眼にはこの繁華が、この發展が、この雜選が、いかにめづらしく且つ不思議に驚かるゝばかりに映つたであらうか。沼が見え出した頃から、顔を車窓から離さなかつた細君は、



『まア、御覽なさいよ。』

かう言つて、驚いて夫に指し示した。

『ほ、變つた！ これは！』

かうその文學者も言つた。

誰がいつこゝにかうした雜選が渦を卷かうと想像したであらうか。また誰がいつかうした繁華をこの草の野に發見すると想像したであらうか。二人は汽車を下りるまであたりから眼を離さうともしなかつた。

汽車から下りて、並んで歩きながらも、

『これは驚いた！』

『本當ですnee……。もとの様子なんかちつともなくなつて了つたではありませんか。』

『本當だ！』

あたりを振返つて見るやうにして『この路かしら？ よく二人して、歩いて土手に上つて行つたのは？』

さうね、さうだらうと思ふんですけれどもね！』

細君もあたりを見廻して、『お寺があそこだから、もつと向うになつてゐたかも知れませぬね。』

『兎に角これは驚いた！』

かれ等の眼には、さびしい野の代りに、その上に一直線に見えてゐた土手の代りに、賑やかな町の通りが、大きな旅館が、汽車から下りた客を一齊に黄い聲を立て、呼び込まうとする酌婦が、はつびを着た工夫の群が、または煩さく川岸の小蒸汽に行かない前に車を勧めやうとする車夫が映るのであつた。かれ等は唯きよときよとしたやうにして土手へ登つて行つた。

川は依然として元のまゝに靜かに流れてゐるけれども、しかし、その淋しさは、原始の状態に似た姿は、もうそこに發見することは出来なかつた。前年の成功に味を嘗めた船宿の亭主は、あと二隻その石油の小蒸氣を殖して運轉させてゐるので、その塗立の新しいペンキは、かれ等に河港らしい感じをすら與へた。

『川まで賑かになつた。』

『本當ですnee。』

かう言つたが、細君は下流の方へ眼をやつて、『鐵橋も出来るのね。』

『さうだね。』

鐵橋の土臺は既に四番目まで出來て、此方の岸に近いところには赤い煉瓦が半ばほど積まれてあつた。河岸から河中にかけて、土工や大工達の頻りに仕事に携はつてゐるのが繪のやうに見えた。河の中の足



場からは、棒杭を打込む地形の懸壁が夥しく川に響き渡つてきこえてゐた。

『歸りに、もつとよく見て行かうね。』

『さうませうね。』

かう言つて二人は大勢の人達と共に、紅白の旗の翻つてゐる河岸のところに行つて、そこに來てゐる新しいペンキ塗の方の石油の小蒸汽に乗つた。

かれ等が分福茶釜やT町の躑躅を見て、その沼の畔のM屋の支店で、尊菜や鯉のあらひを肴に午飯をすまして、再びこの停車場附近にその姿をあらはしたのは、午後二時頃であつた。三時十分發の上りまで一時間と少しある間を、かれ等はそこをぶらぶらと歩いて見やうとするのであつた。『枕流亭』の廣告札の立つてゐるところに來た時には、『ほ、こんなものまで出來た。えらい發展だな。こんなところまで伴れ込んで來るものがあるのかな。』かう驚くやうにして小説家は言つた。煉瓦の工場なども、かれ等には新しいものとして眺められた。

『蒲公英だの、けんけだの、澤山に咲いてたのは、この先のところあたりでせうね。そらそこに川がある。よく、二人して飛んで渡つた川ぢやない?』

かれは思ひ出したやうにして笑つて、『丁度そこいらだね。』

『まア、あんなことを!』

細君も大きく笑つて、『さうね、丁度あそこいらね。……あの時分は随分のんきだつたのね。』

『古戦場をかういふところに回顧するといふのは面白いな。』

かう言つてかれもその頃を思ひ出すやうにした。

かれ等は停車場の前を通つて、清水組事務所の前から、工夫達が入るやうになつてから出來た所謂『工夫達の酌婦』のゐる混雑したところを通つて、かれ等のよく散歩したT街道の方まで行つて見た。その混雑と渦を卷いた新開町を通る時には、小説家の頭には、ハウプトマンのシレジャを舞臺にしたドラマなどが思ひ出されて來てゐた。

沼の見えるあたりまで行つて、種々とその時分のことを話の種にしたかれ等は、

『それでも沼は變りませんね。』

『さうだね、こゝは昔のまゝだ。』

剖葦はまだ鳴き初めなかつたけれども、ツンツン芽を出した藺の新芽や、若い緑の氣持よく揃つてゐる蘆荻や、藻や水草の叢生した沼の上に浮んだ小さな舟や、沼の向うに平らに連つてゐるやうな黄く色の附いた丸味を持つた麥島や、潤く打渡された平野の遠い地平線などか、かれ等を樂しませた。かれ等の半年滞在してゐた藁葺の家屋には、午後の日影が朗らかにさし渡つてゐた。

『あそこいらに、何んな小さいんでも好いから、書きに來る別荘を一軒つくと好いね。』



『さうね。』

『停車場がすぐで、東京まで、二時間半で行けるから、便利だね。』

『拵へると好いわ。』

『でも、また、いざ拵へるとなると、厄介だよ。村の人達への交渉だの、留守にしておく間に頼む留守番だの……。それに我々はまだ田舎に別荘を持つほど老耄れちやるられないよ。もつと眞剣に働かなければならないんだから……』

『それもさうね。』

『でも、今に拵へるさ！』

こんな話をしながら、かれ等はそこから引返して来た。寺の方へも行つて見たいとは思つたけれど、汽車の時間も氣になるので、またこの次ぎになどと言つて引返して来て、停車場前の休憩店にかれ等は入つて行つた。

花見歸りの客は既にそこらに澤山に集つて來てゐた。此頃では、この驛前の店にも、名物の蓴菜の罐詰や、麥落雁などを置くやうになつて、人々は皆なそこに寄つて買つた。かれ等夫婦も蓴菜の罐を一つ買つた。やがて汽車の時間は來た。改札口の雜選はまた始まつた。

## 二十六

有名な歌舞伎の老役者を父親に持つた、自分も若手の名題では評判が好く、かなり社會にその名を知られたMは、柳橋のS屋の抱妓に二世を契つた歌子といふのがあつて、その旦那の目を忍んでは嬉曳しながら、いつか夫婦になることを互ひに將來に約束してゐたが、旅に出ては、その戀ひしさが忘れ難く、殊に、今度出て來るその一月前には、その事情がすつかり旦那の方に暴露したために、歌子は何うしてもこれを機會に旦那に暇を呉れと言ひ出し、旦那は意地で何うしても暇はやらぬと言ひ募り、お座敷にも出ることも出來ず、中に入つたS屋の姐さんが非常に困つて、一時向島のある人の寮見たいなところに、半ば病人になつたやうにして歌子は寝たり起きたりしてゐたが、——それでもMの東京を立つて來る時には、その粹な姐さんの情で、その寮で女に逢つて別れて來たが、いろ／＼なことが心配の種となつて、寝れば歌子の夢、覺れば歌子の幻影といふ風に、片時も忘るゝ暇とてはなく、ところ／＼を打つて廻る芝居の舞臺も多くは上の空に、足も土につかぬやうにして日を送つて來たが、名古屋市では舞臺の都合で、ゆくりなく明日一日は體が空くといふことになり、明後日の夕方の幕明の時間までに歸つて來てゐるさへすれば好いと言ふので、Mは急に何の彼のと用事の出來た風に粧ひ、一座した父親の老役者の手前を繕ひ、その夜の一時の急行で、心も魂も飛ぶやうにして東京に歸つて來て、停車場前で寮の方



へ電話をかけて聞くと、歌子は二三日前から田舎に行つてゐるといふこと、それですつかり失望してつたが、それに寮の電話に出た女中が、何うしてもその歌子の行つたといふ田舎を教へて呉れないので、これはてつきり旦那と一緒に避暑旅行、あんなことを言つて心の節操を見せてゐても、それは自分のそこにある間だけのこと、旅に出て留守ときまれば、さう變るのが女の心と思ふと、強い嫉妬は燃えるやうに起つて、ゐても立つてもらられないやうになつた。Mは激していつを歸つて了はうかと思つたが、また一方には未練と戀ごゝろとが盛に燃えて、何うにも彼うにも爲方がないので、氣まりがわるいのを咏えて、柳橋のS屋に姐さんを訪問した。

其處で、その姐さんの話で、その邪推と、疑惑とはすつかり除れた。歌子はそんな女ではなかつた。矢張、氣がくさくさして爲方がないといふので、二三日前、Iの女將に勧められて、川の眺望の好い、静かな田舎へでも行つてゐた方が好いとのことで、T川の畔の『枕流亭』へ一人で行つてゐるといふことであつた。Sの姐さんは、これは貴方に教へては旦那にすまないのだけれど、わざぐ名古屋からやつて来た心に同情して話して上げると言つて、そこに行く汽車の道順などを詳しく教へて呉れた。

Mは急いで本所の隅の隅にあるやうなその汽車の停車場へ行つた。

Mは生き返つたやうな氣がした。猶ほ二時間半も汽車に乗らなければならぬことを考へると、明日の歸りにも差支へはないかといふ懸念も起つたが、しかもそれよりも、さうした遠い世離れた川に近

い田舎の宿に歌子を見ることが出来るといふ念の方に強く引張られて、歸りなどは何うでも好いといふ氣になつた。歌子の面影の絶えずチラ／＼する間を、小さな停車場や、麥を刈つて了つた後の田圃や、藻の浮んでゐる汚ない川や、驛の前に客を待つてラツバを鳴らしてゐる乗合馬車などがまじつて通つた。ガタ／＼と遅い速力で、何んな小さな停車場へも一々丁寧に客を拾ふやうにして寄つて行く汽車が終にはもどかしくなつた。Mはがらんとした碌々乗手もない二等室で、横になつたり、起き返つたり、逢つたらうんと酷めてやらうと思つたり、まさか、今かれが行かうと思つてはるまいから、さぞびつくりするだらうと思つて獨りで微笑んだり、また時にはもう着きさうなものだとあせり心地になつて、車室内にかかしてある赤い線や四角な字で連絡してある線路表の前に立つたりした。

あともう二つで、枕流亭のあるKM驛に着くとなつた時には、今度は今迄とは反對に、もしや行違ひに女は東京に歸つて行つてゐるはないかといふことが氣にかゝり出した。かう行違ひになつた時には飽まで物事は行違ひになるものである。ぐれはまになるものである。名古屋から遠くこんな見ず知らずの田舎までやつて来て、そんな眼に逢つたら、それこそ馬鹿々々しい。かう思ふと、親を言ひくるめ、友達をごまかして、女に逢ふためにやつて来た自然の報酬と言ふ風にも考へられて、また行末は何うなつて行くのであらうなどと思はれて、何となく心淋しいやうな氣にすらなつた。

且驛を過ぎて沼が見え出して来た時は、もう午後の四時すぎで、明るい夏の日影がぼつと一面にそこ



に照り渡つてゐた。剖葦が頻りにその喧しい饒舌をつゞけてゐた。

やがて汽車はその終端驛に着いた。ぞろ／＼と乗客と一緒に下りたMは、混雑した村とも町ともつかないやうな人家の軒を並べてゐるのを目にした。トンカントンカン鈍や鉾の音がして、野澤組といふはつびを着た人夫が右往左往に往來してゐるのを目にした。二階建の旅館の赤いメリンスの夜具の干してある欄干に酌婦らしい女が二人立つて何か話してゐるのを目にした。

近く寄つて來た車夫に、

『枕流亭ッていふ家はあるかい？』

『へい、御座います。』

『ちや、そこまで……』

『へい……』

車夫は逸早く車を持つて來た。

色の白い、眼鼻立の綺麗な、見る人が見れば一目でそれとわかるやうな意氣な扮装をしたMの姿は、唯、ちよつと素通りしたばかりであつたけれども、それでもその通りの女達の目を惹いた。

『好い男が行く……』

かう言つて酌婦達は店の方へ出て來た。

土手の方へ曲つて行く道では、すれちがつた土工が、

『何だ、役者見たいな、いやに色の生白い男だな。』

『枕流亭だんべ。』

などと言つてそのあとを見送つた。

土手を上り切ると、さうした混雑と雑選とはあとになつて、心も開けるやうなT川の流れが、橋臺だけ大方出來た鐵橋を前にして、またはそこに舟やら組んだ筏やら赤い煉瓦を載せた木材の堆積やらを前にして、さながら目が覺めるやうにかれの前にあらはれて見えた。帆が一つ徐かに下流から上つて來た。舵の音がギイと聞えた。

瀟洒な門から、砂利を布いた路に車の齒の音を軽く響かせながら、靜かに松の影の濃淡の縞を織り出してゐる間を入つて行くと、不意に離れの方の松の間から、裾をほら／＼させて駈けて來る女があつた。それは歌子であつた。

『まア、貴方？ 來たの！ こんなところに！ まア！』

歌子は履齒の折れるのも知らぬばかりに喜悅に溢れた。

『まア、本當に、私、夢かと思ふわ。今、ちよつと、其處で見てゐたのよ。お客が來たと思つて見てゐたのよ。すると、ちよつと横顔が見えたの。何だかあなたのやうな氣がして、急に胸がドキドキし出



して……。でもね、まさか、貴方がいらつしやるなんて思ひもかけないから、さう思つて見る故かしらなど思つて、松の間から出て来るのを見てゐたのよ。さうしたら、矢張、貴方だつたわ。あ、嬉しい……。』  
かう言つて歌子は子供のやうに、または車夫の手前があるのを忘れて、自分で胸を撫でる眞似をした。

女中頭のお時とお蔦とがその氣勢をききつけて出て来た。まだ入口まで来ないのに下りるといふので、其處にMを下した車夫は、笑ふにも笑はれず、呆氣に取られたといふ風にして其處に立つて汗を拭いた。

『姐さんに聞いて来たの？ それでもよくわかつたわねえ。何處から来たの？ さう昨夜の急行で、名古屋から……。さう、それで、また此處まで来ちや、眠る間もなにもなかつたのねえ。』

(御免なさい、私がわるいんだから。)かうした戀ごころの表情は、Mの體に染みわたつて感じられた。

女中達に案内されて、川の眺めの好い二階の八疊の間へ行つたが、女中達もそれを聞いてめづらしがり、益田は丁度東京に行つて留守であつたが、女將も出て来て、『それは大變ね、名古屋からぢや大變だ。』などと言つて歎待した。

さて逢つて見ると、何も彼も融けて流れて、何から言ひ出して好いかわからなかつた。二人はただ嬉しさをうして笑つて顔を見るばかりであつた。

『それで、病氣は何うなんだえ？』

『まだ、くさくさしてゐるんですけどもね。……でも、もう好いの。』

二人は女中達の下に下りた間に、手を堅く握り合はせて振るやうにしたり、思ひ餘つたやうに、女の弱々しい瘦削な體をぐつと抱き緊めたりした。

『でも、此處は静かだから好いわ。お客なんか滅多にありやしないんですからね。田舎の財産家が妾宅に拵へて置くやうな家ですからね。』

『さつきのがさうかえ？』

『え、さう……。』

『旦那は來てるの？』

『さうね、ちよいちよいでもないけど……。時々來るわ。』

『ちよつと意氣だね。』

『だつて、よし町の千鳥さんツて言つた人ですもの。』

『さうか、道理で……。』

『だから、此處なら、誰れにだつて氣のおける人はないわ。それこそ本當に……。』(天下晴れて何んなことでも出来るわ)と言はうとしてよした。

『本當に、何うしたのさ。』



『まあ好いのよ。かうして顔さへ見てゐれや安心だから……』  
かう言つたが、すぐ、『でも、明日歸らなければやらないの？』

『幕明までには歸る筈にしてあるんだけど……』

『ぢや、大變ね。明日だつて、ゆつくりしてゐられやしないやね。一番で立つつて大變よ。』

『まあ、明日のことは明日だ……。明日になつてから考へることにしやう。一心で來たんだからな、  
これでも……』

『嬉しいわ。』

口に手を當て、キスの形をした。

『でも、向うの方は何うしたえ？』

『旦那？ あれつきりよ。本當よ。かう見えても、これで私、一克者なんだから。一度あゝして斷つたんですもの……。旦那にもすまないと思ふけれども、だつて爲方がないと思ふわ……。いゝえ、そんなことはないわ。そんな風に疑ぐるのはよして下さいよ。離れてゐるのは私だつて辛いんだけど、さうかと言つて姐さんの義理もありますからね。かうして無理な首尾をして呉れやうといふ姐さんですからね。猶ほ義理があるわ。』

は點頭いて見せた。

『だから、私の心さへ疑はずに置いて下されば好いのよ。私だつて、女ですから、矢張離れてゐれば疑ふけれど、現に、さつきだつて貴方が入らつしやるすぐ前だつて、そんなことを考へてゐただけども……。夜なんかだつて、貴方に他の女が惚れたり何かしてゐる夢なんかよく見て、その日は一日氣持がわるかつたりするんですけども、もう私は疑はないわ。だから、貴方も疑はずに置いて下さい。ね、ね、ね、よう御座んすか。』男の身に凭りかゝるやうにした歌子の眼からは涙がほろ／＼と溢れ落ちた。女將の眼にも、女中達の眼にも、更にまた料理番の眼にも、羨ますにはゐられないやうな深い戀中のさまが映つて見えた。『まあ、名古屋から逢ひに來たんですつて……。それ位までに役者衆に思はれたら、女も好いでせうね。』などとお蔭は言つた。

Mは女と打解けて話してから、すつかり心が落附いて了つた。満足と、喜悅と、來た甲斐があつたといふことと、境の世離れて靜かでいかやうにも落附いて歡樂の一夜をすごすことが出來るといふこととが堪らなくかれを愉快にした。そしてその満足と愉快とを、昨夜夜眠らずにやつて來て、更にまたこゝまで汽車でやつて來た疲勞が雜つて縫つた。そしてそれが却つて好い心持にかれを樂ませた。

硝子戸を通して、川の一部がそれと見えるやうな新しい廣いサツパリした湯殿で、女の白い肌と相觸れるやうにして風呂に入つたMは、煤烟やら塵埃やらに汚れた體も頭もすつかり綺麗に洗つて、生れ代つたやうな氣分になつて、鏡のあるところでブラシをつかつたり、役者だけに平生の身だしなみを忘れ



ず白粉下をぬつた上を軽く小さな袋で叩いたり、黒い髪を丁寧にわけたりしてゐると、女は湯の中か  
ら、

『そこに、御園はなかつて?』

かう聲を懸けた。

『あるよ。』

『なら、かして頂戴。』

Mが持つて行つてやると、歌子は石轡をつけた顔を斜にしながら手を延してそれを受取つた。

Mはト座敷などを見てゐるたが、ふとそこに庭下駄があつたので、それを突ツかけて、好い心持で、庭か  
ら松原の方へと出て行つた。日脚の長い夏の日も既に暮れかけて、河に、空に、または松原の一端には  
まだ明るい夕照の影が残つてゐるけれども、上流も下流も既に茫茫と銀の色のやうな沈んだ暮靄に包ま  
れて、帆も舟も何もない川を越し、その向うの平野を越し、村落を越して、ひろい／＼地平線がそれに打  
渡して眺められた。半ば出来かけた鐵橋の橋臺は、夕暮の靄の中に浮び出すやうになつて微かにそれと  
指さされた。下では岸に偏つて流れてゐる水の瀬のささやかな音が夢のやうにきこえた。

川に映つて榮えてゐる夕暮の雲の次第次第に淡く淡くなつて色の褪めて行くのをちつと見詰めてゐる  
と、

『こんなところにゐたの? 何處へ行つたかと思つてさがしてゐたのよ……。』

歌子は美しく化粧した湯上りの白い顔を半ばくれかけた夕暮の空氣の中にくつきりと見せて、同じく  
恍惚と男の見てゐる方に見入つたが、『綺麗ね、雲が、水に映つて……。』

『静かだね。』

『好いところでせう、東京では、こんな落附いた氣分にはなれないわねえ。』

『本當だ……。』

川に映つた雲は、益々色が褪せて、次第に暗く暗くなつて行つた。

二人はそれから松原の中を縫ふやうにして歩いて、歌子が二三日前から來てゐる離れの方へ行つて見  
た。そこからも矢張川が見えたけれども、松原の中に埋れたやうになつてゐるので、一層靜かな幽棲ら  
しい感じがした。

『此處に一人ほつんとしてゐるのかえ?』

『却つて靜かで好いわ。』

『よきさむしくないね。』

『だから、寝る時には、お葛さんに來て泊つて貰ふこととしてあるのよ。お時さんはあれで一人ぢや  
ないんですからね。』



『何うして？』

『料理番の男が、そらあの肥つた男がゐるたでせう。あの人が亭主見たいになつてゐるんですから……。』

『さうかえ？』其處にももう灯が來てゐるので上つて坐つて見て、『ランプだね、まだ此方は？』

『ランプもまた落附いてよくはなかつて？』

『それはさうだね……。』ちよつと考へて、『寝る時は此方の方が好いちやないか。』

『さうませうか。』

『その方が静かで好い……。』………何か言はうとして、女の顔を見て笑つて、更にある要求に促されたやうにして、女の體を抱くやうにした。

『まア、あつちへ行きませう。そして一本飲んで、御飯を食へませう。』

で、かれ等は引返して、二階建の方へと來た。もう日はとつぷり暮れて、さつきまで川に映つて見えるた赤い雲の影も見えなかつた。二階には明るい灯がついて、女中のお葛が膳を運びつゝあるのが長い廊下に見えた。

淺く酒を酌み交はしたり、再び女將がやつて來て暫しの間役者の話をしたりしたが、別に三味線の音も立てずに、『ぢや、さうしますね。離れの方にしますね。』などといふ歌子の聲がきこえて、人々の往來する影が明るい障子の内外に映つた。

お葛が提灯をつけて、二人をその離座敷に案内した時には、もうちやんと寝る支度が奥の一間に出來てゐて、餉臺や烟草盆や茶道具や烟の細く颯つてゐる蚊遣の器などが、皆な入り口の副室の方に持つて來てあつた。そこで二人は暫しの間、戲談などを言つてお葛を相手にしてゐたが、『もう、御用は御座いませぬね。』かう言つて、庭下駄の音高くお葛が歸つて行つたあとは、蚊の鳴聲が細く、新しい蚊帳の青い影も濃やかに、遠くで川水の岸に偏つて流るゝ音が微かにするばかりであつた。女の着物をぬぐ氣勢がさらさらときこえた。

## 二十七

Mはあくる日の幕明きまでには、遂に歸ることが出來なかつた。『まア、好いや、一日用事が出來て歸つて行かれなかつたことにおけ！』父親や興行師の難かしい顔を思ひ浮べながら、明方にちよつと目覺めた時に、こんなことをMは歌子に言つたが、再び疲れて眠つたかれ等は九時近くなるまで、その離座敷から姿をあらはさなかつた。

いくら言つても言つても、またいくら繰返しても繰返しても盡きないかれ等の戀ぢやうであつた。しかしまたいくら互ひに顔を見てゐても、互ひに體を抱き合つても、互ひに心と心とを合せても、それは竟に際限のないやうな戀ぢやうであつた。Mは休む電報を今日少くとも午後の一、二時まで東京に行つ



て打つて置かなければならぬので、『もう一日ゆつくりして行きたい。』などと言ひながら、朝飯をすますと、そのまゝ歸つて行く支度をした。

『それぢやね、疑ひつこなしね。私の心持はわかつたでせう。もう少しの辛抱ですから。さうしたら思ふやうに一緒に暮らせるやうになるから、貴方も體を丈夫に、酒なんかあまり飲まずに、堅くしてゐて下さいね。』

『よし、よし、もうわかつた……。決して疑はない。』

さう互ひに理解し合つても、それでも別れて行くのは辛いやうにお互ひにしてゐた。『十一時の汽車で此處を立てば、二時すぎには東京に行けるから、大丈夫ですよ。そして今夜の九時の急行で行くんでせう……。大變ね。』などと歌子は言つた。いよく出懸ける時には、『私も一緒に停車場まで送つて行くわ。』と言つて、着物を明石の派手なのに着替へて、髪を綺麗に梳いて、わざと車は頼まずに、女將や女中に送られて二人は松原の中を出て來た。

日はT川にキラキラと輝いてゐたけれども、それでもまだそれほど暑いといふほどではなかつた。天氣も好く、緑はかゞやくやうに光つて、鐵道工事の地形の懸聲が靜かにあたりを響いてきこえた。

『この汽車は一體何處へ行くんだえ？』

『Aの機場の方へ行くんでせう。』

『あゝさうか……。この方が近路になるんだな。』

こんなことを言ひながら歩いたが、Mは、

『まだ、ゐるのかえ、此處に……。？』

『さむしいけれど、もう少しゐるわ。向島にゐるよりも、此處の方がいろ／＼なことを聞かなくつて好いから……。』

『旦那が來るんぢやないか。』

歌子はむつとして、『また、あんなことを。よして頂戴よ。疑ひつこなしつてあれほど約束したぢやないの？』

『でも……。』

『でも、何うしたの？』

『矢張、別れが辛いからだよ。一人放つて置くと、不安心でしやうがないやうな氣がするんだもの。』

『疑ひつこなし！』

歌子はMの手を握つた。

段々停車場附近の混雜が近づいて來て、さうしたことも二人はやがて出來なくなつた。歌子は大きく蝶の縫ひのある派手な蝙蝠傘を晴れた日影に翳して、睦しさうに並んで、煉瓦の竈の工場を左に見



て、そして土手下の方へと歩いて行つた。

『まア、来て見ろ、嫁子、嫁子！』などと其處等に遊んでゐた子守達は、ぞろ／＼あとからついて来た。

其處からも此處からも、視線はさうして並んで行く二人の姿に注がれた。上さん達の眼も、酌婦達の眼も、工夫達の眼も、店にゐる男達の眼も……。M屋のお玉は、『ちよいと、ちよいと、お常さん。』などと呼んで、その美しいめづらしい二人づれの方を指した。

停車場に入つて来る時には、丁度そこにある若い車掌のAが、自分の讀んでゐる小説の中のシーンでもそこに發見したやうにしてちつと深くそれに見入つた。

發車までの時間はあと五分しかなかつた。かれ等は茶店に休んでゐる暇もなく、もう其處に集つて來てゐる此處等の上さんや、娘や、商人や、農夫の唄などと一緒に、彼方からも此方からもじろ／＼視線を注がれながら、Booking-officeの前に立つて、名古屋までの切符と入場券を買つたり、何か小聲で途中のことを囁き合つたり、別れが辛らさうな表情をしてお互ひに顔を見合はせたりしてゐるが、やがて改札口は開いて、乗客はぞろ／＼とプラットホームの方へと出て行つた。

Mにつゞいて列車の傍まで入つて行つた歌子は、二等室には、Mの他誰れも乗る客がないので、そのまゝ車室の中に入つて行つて、クッションに並んで腰をかけて、『私も一緒に行きたい』などと言つてゐ

たが、やがて時間が來たと覺しく、車掌が列車の戸を一つ／＼閉めにやつて來たので、あわて、歌子はそこから下りた。

かの女はしかもその窓からその身を離さなかつた。

『さつきのブラン持つて？』

『あゝ。』

『他に忘れたものはないわね。』

『あゝ。』

『ぢや、親方にもよろしくね。姐さんには逢はないでせうから、あとで私がよく言つておくわ。』

Mはまた立つて來て、

『今度は九州をすませてからでなくつちや、歸つて來られないから、ことによると秋になるね。體を丈夫にして、何もくよ／＼思はない方が好いよ。』

『え……』

車掌は相圖の笛を吹いた。

つゞいて汽車は靜かに動き出した。

『ぢや、左様なら。』



## 『御機嫌好う。』

汽車が構内を出て行く間、Mの顔は矢張その窓際から離れなかつた。もう一度手巾を振つて、そして別れて、此方に來た時には、歌子は涙が胸に一杯にこみ上げて來るのを覺えた。

歌子は出口から停車場の外に出て、そして靜かに歩いた。さびしいさびしい氣がした。で、通りへ出てバツと再びその蝙蝠傘を開いたが、そのまゝ周圍から視線の集つて來るのなどには頓着せず、緩かに歩を運んで、川の見える土手の方へと登つて行つた。縫ひ取りしたその蝙蝠傘の大きな蝶は、さながら伴侶に離れたもの、やうに、暫し土手から松原の方へとさびしく動いて行くのを人々は目にした。

## 二十八

その年の秋も末の頃であつた。

すぐ下流にあるA村の貧しい一人の漁師は、その日の生計に、蜆でも獲らうと思つて、小舟に棹さして、夜のまだしら／＼明けの頃から、川岸をすつと枕流亭の松原のあるあたりまで來た。一昨年も去年も水は出ても、さうひどい洪水もなかつたが、今年は雨が多かつたのと、凄じい九月の暴風雨があつたのとで、九合目あたりまで水が溢れ、一時は枕流亭も危いなどと人々に思はれたほどであつたが、また三分の二ほど出來かゝつた鐵橋の一部が、濁流を堰いたために、凄じい奔漲を來し、臺座の一部と橋枕

とが流されて、大騒ぎをしたほどであつたが、その騒ぎも今は靜まつて、水は以前のやうに砂洲を挟んで碧く流れ、虹霓のやうな鐵橋が朝に夕に川霧の中に浮んで見えるさまは、さながら繪を見るやうな心地がせられた。『えらいもんだな、機械の力といふものは……もう橋があんなに出來た。』T川を渡つて行く人達は、いつもこんなことを言つてそれを仰いだ。

その日も矢張此頃に多く見るやうな霧の深い朝であつた。漁師は小舟を軽く操りながら、河岸から河岸へと、蜆を捜すやうにして漕いだ。この川の蜆は、さう澤山は獲れなかつたけれども、粒が大きいのと、味が好いのと、質が上等であるのとで、料理屋へ持つて行くと、割合に高く賣れた。それに、今では川に漁獲物が少くなつたために、労働者は多くは農の方に使はれて、昔のやうに川を撈ふのを業とするものは少なくなつてゐた。朝の仕事に五六升乃至七八升も取れば、それで一日の生計の半ばを助けることが出來た。その漁師は『蜆の民公』と言はれて、あたりにそれと知られてゐるやうな男であつた。

舟を瀬に偏せて、棹の先についた道具で頻りに川の底を撈ひつゝやつて來た民は、今しも漸く枕流亭の松原の下流のところ來て、ほつとして煙管を腰に探つて、そしてマッチを磨つて、それに火につけた。深い朝霧は川の瀬に斷たれるやうにして流れた。そしてその間からは鐵橋の大きな姿がをり／＼見えては隠れ、隠れては見えた。

のんきさうに煙草をふかしてゐた民は、ふと、その自分の舟を繋いでゐるところから五六間を隔て、



白い赤いまた黒いやうなもの、ふわ／＼漂つてゐるのに眼を留めた。

『何かしら？』

かう思つたが、昨夜の風に枕流亭の女中の洗つた干物でも飛んで落ちたんだらう位に思つて、別に氣にも留めなかつたが、さて烟草も吸つて了つて、あらためて仕事にかゝらうとして、舟を少し上流に進めつゝ、もう一度そつちに眼をやつた時には、民は我知らず『あッ！』と叫んだ。

驚くべき光景がそこにあつた。赤いと思つたのは女の腰巻や着物で、白のは男の腕と女の腕とばかり抱き合つてゐるのであつた。

女の色の白い顔は男の突伏した頭の傍に仰向けに見えて、そこからつづいた女の髪は瀬に長く黒く解けて動いて流れてゐる。着物はまくれて、男の腿のあたりと女の足と重つてゐるのもそれとはつきり見える。かれ等は體をしつかり伊達巻で結んで、そして淺瀬から此方へ飛込んだものと思はれる。

思ひもかけずかうした驚くべきめづらしい光景に眼を留めた民は、始めばぎよつとして驚いたが、次第に冷靜な心持になつて來てゐた。『ふざけた眞似をしやあがつたな。』つゞいてこんなことを思ひながら、棹でその死屍を突つて見た。するとその二つの死屍は動いた。

民はゾツとした。

『しやうがねえ奴等だな。』

まさか放つて置く譯には行かなかつた。民はもう一度その方に眼をやつたが、そのまゝ舟を棹で押して、そこからいくらない枕流亭の雁木のところへ行つた。

（そこにやつて來た奴に相違ない……）かう思ひながら、かれは雁木のところから、石だゝみになつてゐる階段を上つて、そしていきなり女中達や料理番の寝てゐる室の雨戸をドン／＼叩いた。

『おい、大變だ、大變だ……』

夜が遅いので、かれ等はまだ夜中であるらしく、容易に内では應へがなかつたが、やがて遠くで返事がして、急いで此方に來る足音がした。

隅の雨戸が一枚明いて、そこにだらしない眠むさうなお時の姿があらはれた。

『お前んとこのお客ぢやねえか。心中したものがあるぜ。』

『え？』

『心中だよ。えらいことをやつたもんだ。』

『何處にさ？』

お時は目をこするやうにした。

『すぐ、そこに、二人、男と女とが抱合つて心中してらア。』

『本當かえ？』



『本當にもうそこにも、来て見れやわかるア。すぐそこだ……。俺ア、今、見附けたばかりだが、びつくらして了つた。』

お時も驚いたやうに、急いでそこにあつた庭下駄をつツかけて、民と一緒に雁木のところまで行つて見た。成ほどそこには二つの死屍の浮いて漂つてゐるのが見える。

『ちや、家の客かも知れない。ちよつと待つて……』

かう言つてお時は駆け上つたが、そのまゝ松原の中の離座敷の方へと走つて行つた。暫くしてお時が戻つて来た時には、女將もお薦も料理番も皆な其處に出て来てゐた。

『矢張さうだ……』

『え、Dさんが……？』

女將は吃驚したやうにして、がた／＼身を震はせた。

皆な出て行つて見た。今度はお時は民に舟に乘せて貰つて、その死屍の漂つてゐるところまで行つて見届けた。

『Dさんがまア……。なんて言ふことをして呉れたんだらう。これは大變にも何にも……。あのS子さんだつて、まア——』女將は昂奮せずにはゐられなかつた。

『何だと……Dが心中した。』

丁度来て泊つてゐた益田は、どてら姿で其處にやつて来て叫んだ。

有名なDと有名な音楽家のS子、その二人の Love Affair は世間でも知らないものはないのであつた。かれ等はこれまで何ぞと言つてはよく新聞に書かれて騒がれた人達である。この刹那にも益田の胸にも女將の胸にも何うしてもさうなつて行かなければならなかつた二人の戀が思ひやられた。二人のことを知つてゐるだけそれだけ一層強い昂奮に打たれた。

『どれ、行つて見よう？』

益田が先に立つて、女將と料理番とがそれにつづいた。お薦も下りて行つた。皆な舟に乗つて其處に行つた。

『えらいことをして呉れたな。』

その状態の眼に入つた時、益田はかう黯然として言つた。

『まア、まア、二人一緒に……。なんていふことでせう。』

女將の聲は涙に曇つた。お薦も料理番もただ黙つてそれを見た。川の瀬は女の解けた髪を長く／＼流した。

いろ／＼なことが胸に上つて来て、益田も女將も暫しは唯その二つの死屍に對したまゝ、何とも言へなかつた。急に、益田は、



『兎に角、手をつけるわけには行かん。警察に届けて、検視が来るまでは……。定公、』と傍にゐた料理番を呼んで、『お前、大急ぎで、停車場前の派出所に行つて届けて来て呉れんか。』

『かしこまりました。』

で、舟を再び雁木の處に戻して、一同岸に上つたが、飛んで行きかけた料理番を益田は後から呼びかけて、『早く行つて、不取敢一緒にあの巡査に来て貰へ。あゝして川の中に放つて置く譯にも行くまいから……。』

料理番は走つて行つた。

『何時頃やつたらう？』

『さア、ね、明方ぢやないかしら……。昨夜はそんな風は少しもなかつたんですがね。睦じさうに、當り前にして話してゐたんですがね。』かう言つて女將は考へてゐたが、『勿論、Dさんも、S子さんも、すつかり世間からは相手にされなくなつたし、家の方も駄目になつて行くし、悲觀してはゐりました。』

『昨夜は何時頃に寝たんだえ？』

『十二時でしたよ、もう……。ねえお時？』

『え、さうでした。……。私がいゝんなものを下けて来て、此方へ來ると、丁度時計が鳴つてゐましたから……。』

『えらい騒ぎが起つたな。』

かう言ひながら、益田と女將とお時はそのまゝ松原の中の離座敷の方に行つて見た。

離座敷の表の雨戸は一枚明けたまゝになつてゐる。足袋跣足で急いで死に赴いたと見えて、男の下駄も女の下駄もそのまゝになつてゐる。寢床も夜着も後にはね返したまゝで、巻烟草の殻が丸い火鉢に一杯にさしてあつて、敷島の袋の中にはまだ五六本残つてゐるのを人々は見た。ランプも薄くそのまゝに點いてゐた。あたりには女の手提だの、ぬいだ羽織だのが一杯に散らばつてゐた。

『まア、これも此まゝソツとして置け……。警官に見て貰つてからでなくては、手をつけてはいけんから……。』かう益田は言つたが、『何も書置見たいものはないかえ？』

棚の上や蒲團の下をさがして見た女將は、

『何もないやうです？』

『ふいと思ひ立つて、死ぬ氣になつたと見えるな。』

『さうですね……。急に、さういふ氣になつたらしいですね、明方ですね、屹度……。』

『さうかも知れない。三時か四時頃だつたに相違ない……。』

『何んな心持でしたらうねえ。』

不意に染々同情するといふやうな調子でお時は言つた。



一同は暫く沈黙した。

『まア、しかし……出来たことはしやうがない……。Dの家とS子の家と、それから他にも心當りなところに、電報を打つてやらなくてはならない……。』

かう言つて益田も皆なと共に母屋の方へ引返して來た。益田は、巡査の來る間に、その電報を書くべく女將と二人で居間の方へ入つて行つた。

料理番が停車場の派出所に走つて行つた時には、若いその巡査は、また起きたばかりで、和服で井戸のところで齒をみがいてゐるたが、『え？ 心中？ それは大變だ？』かう言つて此方に來て、更にまた、

『え、DとS子！ あの評判な、新聞にかゝれた？ そいつはえらい事だ？』と眼を睜つた。

早速、電話の把手を廻して、H町の本署にそれを報じたが、『え、さうですか……。そのまゝにして置く？ よろしい。成るだけ早く……。よろしう御座います。』かう言つてそこを離れて、大急ぎで、制服を着て、劍を吊るして、走つて料理番と一緒に通りに出た。

其處で行違つた驛長は、

『何です、泥棒ですか？』

『いや、心中！ しかもDとS子の心中！』

『え？』

『あの評判な、DとS子！』

『昨夜ですか？』

『今！ 今！』

かう言つて若い巡査は走つた。

驛前の家々では、もう皆な誰も起きてゐて、枕流亭の料理番と派出所の巡査と一緒に何か事ありけに走つて行くのを見た。『え？ 心中ですつて！』かうした低い囁きがそれからそれへと傳へられた。

土手の上を二人の駈けて行く姿が、川霧の半ば晴れた朝日の影の中にくつきりと見えてゐた。

若い巡査は何も別に變つてゐない靜かな松原の中の家屋を見た。女中のほんやりして立つてゐるのを見た。女將のお世辭の好いいつもの姿を見た。蜆を取る民は、行きが、りりで、仕事をすることも出來ず、依然としてそこに舟を寄せてゐるたが、巡査の姿を見るとそのまゝ急いでその舟をまた岸に寄せて來た。

『民が見附けたのか？』

『え、さうだ……。』

『何處だ？』

忽ちその二つの屍を見た若い巡査は、

『フム。』



と言つたぎり、凝つとそのめづらし光景に眼を注いだ。  
暫くして舟を戻して岸に上ると、

『旦那、もう好いすな、歸つても……』

『まア、待て。検視が来るまではそこらにゐなくつちやいかん。』

『仕事はして、も好いだな？』

『仕事はしてゐても好いが、そこらにゐなくつちやいかんぞ。』

かう命令するやうに言つて、今度は女中のお時と女將を先立て、松原の中の離座敷の方へ行つた。

『いつ来たんだ？』など、言つて、若い巡査はいろいろなことを女將に聞いて、それを手帳に書き留めた。

且町には裁判所の出張所があるので、検視の人々もさう手間を取らずに署長と一緒にやがて車でやつて来た。かれ等も矢張同じやうにして川に行き、離座敷に行き、それから女將や女中を調べた。料理番と僕と若い巡査と、それに民も手傳つて、死屍を舟の中に引揚げた時には、派手な女の着物はびたりと白い肌にくつ附いて、長い髪からは水がほたくと滴り落ちた。男の濡れた頭はぐたりと垂れて、いくらか水に膨れた足は女の足と重なり合つた。

二つの屍を結び附けた赤い青い女の伊達巻を料理番が取らうとすると、

『さうやつておけ！ そのまゝにして置け！』

かう検視の人達は言つた。

『Dと言へば、世間でも知られた學者だのに……。残念なことをしたもんだ……。』

かう署長が言ふと、

『何うもしやうがない……。いろ／＼譯もあつたらう？ よく／＼でなくつちや、女だつてこんなことはしまいから……。これも悪因縁ぢや。』

醫者は形ばかりの検視をした。『さア、明方だな。しら／＼明け時分だ……。三時間とは経つてゐない。』などと言つた。

で、種々に調べて書取つたり何かしたが、そのまゝにして離座敷に置く方が好い……。〔遺族のものがやつて来るまでそのまゝにして置く方が好い。〕といふので、今度は戸板が持つて來られて、それを舟からその上へと移して、皆なしてそれを離座敷へと運んで行つた。

民は、

『もう、好かんべ。おらは歸つても……。えらい眼に逢つた……。死んだ奴はしやうがねえが、おらぐづ／＼してはゐられねえ。これから稼業に行かねえぢや、一日さまが送れねえで。』こんなことを言つて、始めて警官の許可を得て、そして舟に鹽などをまいて、急いで下流へと漕いで行つた。



愛慾の羈絆、歡樂の報酬は必然に人間をかうした境に陥れて行くといふ悲劇の気分は、昨夜からこの朝明けの間にかけて、この狭い離座敷の空氣に漲つたが、それも二人からその近くの周圍へ、またその近くの周圍からそこに出合つた人達へ、更に、停車場の人達へ、廣い世間へとひろがつて傳へられて行くのを誰も彼も感じた。誰も彼もそこに自分を發見した。自分の心を發見した。どんなに豪い人間でも、また何んなに世間に名譽のある人達でも、學問のある人達でも、愛慾の深い試みに逢つては、到底かうした悲劇に逢はなければならないことを思つた。『まア、ねえ。よくよくだわねえ！』M屋のお玉もこんなことを言つて、それが單に他人の身の上の話ではないといふやうにしてお常に話した。若い車掌見習のAは、またしてもそれを外國の小説のシインの中の一章に引較べて考へた。

しかし一日の忙しい仕事にそれ／＼従事してゐる人達は、鐵橋の工事や材料の運搬に執掌してゐる人達は、『ほ、それはえらいことだ！』などと最初は眼を睜つたり心を驚かしたりしたが、やがてはそんなことには頓着してはゐられないといふやうに、またはそれが自分の身の上や、その近い周圍に起つたことでないのを好いことにしてすぐ忘れて了つたやうに、てんでにその仕事の方へと出かけて行つた。いつものやうに日は照り、川は流れ、トンカントンカンする音はあたりに賑やかにきこえた。

とは言へ、DとS子の心中は、大きな事件であつた。午後からは、それに驚いた人達が列車毎に十人や十五人はやつて来て、色濃い光景が到るところに渦を卷いた。フロックコオト、羽織袴、悲痛な昂

奮した顔、S子の友達らしい此處等に滅多に見られないハイカラな女の鬘、派手なネクタイをした男、さうした人達が、或は車、或は徒歩で、土手から松原の中の方へと行つた。たしかにDの細君と子供らしい一行がその中に雜つてゐたといふので、いろ／＼な噂がまた更に新しい噂を生んで行つた。

新聞記者も大勢それを報道するためにやつて来た。さういふ人達は、M屋に寄つて聞いたり、派出所へ行つてぢかに若い巡查に逢つたりした。やがて二人の遺骸は、東京へ持つて行くといふことにきまつて、その夜の九時の汽車で、それをこゝから運ぶことになつた。停車場附近は次第に雜選した。

白い二つの棺が松原の中から、土手を通つて、此方へと下りて来る頃には、もうすつかり夜になつて、秋の冷めたい霧は茫とあたりにかゝつて、停車場前の灯の影の下に動いてゐる家や、車や、人の雜選がさながらほかしのやうになつて見えた。通りでは誰も彼も皆な出て見てゐた。お玉やお常やお政も見てゐた。Y屋の上さんも見てゐた。やがてその白い二つの棺は、大勢の都會の人々に護られて、通りから停車場へと入つて行つた。『それ、それ、あれが奥さんと子供だよ。残された人も可哀相だねえ。』かういふ聲が群集の中でした。

都會での評判はしかしこれ以上であつた。翌る日配達された新聞といふ新聞には、『DとS子の心中』といふ大きな見出しで二段三段にわたつて書いてあつた。このさびしい野の一角は、忽ち世間に知れ渡つて了つたばかりではなかつた。小説以上のロマンチックな物語は、長い間噂の種となつて人々の頭に



残つた。松原の中の離座敷とT川と蜷取りの男の舟と一緒に……。

## 二十九

T川に架けた鐵橋は次第に完成を急ぎつゝあつた。

そのDとS子の情死のあつてからは、もう三月ほど経つた。橋は既に此方から向うに架け渡されて、案内を知つたものは、それを渡つて大きなT川を渡つて行くことが出来た。今年の躑躅の頃までには、何うしてもT町まで開通させるといふ豫定で、會社では頻りに工事を急いでゐた。

月の明るいある夜の十時すぎであつた。Y屋の隣の小料理店から、かなり酔つて蹠蹠として出て來た二人の男の影があつた。共にこの近在の農夫らしく、『大丈夫ですか……では御機嫌好う。』などと今まで相手にした酌婦に送られて出て來た氣勢がしたが、やがて二つの影は、あとになり、先きになりして、土手の上へのほつて行つた。

『おい、虎！』

などとあとから歩いて行く方の男は呼んだ。

『何だ……』

前の影は立留つた。

『橋に行くか。』

『うん、橋に行くべい。』

また黙つて二つの影は歩いた。

いくらか霞んではゐるが、明るい月は大空に高く昇つて、川の瀬のキラキラと金屬のやうに輝いてゐるのがそれとさやかにその下流に見えた。鐵橋の大きな欄干の影は、ところ／＼橋板の上に黒く落ちて、をり／＼そこを渡つて行く二人の影と重り合つた。

『仲好くすべいな、おい虎！』

『仲好くすべい……』

『好いぢやねいか。何うせ、おらたちは親類だ。ともかく親類だ……。そのためにや、ある時にや米もやらア、金もやらア、あのあまツ子だつて、俺らとお前と二人でやつてゐたつて好いぢやねえか。』

『いゝとも……』

『でも、さつき、それと貴様が知つた時にや腹立て、ゐたぢやねえか……。でもな、つまんねえや、腹なんか立てちや……。女は女よ、野郎の相手になつてせえすれや好いんだ……。貴様と俺と仲好くして、代り代りにやつてゐれや好いぢやねえか。貴様の邪魔もしねえ代りに、俺だつて、貴様の邪魔はしねえつもりだ。……何うせ道具だあな、女は……。なア、これ、虎、さうぢやねえか。』



『さうだ、さうだ。』

『貴様、まだ何か俺に向つて遺恨を持つてゐるか。持つてゐるなら言つて呉れ……。持つてゐねえ、さうだんべい……。持つわけがねえ。さつきは貴様は怒つたけども、それは怒るのは無理はねえ。人間だからな。血が通つてゐるだ……。俺のほれた女を他の男がやつてゐるときけや、誰だつて好い心持はしねえにきまつてゐらア。しかし、怒つて、取りつこをして見たつて、しやうがねえぢやねえか。助六ツてな、俺もいつか見たことがあるが、あれや芝居だ……。喧嘩して切つたり張つたりして見ねえ。何方かきられるア。なア。さうすれや何方かごねるア。なア。するとあまつ子を可愛がりたくつたつて、可愛がれなくなるぢやねえか、何方かが……。つまんねえこんだ。それよりは二人持ちにして置くのが一番好いや、無事だ……。』

『さうだ、さうだ。』

『さうわかつて呉れれや、俺も安心だ……。なア、虎、さうぢやねえか。あのあま、好い肌をしてゐるぢやねえか。あの調子が何とも言へねえぢやねえか。こら……。』

『貴様、酔つてゐるな、危ねえぞ、熊？』

『大丈夫だえ。あゝあのあまも好いが……。なア、虎。それよりも……。これよりも、もつと好い奴があるぜ。』

『さうか。』

『貴様も知つてゐる筈だ……。』

『まア、よせよ。』

『何故？』

後から早足に寄つて行つて、

『何故だえ、こら、虎。貴様は俺と親類だ。なア、わかつたか。』

『わかつた、わかつた……。』

『貴様はくやくしくねえな。……。感心だ。さうなくつちやなんねえ。俺が貴様の鼻と……。』

『よせ、よせ。』

『何もよさなくつたつて好いや。鼻、貴様の鼻は好い鼻だつて言ふんだよ。好い白い肌をしてゐるな。やさしくつて好い……。』

『馬鹿にするな！』

虎は心を据ゑ兼ねたといふ風で、一三步あとに戻つた。

『もう言はねえ、言はねえ。』

熊は蹠蹠として立留つた。



虎はさつき自暴酒を非常に呷つたことを思ひ出した。もう腹にも据ゑ兼ねたと思つたことを思ひ出した。しかしかれは押へに押へた。その爲め飲んだ酒も酔を發しなかつた。しかし、何うすることも出来ないであつた。かれは三年の間も熊に對して忍んで來た。見て見ぬ振をして來た。かれは熊に對して何うすることも出来ないほど物質の補助を受けてゐる。また権力の強い淫奔な妻についても忍んで來た。何のために、二人ある子供のために……。さつきも自分の買つてゐる女をわざと面白半分に金を積んで熊が自由にしてゐることを知つた時には、むつと腹が立つて來て、われをも忘れて、この重ね重ねの恨を晴さずには置かれないうな氣がしたが、それも何うやらかうやら押へて一緒に歸つて來たのであつた。

急に、淺ましい自分の境遇、子供のためとは言へ、不貞の鼻、そればかりでない、その不貞な鼻を自由にしてゐる男にまで、かうして馬馬にされてゐる自分の境遇が思ひ出されて來て赫となつた。

『餘り馬鹿にするな。』

『助六は御免だ……助六は御免だ……』熊は戲談のやうにして、たじくとあと退りをしながら、『好いぢやねんか、親類だ……貴様と俺と二人して可愛がつてやれや、お鼻だつて喜んでゐるぢやねんか。』

『馬鹿を言へ！』

堪らなくなつたといふやうにして、虎は近寄つて、ほつかりと一つ熊に喰らはせた。

『打ちやがつたな、此奴？』

『打つたがわるいか。』

『生意氣な……。打つたな。貴様のやうな、人に鼻を取られ、女を取られ、金せいもらへや好いと思つてゐるやがる奴の癖に、俺を打ちやがつたな。』

『何を言ひやがるんだい……。』

激怒が虎を捉へたといふやうにして、かれは猶ほほか／＼と熊を打つた。熊も負けてはゐなかつた。それに、何方かと言へば虎よりも、熊の方が體格も大きく臂力にもすぐれてゐた。

二人はたうとう眞剣な櫻合ひを始めた。それは丁度橋を七分ほど渡つて來たところで、明かに月は橋の欄干を照してゐた。二人が手を舉げて櫻合ひ、撲り合ひ、梟ては組みついて上になり下になりするのが黒くはつきりと橋の板に映つて動いた。

夜は寂としてゐた。誰も橋の上を通つて行くものはなかつた。

『黙つてゐれや好い氣になりやがつて……。八裂にしても足りねえうぬだ。』

『生意氣なことをぬかすな。』

組みつ、轉びつして猶暫くの間二人は橋の上で争つてゐたが、突然、虎は熊の頭を攫んで、それを橋



の大きな鐵の柱にうんと言ふほど打ちつけた。『うん、うん——うん』と言つたと思ふと、熊はぐたりとなつた。オヤと虎の氣が附いた時には、その一撃が急所に中つたと見えて、足を長く、手の尖をブルブルと動かしながら、熊はがつくりそこに身を横へた。

『さまを見やがれ。』

かう虎は口に出しては言つたが、また積年の遺恨が始めて酬いられたやうな快感を覺えたが、しかも少し経つて、熊の口に手を當て、見たかれは、ブルブルと身を顫はせ始めた。脆くも熊は死んで了つたのである。今まであんなに侮辱を自分に加へた熊はもうゐないのである。かう思ふと、一種の恐怖が、何は兎も角自分がさうした罪を犯したといふことが、恐ろしく虎を攫んだ。もう一度かれは熊の傍に寄つてぞつとそれを見た。熊は矢張死んでゐた。ふと、『さうだ……さうしやう、川に放り込んで置け……。さうすれや酔拂つて落こつて死んだと人は思ふわ。……なアに、俺は知らねえつて言つてさへすれや好い。』好いことを思ひついたといふやうにして、虎はその死屍を引張つて来て、橋板のまだ完全に出てゐないところから川へと突き落した。同時に水煙のサツと颯るのが月の光に見えた。

虎は一散に駈けて鐵橋を向うに渡つた。

## 三十

虎はやがて捕へられたが、遂にその罪跡を蔽ふことは出來ず、W町の監獄署へと收監された。その事件の真相や、虎に對する同情や、捕縛された時の状態などは、地方版の新聞に詳しく書かれて、一時あたりを騒がせたが、それもほんのわづかの間で、次第にその橋上の悲劇の話も人々の口に上らなくなつて行つた。

その頃には、會社の人達が頭痛に病み、時にはとても架る見込はないと言はれてゐたそのT川の大きな長い鐵橋も、最早ほぼ完成に近く、虹霓を横へたやうなその姿と、丸い弓形の橋柱とは、高く巍々としてあたりに聳えた。遠く平野を旅行する人々も、それを一里二里を隔てた地平線の上に發見して、『や、いよく鐵橋がかゝつたな、豪氣なもんだな。』など、言つてそれを仰いだ。

時には朝の深い霞に包まれて、ほかしたやうに半ば浮いて見えてゐることもあれば、時には斜に暖かい春の雨が降つて、その上を番傘をさした人々がチラホラ通つて行くのが見えてゐたりした。かと思ふと、晴れた朝の空にくつきりと捺したやうにまた繪のやうにあらはれて見えた。好奇の近所の田舎の少年達は、小舟に櫓を押して、わざ／＼その橋の下に行つて、その太い橋の支柱を叩いて見たり、顔を押し附けて見たりなどした。夕日はいつも明るくそれを照して、川には金屬の美しいかがやきを漲らして



るたが、それもやがては薄暮に近く、柔かな光線の中に次第に埋められて行くのを人々は見た。  
をりく帆がその下を通つて往來した。

## その三

一

『え、それや大變だ……』

『うそだらう？ そんなことはないだらう。こゝに停車場がなくなるなんてそんなことがあつてたま  
るものか。』

『でも、本當らしいよ。』

『誰がさう言つた……』

『驛長などももう知つてゐるらしいよ。何でも此處はH町との距離も近いし、A町、K町に行くにも

渡しがないだけに向うの方が便利だし、何でも會社では、川をわたつて十五六町行つたところに停車場  
を置く方針らしい。それもごく小さな驛で、此處のやうに大きなものにはしないらしい。T町の停車場  
を大きくして、行く行くは、S町の方へ支線を出す計畫らしいから。』

『本當かな。えらい騒ぎだぞ……、それは。』

俄に思ひもかけない恐慌が天から湧いて來たといふやうにして、其處に住んでゐる人達は騒ぎ始めた。  
勿論鐵橋が出來たら、此處も多少はさびれるだらうとは、誰にも豫想されてゐないことはなかつたけれ  
ども、しかもその鐵橋の完成が、そのまゝ、かれ等にさうした滅亡乃至凋落の舌運の手とならうとは思は  
なかつた。誰も彼も皆な狼狽した。動搖した。何うなることかと思つた。

『此處に、停車場を置いて呉れさへすれや、それで好いんだ。何も物好きに、向う側の人もゐない桑畑  
の中になんか新規に立てなくつたつて、此まゝにして呉れれや好いんだ。さうすれば、此處は此處でこ  
のまゝに發達して行くんだから。』

重立つた人達は處々に寄り集つて、かう言つて、その計畫の撤回されることを會社側に運動した。M  
屋の主人も、Y屋の主人も出かけた。煉瓦の竈の工場の主人は、一時いくらか好運であつたのを、自分  
からその生活を自墮落にして、妾狂ひなどをして、折角儲けた金をなくして了つたので、今はあら方駄  
目になつて了つてゐるけれども、それでも矢張その連中の中に顔をつらねた。土手の溜りの車夫の統領



も出懸けた。

枕流亭の益田は、さうした群の中では、一番有力な、口の利ける、また會社側にも知人の多い方であるが、何でも、此頃、その妾の女將が長い間こつそりそこで東京の役者と構曳してゐたのが知れて、それもそのDとS子の情死や何かで、新聞記者達が犬勢入り込んで来たために知れたのださうだが、そのためこの頃では女に對して怒つて、滅多に東京から歸つて来なくなつてゐた。従つて連中の一人が逢つてその話をした時にも、『何うもしやうがない。會社の方針なら、何うもそれも爲方がないぢやないか。』といふやうな何うでも好いやうな張合のない返事をした。

でも、その連中の人達は、會社の社長をわざ／＼訪問したり、陳情書を出したり、代議士を中に立てて話をして貰つたりした。社長も、重役も、それを聞いては、多少氣の毒に思つたらしく、善後策の餘地を與へて、一時なだめてかれ等を歸したが、しかしさうかと言つて、社の鐵道の根本計畫——他日、政府に譲り渡す場合をもその中に含んだ根本計畫をそのまま、放つて了ふことは出来なかつた。

一時人の目を驚かすやうな繁華の渦をあたりに漂はせた驛前の人達も、次第に自分等の希望の到底達せられるものでないといふことを竊かに感じ出した。歎息がそこでも此處でもつかれた。さびしい陰氣な影がその一帯の地を蔽つた。

T町まで汽車が通じたところで、此處には眺望の好いT川があり、水鳥の澤山下りる沼があり、躑躅

を見に行く人達だとして、分福茶釜は此處から行く途中にあるのであるから、いくらかは少くはなつても、好奇に此驛から下りて行く人達も多からうと思つてゐたのであるのに……。また、これからは今までのやうな熱狂的な繁華は求めることは出来なくなつても、地味な、眞面目な發達は却つて今後に於いて期せられると思つてゐたのに……。それが忽ちにして滅亡と凋落の否運に遭遇しなければならぬとは誰が豫期してゐたであらうか。従つて賑かになつて好いと思つたその立派なT川の鐵橋も、今ではかれ等に恨めしく映つて見えた。かれ等は寄るとさはると、その繁華の間に儲けたことは言はずに、そこに資本を下したことなどをのみ話した。愚痴が到るところで出た。

『またもとの李阿彌か……。しやうがねえや。』Rの渡しの船頭は、それを耳にして、こんなことを言つて笑つた。

次第にかれ等は現在よりも將來のことに頭を轉ずる方が銘々の利益であるといふことを考へ始めた。『何うもしやうがない。……それよりも、此處は思ひ切つて、T町の方で豫じめ土地の利権でも得て置く方が利口なやり方だ……。』かういふ風に誰も彼も思ひ出して來た。M屋もY屋もその他の人達も今度はさういふ方針に向つて會社に運動した。

花は咲き、草は萌え、林といふ林は新しい芽で生々した色を着け、野には糸遊のなびく間に農夫がのんきさうに田をひつくりかへしたり何かしてゐるのにも拘はらず、また川を越して新たに出來た小さな